

---

# 綾

葛城

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

綾

### 【Zコード】

Z9840F

### 【作者名】

葛城

### 【あらすじ】

どこのでもいる少女、高田綾。彼女は出来の良い姉と比べられ、周囲から蔑視され、愛情を受けることなく生きていた。クラスメイトから酷い虐めを受け続けた中、綾の中で不思議な力が湧き上がり、虐めていた人達を返り討ちにする。そのことに強いショックを覚えた綾は1人全てから逃げる。とある公園で休んでいた綾の元に、喜一と名乗る青年が声を掛ける。初対面にもかかわらず、喜一は優しく綾を気遣い、無償で家に泊めてくれる。不信感を覚えながらも、綾は彼の家に転がり込んだ。綾は始めて人の優しさに触れ、甘えた。

だが、ある日喜一は謎の男に殺されてしまう。その日、綾の復讐の旅が始まった。  
＊ジャンルをその他に変更しました＊

## 第一話・プロローグ（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださいと  
うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています。\*

## 第一話・プロローグ

ソレは、歓喜の産声を上げた。

赤い生命の中で、ソレは喜びの歌を歌つた。

(ああ……ついに、ついにこの口がやってきたのね……)

ソレは自らの母体になる、赤ん坊の中で、願い続けた儂い希望が叶うことを、心の底から喜んだ。

(そういえば、周りの状況は？)

今まで通り、母体の目を通して辺りの状況を確認する。だが、それが出来ないことに、ソレはすぐに気づいた。まだ母体は生まれたばかりの赤ん坊なのだ。まだ眼球を使うことなど、もちろんできないのだ。

無理をすれば、出来ないことはないが、それでは母体を傷つけてしまう。

ソレにとつて、そんなことは出来るわけがなかつた。

(ああ……私ったら、お馬鹿さんね……)

ソレは、自分の軽率な行動を恥じた。

長い、気の遠くなるような長い時間を生きたソレは、そんな当たり前なことを失念していたことを、深く反省した。

しかたないので、母体の皮膚の一部を変質させ、耳を作り出す。

もちろん、見た目には全く見分けが付かないようにして、だ。

そうすることによって、ソレは不完全ながら、外部の情報を知ることができた。

『あ、高田様、もう大丈夫ですよ、安心してください』

ソレは声の音程から、今しがた喋った人物を男だと判断した。年齢は30代後半から、50代前半まで。ソレの記憶から判断すると、人物は医者だとも判断した。

『ありがとうございます、先生。恵子、よく頑張ったな』

ソレは声の音程から、今しがた喋った人物を男だと判断した。年

齢は20代後半から、30台後半まで。ソレの記憶と、言葉の内容から考えると、声の人物を母体の父親だと判断した。

『奥さんでしたら、今は眠っています。出産で疲れたのでしょうか?』

『そうですか……それで、恵子の容態は?』

『詳しい検査をしてみなくては分かりませんが、ただ疲れているだけでしょうね。一度目の出産でしたし、精神的な疲労も軽いでしょう』

『本当に、何から何までありがとうございます。ところで、この子は男の子でしょうか、女の子でしょうか?』

(女の子よ)

聞こえないと分かつていてるが、ソレは答えた。

母体が人間の形になり始めた時点で、ソレは母体が女の子であることが分かつていていた。

誰よりも早く母体のことを知つていたということを、不思議と誰かに自慢したい気持ちだった。

『可愛い女の子ですよ。将来は美人になりそうな顔立ちをしています』

(美人に決まっているじゃない)

ソレは医者の言葉を補足した。

『ところで、この子の名前は決めてありますか?』

『はい、決めています。女の子なので、綾、という名前にしようかと…』

『綾……良い名前じゃないですか』

アヤ……綾……か。

ソレは母体の名前を、何度も胸の中で反芻した。何の変哲も無い名前だが、愛しいものの名前になると、どうしてか特別な名前に思えててしまう。

(よろしくね……綾)

別れの言葉を母体に、綾に掛ける。

赤ん坊の女の子、綾は、答えることはなく、スヤスヤと寝入つて

いた。

じうして、綾は元気な女の子として生まれた。

同時に、綾は運がなかつた。

もし、綾の今後の境遇を知る人ができたなら、きっとその人はこう話すだろう。

せめて、別の家の子供として生まれて来れば、と。  
綾には3歳程、年の離れた姉がいた。

そして、この姉は神に愛された子供だつた。逆に、綾は神から見放された子供だつた。

幼いときから、姉は天性の才能の片鱗を見せていた。

同年代の誰よりも早く文字を覚え、同年代の誰よりも頭が良かつた。

運動神経も抜群で、駆けっこをすれば男子よりもよっぽど速く走れたりした。身体も丈夫で、風邪が流行つた時期にも、平氣で外を駆けずり回つたりしていた。

反面、綾は発育の遅い子供であつた。

同年代の誰よりも文字を覚えるのが遅く、同年代の誰よりも頭の回転が悪かつた。

運動神経も悪く、駆けっこをすれば必ずビリになつた。身体も虚弱で、季節の変わり目には必ず風邪を引いた。

だが、これぐらいは子供の内にはよくあること。個人差が出て当たり前なのだ。

けれども、綾の両親はそうは思わなかつた。

初めて出来た子供、つまり姉の出来があまりにも良すぎて、それが普通だと思つてしまつたのだ。

不幸にも、周りの人達も姉と綾を比べてしまつことが多かつた。  
なので、ことあるごとに姉と綾を比べ、姉が出来たことが出来なかつたら、両親は綾を叱りつけた。

もちろん、出来なくてなんら変なところはない。実際、綾はそこまで言つほど出来が悪いわけではなかつた。

ただ、比較する相手が悪すぎたのだ。

二人が年を重ねるに連れ、綾に対する態度と、姉に対する態度に差が生じ始め、いつしか両親は綾のことを見向きもしなくなつた。小学校に入学するときは、お下がりのランデセル。中学校に入学するときは、お下がりの鞄。

服も全てお下がりで、決して綾に服が買い与えられることがなく、いつも洗濯のし過ぎでボロボロになつた服を着ていた。

いつしか綾の誕生日は忘れ去られ、姉の誕生日が綾の誕生日になつていていた。なぜならば、姉が飽きてしまつたものが、唯一の誕生日プレゼントだから。

外に出かけるときも、必ず綾は留守番。一人寂しくカッパラーメンを啜ることも、少なくなかつた。

孤独を味わい続けた綾は、いつしか他人の前で本当の自分を見せることができなくなつた。

いつも口を噤み、辛いことがあれば唇をかみ締め、楽しいことがあれば、誰にも見付からない場所で、こっそり笑つた。

それは小学生になつても、中学生になつても、変わらなかつた。

## 第一話・予感（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださいと  
うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## 第一話・予感

「ただいま、お母さん」

学校から帰宅した高田綾は玄関を抜けてリビングに入ると挨拶をした。

「ああ、綾？ これからお母さん達、『飯食べに行くから』ソファーに座っている女性がいた。亞麻色のシャツに膝下まであるスカートを身にまとった高田綾の母、聰子は、家に帰ってきた娘の声に立ち上がった。次いでテーブルに置いてある時計に目をやり、綾に顔を向けた。

「帰りは遅くなるから、綾は一人でご飯済ませておきなさい」

綾の目を一度も見ることなく、聰子は綾の隣を通って玄関に向かつた。

「あ、そつそり、お金はテーブルの上に置いてあるから」

聰子は振り返ることなく、玄関前に座り込み、靴を履いていく。

「お母さん、お姉ちゃんは？」

綾は、自分の姉達のことを聞いた。親が出かけるのであれば、姉達と一緒に夕飯を決めなくてはいけない。綾は姉妹の仲では一番下の末っ子なので、おいそれと決めるわけにはいかないからだ。

しかし聰子は、娘の言葉に思わず、といった様子で笑みを見せ、振り向いた。ファンデーションと化粧によつて皺が見えにくくなつた彼女の尻に、皺ができた。

「聞いてなかつたの？ 私は一人で済ませなさいと言つたのよ。お姉ちゃん達も一緒に食べに行くの、あなたは留守番」

聰子は玄関のドアを開け、パンプスを鳴らして出て行つた。ドアが閉まつた。綾にとつて、そのドアはまるで自分と自分以外を隔てる扉を連想させた。一度も目を合わせることもなかつた母の後姿を思い出した。

「 つ！」

綾は力いっぱい右手で真横の壁を殴った。少し黒ずんでいる壁に小さな亀裂が入り、メキッと、壁が鈍い悲鳴を上げた。

綾は俯いて大きく深呼吸すると、僅かに痛みを訴えてくる右手を、そつと左手で擦った。右手を眼前まで持ち上げたる。出血はしてなかつたが赤くなっていた。

しかし、すぐさま踵をひるがえして無言のままに自室へと向かつた。その肩は小さく震えていた。

綾の部屋は、いわゆる今時の子供の部屋といつてもいいものだつた。入つて真正面に窓があり、窓のしたに小さい本棚が置かれてい。その左奥にベッドと手前にクローゼット、右奥に学習机と手前にテレビ。一見すると男の子の部屋にも見られるが、ベッドの枕元にはいくつかのヌイグルミが鎮座されていて、それがこの部屋の主が女性であることを告げていた。

綾は自室に入ると、学校指定の鞄を机の上のノートパソコンの横に置いた。

このノートパソコンも、姉からのお下がりだ。捨てるのが勿体ないという、ただそれだけの理由で、与えられたものだ。

それに加え、このパソコンにはウイルスが入つてしまっている。まともに起動することもできない。はつきり言って、置いていても意味がないものだ。

けれども、綾には捨てることができなかつた。このパソコンと、今の自分がどこか似ていたような気がしたからだ。

綾はゆっくりと大きくため息を吐くと、ぼすん、と音を立ててベッドにうつ伏せに倒れこんだ。反動で肩甲骨の辺りまで伸びた綾の髪が放射状に広がつた。

枕に顔を埋めたまま数分、その間、枕元に置いてある時計の秒針が刻む音が静まり返つた部屋に反響していった。

「……いつものこと、気にしてもしかたがないわ」

ベッドに体を預けていた綾は、のそりと動き出した。ゆっくりと体を起こして立ち上がると、またのそのそと着替え始めた。

「あ～、疲れた。今日も一日がんばりました……つと

学校指定のリボンを解き、引っ張る。リボンをおぞなりにまとめると机の上に置いた。制服とスカートも脱ぎ捨て、皺が無いかを確認した後、ハンガーに掛けてクローゼットに入れれる。

一通り着替え終えて、最後に大きく背伸びをして深呼吸した。

綾は鞄から教科書とノートを取り出すと、ノートパソコンを床に置いてから、机の上に広げた。長年愛用している椅子に座ると、キイツと、音を立てた。ジャマに感じた鞄を椅子の横に下ろし、学校から持ち帰った宿題を始めた。

この日渡された宿題は英語のテキストの「写し」。英語の担当である竹田先生は、必ず現在やっている次のページをノートに書かせることだ。

先生いわく、教科書を読んだくらいではまず英単語は覚えられない。事前に英単語を覚えた上で、教科書を読む。これで初めて英単語を覚えられるということ。

一回に一回はこの台詞が口から出るせいで、気がついたら綾は、テキストの「写し」を面倒くさいと思いながらもしつかりやるようになっていた。

「…………あれ？」

いつも通りシャーペンを取り出し、いざ始めようと構えた瞬間、綾は違和感を覚えた。握ったシャーペンの異様な感触に思わず、右手を止めたのだ。

それだけじゃない。感触だけでなく、その瞬間に乾いた音が鳴ったのも要因の一つだ。不思議に感じた綾は、教科書から視線を手元に向け、目を見開いた。

右手の指で押されたシャーペンが不自然な方向に曲がっていた。いや、よく見ると、曲がったのではなく、中心から一つに折れ曲がっていた。

「な、なによ、これ？」

シャーペンをまだ何も書き込んでいない真っ白なノートの上に置いた。まじまじと観察を続けていると、あることに気づいた。

「握ったとき凄く柔らかかった……わよね……亀裂でも入っていたのかしら?」

それにしても不落ちない部分があるのを、綾は感じていた。  
いくら亀裂が入っていたとしても、自分の力でシャーペンを折ることができないのは分かっているからだ。

それにあの感触、何か細い棒を折ってしまったような感覚。  
あまりの手応えのなさに違和感を覚えたくらい、あっせり折れてしまつたのが、綾を納得させなかつた。

「うわ、気持ち悪い、今日は止めよう」

シャーペンをゴミ箱に投げ捨てる、教科書とノートを鞄に直した。そして、鞄の中から緑色の冊子を取り出すと、机の上に放り投げた。

緑色の冊子、『風蘭中学校・秋の修学旅行のしおり』を広げ、目次を開いた。

「明日は8時にグラウンドに集合か。持っていく物を用意しないと集合時刻と、当日の必要なものを確認する。椅子から立ち上がり、大きな目のリュックを探すため自室を出て行つた。その左手にはしおりが握られていた。

なんて楽しい夢だらう。私は心の底から思った。

どうしてそれが夢だと気づいたのか分からぬ。ただ、唐突に夢だと思つただけなのだ。

夢の中の私は何よりも速かつた。

何もない荒野を、雪景色を、森を、町を、一本の足を交互に動かし、走る、走る。

シアターのように世界がぐるぐる移り変わり、瞬く間に景色が色を変えていく。

夢の中の私は何よりも強かった。

出てくる人、人、人。私は蟻を踏み潰すかのように、彼らを蹴散らしていった。

拳を振れば屈強な男は唸り声を上げて倒れ、蹴りを放てば服従の悲鳴を上げ、声を出せば誰もが私に道を譲った。

ぐう。

突如鳴つたお腹に足を止めた。

お腹を擦り、気を落ち着ける。なんだかとても、お腹がすいた。そう考えると、さらにお腹が食料を催促してくれる。空腹感が少しづつ強くなってきている。

顔を上げると、いつの間にか景色は町中に変わり、私は屈強な男達に囲まれていた。

全員が鎧兜を身にまとい、私に向かつて剣を突きつけ、弓を構えていた。

「観念しろ、化け物！」

男の一人が私に向かつて怒声を浴びせる。普通なら恐怖に怯えてしまうところだけど、私には怖くなかった。

「成敗！」

別の男が弓を引き締め、矢を放つ。

放たれた矢は風を切り裂き、トン、と拍子抜けた音と共に、私の心臓を貫いた。

胸が熱い。痛みは感じなかつたが、矢が刺さつた部分が熱かつた。

「皆の衆、今だ、矢を放て！」

矢を放つた男の号令に従い、一人、また一人、私へ矢を放つ。それらは寸分の狂いも無く、私の身体を貫いた。

反対の胸を、また心臓を、腕を、腹を、足を、太ももを、腕を、頭を、口を、胸を、足を、目を、腹を、私を貫いていく無数の矢。

眼球を引き裂き、筋肉を巻き込み、血液を連れて、私の身体を破

壊していく。

大量の血液が傷口から噴出す。すぐに、赤く染まつた地面の上に、膝をついた。

「おお！ やつた、化け物を退治したぞ！」

兜に包まれた顔が、誇らしげに綻ぶ。それは他の男達も同様で、全員息をつき、構えていた弓を、剣を下ろした。

その瞬間、私は最初に矢を放つた男に飛び掛つた。

剣を構えるよりも、弓を構えるよりも、男が身構えるよりも早く、鎧兜を引きちぎって、無理やり顎を持ち上げる。

健康的で生命力溢れる首筋が、私の眼前に晒された。

ああ、とても美味しそうだわ。

恐怖に引きつった目の前の男も、横で腰を抜かした男も、今はどうでもよかつた。

ゆつくりと男の首筋に顔を寄せる。

口を大きく開けて、味わうようにゆつくりと首筋に噛み付いた。

-----

朝から変な夢を見た。正直な意見はそれだった。

疲れているのだろうか。そもそも、考えた。

もしかしてそういう願望があるのだろうか。はつきり違う。

いくらなんでも、カニバリズム願望は無い。綾は憂鬱な気分になりながらも、台所に顔を出した。

既に家族は会社なり、学校なりに出払つていて、台所で聰子が洗い物をしていた。綾はパジャマのまま台所のテーブルの椅子に腰を下ろした。

「お母さん、ご飯つてある？」

「……」「

綾は母に尋ねた。しかし聰子は明らかに聞こえているのに綾を無視した。

毎度のことながら、今日も傷ついた。

「ねえ、お母さん。ご飯つてまだ残つていいの？」

先ほどよりも大きな声で、もう一度綾は母に尋ねた。

「はいはい、そんなに言わなくて聞こえているわよ。ご飯だつたらそこに置いてあるパンでも食べなさい」

テーブルに目を落とすと、アンパンが置かれていた。

ふと、聰子が洗つている洗い物を見る。既に洗われた茶碗や食器。たつた今洗われている茶碗と食器。

綾はアンパンを引つ掴むと、冷蔵庫から500ミリのりんごジュースを取り出し、踵を翻した。

その背中に、聰子の言葉が掛けられる。

「ほんと、何であんたみたいな子供が生まれたのだろうね？　お姉ちゃんはあんなに出来が良いのに……まったく、生まれてこなきやよかつたのに」

無視して、部屋に戻った。

今まで何度も言われた言葉であったから。特に傷つくこともなかつたが、それでも辛い気持ちはあった。

朝食を済ませたら、次は着替えだ。

熊のデフォルトキャラクターがプリントされたお気に入りのパジャマを脱いだ後、皺にならないように畳む。

次に、当日着ていく服として指定された、学校指定の青色のジャージを手早く着る。ジャージのズボンを穿いたところで、時計を見やる。

学校到着予定時間は8時50分、現在時刻は7時55分。いつもより15分早く起きたので、余裕を持って準備できた。

ふと、まだ寝癖を直していないことを思い出した。

「あ、髪型は何にしよう、あんまり目立つとまた何か言われるかな？」

まだ台所で洗い物をしている聰子を視界の端に入れながら、洗面所に急ぐ。

洗面所には誰も居なかつた。棚からブラシを取り出し、髪をブラッシングする。

鏡にはちょっとたれ田氣味で、愛らしい顔立ちをした少女が綾と同じ動きをしていた。

普段から日常的に虚めを受けている綾にとって、おいそれと髪型を変えるわけにはいかない。変えたら変えたで、虚める人々はそれを引き合いに出して、また綾を虚める材料にするだろうから。

それが分かつていて綾は髪型を帰ることはできなくとも、せめて手入れくらいは、と髪にはことさら気をつけていた。

この日は寝癖が残つていないか確認した後、軽く頭皮マッサージをした。効果があるのかどうかは分からない。

とりあえずしておこうという程度の気休めを済ませると、ギッシリと中身の詰まつたリュックを担いで玄関に向かつた。

「行つてきます」

特に誰かに聞かせたいわけでもなかつた。扉を開け放ち、境界線を踏み越える。雲ひとつ無い、とはいがなくても十分快晴といえる青空。

そこから降り注ぐ太陽の光。

「ああ、いい天氣……これなら明日も晴れるかな？」

己の体を照らす太陽の輝かしさに、綾は目を細めて右手で光を遮つた。

都会ともいえるし、田舎ともいえる町。綾が住んでいる町だ。きっと場所によつて見える空は違うのだろうか？

ふと、そんなことを考えた……と、背後に気配を感じた。

「あー！」

声を上げる時間も無かつた。今しがた出た玄関のドアが勢いよく閉められ、次いで鍵が掛けられた。

けれども、振り向くことはしなかった。

誰が閉めたのかは、考えるまでもなかつたから。綾の心に悲しいと思ひ気持ちと、諦めにも似た不思議な感情が胸の奥底を駆け巡った。

「あ～あ、ほんと、嫌になっちゃうな」

両手で眉間を押さえる。どこまでも暗く落ち込んでいく自分の心。顔を上げて、落ち込まないよう努める。

「私がお姉ちゃんと違つて、出来が悪いのは分かっているけど……ここまで露骨にすることないじゃない。そりやーさ、勉強だつて出来ないし、運動オーナーだし、顔だつて良くないけど、お姉ちゃんよりは性格良いと思うよ、私は」

そう考へると、苦しみが薄れてくるのが不思議。でも、それは気休めにしかならないことも分かっていた。

眉間から両手を下ろし、大きくため息を吐いた。

いつまでもここにいても仕方ない。早く学校に向かわなければ遅刻してしまう。

集合時間に遅れないためにも、綾は気持ちを切り替えて一步を踏み出した。

それに気づいたのは、家を出発してから少し後のこと。

(…………あや…………)

気づいたのは偶然に近かつた。

「…………え？」

一瞬、誰かに呼ばれたような気がした。

右に、左に首を振る。通行人どころか、人の気配すらなかつた。空耳かしら？ 綾は首を傾げる。けれども、空耳ではなかつた。

(…………あや…………あや…………)

学校へ向かおうとした綾の動きは止まつた。一度ではなく何度も、

自分の名が呼ばれたからだ。

振り返つても誰も居ない。

強く、心臓の鼓動が耳に届いた。

「え……え……ちょっと、誰？ 誰なのよ！？」

背筋にゾクゾクと悪寒が走る。何度も何度も辺りを見渡すが、誰一人いない。近所で見かける野良猫すらもいない。

それでも聞こえた。まるですぐ近くから話しかけられているみたいに。

「準備は出来た……後は……受け入れるだけ……あや……もうすぐ……もうすぐ……もうすぐ……」

「い……や、嫌……嫌……嫌、なに、何なのよー？ 誰よ、誰ー？」

綾は恐怖を感じた。

拡声器を使つているとは到底思えなかつた。それほど自然な声だつたのだ。その声は自分を知つてゐるらしいことも綾の恐怖心を駆り立てた。

いても立つてもいられず、綾は走つた。どこに向かおうとか考えなかつたし、考える余裕もなかつた。ただ、この声から逃げなれば！ 綾の心はただそれだけだった。

対して運動が得意でもないので、すぐに息が切れる。それでも走ることを止めようとは思わない。

（あや……可愛い……あや……もうすぐ……絶対……）

声はどんどん大きくなつていいく。まるで綾の横にぴつたりと張り付き、耳元で叫んでいるくらいにうるさく感じる程に。

車が通つたら助けを呼ぼう。そんな考へが浮かんだが、すぐに却下した。車を呼び止めている間に、声に追いつかれそうな気がしたからだ。

「はあ、はあはあはあつ、……つーはあはあはあはあは

あ

綾は走った。自分がどこを走っているのかも分からぬ。闇雲に足を動かし、少しでも声から遠ざかるうとした。しかし、声はどこまでも付いてきた。

歩いている通行人に助けを呼ぼうかとも考えたが、すぐに却下した。立ち止まつてしまえば、あの声に捕まつてしまつと思つたからだ。

すれ違う人は誰も綾に気を払うことはなかつた。誰もその声に疑問を持つていいかのように……。

視界が涙で滲む。体中から汗が噴出す。心臓が破けそうなくらいに鼓動を打つ。どれだけの酸素を取り込んでそれ以上に体が酸素を求める。

（もうすぐ貴女は自由になる……何者にも縛られない……世界でただ一人）

「はあはあ、くつ、はあはあはあ……何なのよ　っあ！」  
手で庇つことができたのは幸運だつた。

疲労と酸欠で朦朧とした意識の中、足を絡ませてしまい、派手に前のめりに転倒してしまつた。

綾は息つく暇もなく立ち上がろうとした。けれども、立ち上がれなかつた。

両足に力が入らない。擦り剥いた腕と足から、鈍い痛みが伝わつてきた。

砂の付いてない手の甲で目を擦り、周りを見回す。

いつのまにか住宅街から遠ざかり、綾は小さな公園に辿り着いていた。周りを遮る物もなく、ある程度遠くまで見渡せることが出来た。

「はあはあはあはあ……た、助かったの……私？」

アスファルトに舗装されていない公園の砂の感触が不思議と安心感を覚えた。

あれほどうるさかつた声も、気づいたら聞こえなくなつていた。

呼吸も落ち着いてくると、色々な疑問が浮かび上がってきた。

「何だつたの、あれ？ 幻聴？ 空耳？ 幽霊？ なんなのよ、もう！」

震える足腰に気合を入れて立ち上がって、改めて綾は自分の体を見下ろした。

転んだせいで体中に砂が付いていた。体中についた砂を払うと、近くのベンチで少し休憩しようと顔を上げた。

「あ、れ」

ふらつと綾の足から力が抜ける。崩れ落ちるように静かに倒れた。一瞬にして綾の意識は暗闇に包まれ、意識を失った。

（貴女は私を恨むかもしれない……でも私は貴女を失いたくない……忘れないで……忘れないで……）

意識を失い、倒れた綾に声は語り続けた。

（幸せになれないかもしない……ずっと孤独を味わうかも知れない……でも忘れないで……私は貴女の味方……忘れないで……）

声はその言葉を最後に、綾に語りかけることはなかつた。

「あれ？ ……え、え？」

意識を取り戻したとき、綾は夢だと思った。

自分は確かに公園にいたはずなのに、目を覚ましたら学校のグラウンドに立っていたからだ。

最初に聞こえたのは大勢の声、女の声、男の声。

グラウンドには、綾と同じく風蘭中学校のジャージを着た生徒達でいっぱいだつた。

試しに頬を抓つてみた。ぎゅう、痛い、地味に痛い、夢じやない。もしかしたら、自分は白昼夢を見ていたのではないだろうか？

そう思い込もうとした綾は、すぐさまそれを諦めた。ジャージの下に来ていた下着が汗で湿つていただけでなく、ジャージ自体、砂で汚れた後があつたからだ。

ゾクリと、言葉にできない戦慄が全身を覆う。

「はあ…………もつ、本当に何なのよ」

綾は深くため息を吐くと、晴れ渡った空を見上げた。家を出ると

きに見上げた空と何も変わらなかつた。

この時、綾は気づかなかつた。擦り剥いた腕と膝の傷が治つて、痛みが消えていたことに

学校のチャイムが鳴つた。先生がメガホンを使って生徒達に指示を始めた。

綾もそれに従つた。生徒達も雑談を続けながらも先生の指示に従い始めた。

人数の点呼のため、綾達はグラウンドに立たされた。まだ10月とはいえ、後数日で11月になる。早朝はすこし肌寒いだけでなく、生徒達の服装はジャージの上下だけで何も羽織つていなかつた。

日々に早くして、寒いと生徒達の口から苦情が出たが、予想以上に点呼に時間が掛かつてしまい、先生達も少し辛そうに手を擦り合わせた。

結局、グラウンドを移動し、バスに乗り込んだのは予定時間を20分過ぎた頃だつた。

ドアに「風蘭中学校貸し切り」と書かれた張り紙が貼られた大型バスが正門前に並んでいた。朝の登校途中に横を通り過ぎたが、いざ改めて近くで見てみると以外に大きい。綾達の学校は一クラス30人前後になるように編成されているが、それでも十分余裕をもつて座ることができた。

綾の所属する1組が全員乗り込むと、ゆっくりとバスが動き出し、二泊三日の修学旅行の旅が始まった。

先生は予定しているスケジュールを生徒に伝えると、先生はさっさと寝入つてしまつた。クラスメートの男子や女子達は、お目付け役が寝たのをいいことに、気兼ねなく菓子の受け渡しや、席の移動を行つていた。

車内はたちまちお菓子の袋を開ける音、慌しく席を移動する音、大きな声で叫ぶ人など、喧騒に溢れた。

綾はドアからもつとも近い椅子に座り、体を縮み込ませて目立たないように息を潜めた。

……が、その努力の甲斐もなく、平穏の一時は壊されてしまった。「ねえ、高田。ちょっと、お菓子持つてない？ 持つていたら譲ってほしいんだけど」

突如呼ばれた綾の苗字にて、というより、その声に通路側に目を向けた。

そこには、綾よりも一回りも体の大きい女子……富北が立っていた。髪を左右のリボンで縛っているが、ツインテールと呼ぶには長さが足りなかつた。縛つてあるリボンから飛び出した髪の束がアンバランスな印象を与えた。

「ほら、いいでしょ、早く渡しなさいたらー。」

富北は了承を得る前に、綾の隣に置いてあつたリュックを奪い取り、勝手にチャックを開けると遠慮なく手を突っ込んでお菓子を探り出した。

「あ……やめ……だめ……」

綾はそれを止めようと思つたが、自分でも分かるくらい頼りない声しか出なかつた。

そういうしていろ内に、お菓子の袋を取り出した富北は、またにやにやと笑うと、綾にリュックを突き帰した。そのまま礼も言わず

に富北はバスの後部座席に戻つていった。

綾は喉元まで上がつてくる泣き声をリュックに顔を埋めて「まかし、漏れ出てくる涙を必死に隠し、ただ耐えた。もし涙を見せてしまえば、彼女達を喜ばしてしまつことになり、むしろ酷い事をする」と知つてゐるから。

「ぎやはは、マジ？ あいつ本当に根暗だよな」

「やうやう、わかつてお菓子渡せばここのに、ぐずぐずと渡さないから」

後部座席から、富北の話し声が聞こえた。口ぶりからしても罪の意識は感じられない。

「それで無理やり取つてきただけ？ うわ、酷！」

「いいじゃん、あんな根暗なやつ。誰も相手しないんだし」「だよね～。むしろボランテシアだよ、私達つてさ。感謝してくれなきや」

綾の心を無視した言葉…あまりにも身勝手な意見が、ヤスリのように綾の心をすり減らしていく。それも一人一人ではない。いつの間にか、綾以外のクラスメート全員が日々に彼女の悪口で盛り上がっていたのだ。

悔しかつた……どうして自分は人前で話すこともできないのか。悲しかつた……嫌と思っていても怖くて逆らうこと�이できないのが。

恥ずかしかつた……いつまでもただ耐えることしかできない自分を。

零れだした涙を隠すように、綾は強くリュックを抱きしめた。リュックが綾の腕に閉められて潰れた。綾自身は軽く抱きしめたつもりだった。

だから、リュックに入つていた水筒が、あまりの締め付けの強さに変形してしまったことに、綾は気づくことが出来なかつた。

バスに揺られること数十分。辿り着いた場所は綾の住んでいた町から遠く離れた山林、キャンプ施設脇の駐車場であった。

「はい、みんな！ 先生の話を聞いて、ちゃんと行動してね！」

綾の担任でもあり体育教師を勤めている、遠藤先生の声が辺りに響いた。

生徒達の青色のジャージと違い、灰色のジャージを着て立つている姿は中々に似合つていて好青年という言葉がピッタリな人だつた。先生は、バスから降りて思い思いで喋りしているクラスメート

達の騒音を書き消すように、大声を張り上げた。

「これから各班に分かれて飯盒炊爨に必要な薪や食材を配ります。1組から順々に配るから、各班は受け取つたらキャンプ場に向かえよ！」

朝の点呼で多少、予定の時間に遅れてしまったため、教師達は慌しく準備を進めていた。

生徒達も始めは静かにしていたが、一人、また一人とお喋りを始め、遂には先ほどと変わらず喧騒が戻ってきた。

その喧騒の中、綾は一人で薪を持たされていた。

「私達は食材を持つていくから、高田は薪を持つていってね」

嫌らしい笑みを浮かべた富北がそう言つた。

「そうそう、私達は先に行つて、かまどを組み立てるから」

その横に、同じく嫌らしい笑みを見せている女子、桜井が富北に続いた。

富北と身長は同じくらいであったが、富北よりも横に一周りも彼女は大きかった。髪を後ろ一本にまとめてゴム紐で留め、頬にそばかすがあつたその姿は、さらに彼女を大きく見せた。

桜井は綾に一言だけ伝えると、富北と一緒に他の女子のグループと先に向かつてしまつた。

飯盒炊爨は、元々一クラスの人数を半分に分けて行つ手筈になつてゐる。

男子と女子に別れて行つだけだが、今回の修学旅行の宿泊先であるホテルが用意したかまどは一番大きいやつでも8人分しかなかつたため、さらに半分に分けられたのだ。

綾は不運にも、富北と桜井と同じグループになつてしまつたのだ。

「どうしよう、こんなに持てないよ。私、非力なのに」

薪自体は既に燃えやすいように何本かに折られていて、一本はそれほど重くない。しかし、それがグループ全員分となると、その重量はかなりのものになる。

それだけでなく、綾の身長は同年代から見ても低い。綾が持つて

いく薪の量は人数に比例して量が増えるので、横に並べて束ねてある薪でも、綾の太ももの辺りまであった。

幸い鉄線で束ねられていたおかげで、途中で切れてしまつ心配はなかつたが、4～5m進んでは休み、進んでは休みを繰り返すことになつた。

横を同じクラスの男子が笑いながら走つていつたが、誰一人綾に手を貸すものはいなかつた。

何とか遅れることなくキャンプ場に到着したときには、先に到着していた生徒達が思い思いに準備に取り掛かっていた。

綾は自分の班を探した。ほどなくして見つかり、半ば引きずるようにして薪を持つていつた。

富北や桜井達は、綾のことを無視して楽しそうにはしゃぎながら共同テーブルで食材を切つていて。とりあえず綾は既に用意されてあつた綾の班のかまどの近くに薪を置いた。

ようやく薪を運び終えた綾の手は、痩れて感覚がなくなつていた。喉に痛みを感じるくらい、身体は酸素を要求していた。体中から汗が噴出し、汗に濡れたシャツが不快な感覚をもたらしていた。

少し休憩しようとリュックを下ろそうとした途端、背中に強い衝撃が走り、綾は前のめりに転んだ。

背中に担いだリュックには、水筒やらが色々と押し込まれていたおかげで、背中の部分はクッショーンになつた。けれども、手をひどく擦り剥いてしまつた。

鈍い痺れと痛みが広がり、思わず涙が目尻に滲んだ。振り返つて、状況を確認する。

「痛えな、気をつけろ！ チビ！」

そこには同じクラスの男子達が立つていた。全員、綾よりも頭一つ分背が高い。傍目から見ると小学生が中学生に恐喝されているようにも見えた。

その表情は共通して嘲笑つていた。綾を見下していた。

この時、もし彼女を助け起こしてくれる人がいたら、きっとその

人は男子達に怒鳴り散らしていただろう。言葉には出していなくても、一様に故意にやりました、と男子達の顔に書かれてあつたのだから。

「おいおい！ 謝れよ、お前からぶつかってきたんだろ！」

「そうだそうだ。土下座しろ、土下座」

口々に吐かれる卑劣な言葉。自分は悪くないと思っていても、綾には謝る以外の選択肢を選ぶ勇気はなかつた。

恐怖で足が竦み、田を見る事もできずに俯いたまま謝つた。

「い、ごめんなさい」

声も震え、体中が燃え上がるほど熱い。視界が真っ赤に染まってしまつくらい悔しいと感じながらも、謝つた。

男子達はそれで満足したのか、それ以上追求はしてこなかつた。

「しようがない、俺達も準備しなきやいけないし、これで許すか」

「そうだな、腹も減つてきたし、早く作ろうぜ」

そう言い残し、男子達は自分達の班の所に戻つていつた。

この時も、誰一人彼女に手を差し伸べる人はいなかつた。

そして、今しがたできた傷の痛みが消えていくことに、彼女は気づかなかつた。

飯盒炊爨も終わり、その後も、後片付けやレクリエーション等のイベントも順当に消化されていった。

けれども、綾達が宿泊するホテル『希望』に着いた時には17時を回つていた。

そこから慌しく先生達からの諸注意、泊まる部屋の確認が始まる。各班に部屋に分かれた後、私服に着替える。その後すぐさま先生達が一部屋ずつ見て周り、人数の確認をとつた後、ホテルが用意してくれた夕食を食べる。

食事が終わり、15分の休憩時間が当てられたが、入浴の用意や各自就寝の準備をしていたために休むことはできず、やつと一息つ

いた時には21時を回っていた。

綾達が泊まることになった部屋は3階の和室だった。男子達は2階で、少数の女子達の間で、下まで降りるのが面倒だと不満が出たが、何事もなく時が過ぎた。

綾の班は8人だったが、全員分の布団を並べても十分に余裕があった。

綾を除いた女子は入り口から一番見えにくい場所に固まって布団を敷き、綾は入り口近くに布団を敷いた。

女子達は綾を存在しないものとして扱い、綾も声をかけようともしなかった。

綾にとつても、いまさら彼女達と仲良くなろうとは思わなかつた。それからしばらくの間、女子達は楽しげな雑談を広げ、時にははしゃいで暴れたりもしていた。

一人寝床に入った綾は、早く明日にならないかと、目を瞑つてじつとしていた。

綾が何度も目かの寝返りをうつた時、雑談をしていた女子の誰かがポツリと言つた。

「あれ？ あいつ寝ているんじゃない？」

その言葉にお菓子を食べていた女子の一人が綾の方を見た。布団に包まつている綾を見て、些かバカにしたように笑つた。

「あははは、なーにあいつ、もう寝ているの？」

その隣にいた女子も綾の方を振り返つたが、すぐに興味をなくし、お菓子を食べ始めた。綾を見ていた他の女子達も一人、また一人雑談を再開していき、再び綾はいなものとして扱われた。

綾は悲しかつた。

どうして自分がこんなに惨めな思いをしなければいけないのか。どうして自分はこんなに嫌われるのか。

総じて自分は言い返せないのか。

この世界すべてから逃げ出したかった。

でも、死ぬ勇気も持てず、両親に当たるうとも思わない自分がと

ても情けない存在に思えて仕方が無かった。

(やつと静かになつたわ…どうして私はこんなに虐められるの？

私が何か悪いことしたの？ 私の何が気に入らないの！)

けつして声に出すことはなかつたが、今すぐ飛び上がつて叫びたかつた。

綾の心に熱くドロドロとしたものがうねり、それが自らの体を突き動かして、すべてを無茶苦茶にしてほしい。

そんな欲求まで生まれてきた……綾はまた自分を情けなく思った。

時計の短針が夜中の10時を過ぎた頃、先生が見回りに来た。  
「それじゃあ10時になつたので消灯。おまえら、騒ぐのはある程度許すけど、他にも来ている一般の人がいるのだから騒がしくするな！」

見回りにきた遠藤先生が入つてくるなり、女子達に注意をした。綾は内心、自分は静かにしていたのに！ と、憤りを感じていた。それを声に出したら起きているのがばれてしまうだけでなく、また虐められるので黙つていった。

綾を覗いた女子達は急いで寝床についた。遠藤先生は全員が布団に入るのを見届けると次の部屋に向かつて行つた。

室内の照明は消され、静寂に包まれた。綾は室内のほうを振り向こうとは思わなかつた。

彼女達が息を押し殺して掛け布団を頭から被つているのが想像できたし、迂闊に目が合えばまたとやかく言われるのも想像できたからだ。

「ねえ喉渴いたよね？」

廊下の照明と窓から射し込む僅かな月明かりだけしか光源はなかつたが、大体の輪郭くらいは見通すことはできる。

部屋の中にいた綾を除いた女子達は、全員布団に入り、誰一人寝ていない。押し殺したような雑談と笑い声の中、宮北がぽつりとこ

ぼした。

「うん、喉からから。皆は？」

その言葉に桜井も同意した。

「あたしも」

「あ、私も」

「皆も？ そういわれると喉渴いてきたな」

「喉渴いた」

部屋は真っ暗になつてゐるけど、声は素通りだ。女性特有の高い声は小さくとも端まで届いた。同室の女子達も口々に同意した。その中で、先生に見回りに来られた時、真っ先に見られる入り口脇に押しやられた綾は、一人寝入ろうとしていた。

入り口脇という場所なら何かされようとしても、先生に見られやすいので、おいそれと虐めをしようとしたしないという考え方からだ。内心、この位置に満足していた。

「おい、高田！ わ前ちょっとジュース買いにいつてよ」

「…………」

「高田～、寝てゐるの～？ 高田～」

綾は無視をすることにした。喉は乾いていないし、かなり前から床についたから彼女達も諦めるだろう。そう考へ、狸寝入りすることにした。

「高田、起きる」

起き上がってきた女子の一人、桜井が手探りに綾の方に近づいてきた。

顔は女子達の方を向けているけれども、綾は両目を固く瞑つて見ないようにした。

「…………」

綾はそれでも無視した。朝から疲れるようなことが何度も起つて本当に疲れている。ジュースを買いに行くのは面倒だった。

「こ……の、高田、起きろ！」

けれども、業を煮やした桜井は掛け布団の上から綾を力いっぱい

蹴りつけた。

「…………！」はぐう！…………痛…………」

不運にも鳩尾の辺りを蹴られてしまった。掛け布団の上とはいえ、綾にとつて、それでも十分な威力だった。

痛みに、思わず声を上げてしまつた。綾は身を縮ませた。

「起きる」高田「起きる」

既に綾が起きているのは分かつてゐるはずだが、桜井はさらに執拗に綾を蹴り続けた。掛け布団に桜井の足跡が付き、更にその上から新しく足跡が付く。

綾は黙つてそれに耐えた。布団の中で体を丸めて、蹴られた鳩尾を擦つた。何度も蹴られる体に衝撃が走る。

そして、ふと、綾の脳裏に疑問が浮かんだ。

痛くなかったのだ。鳩尾を強く蹴られたのに、痛くも苦しくも何ともなかつた。

始めは痛いと思つた。痛いと感じて体を丸めた。しかし、思い返してみる。

鳩尾を蹴られた時、自分は痛みに目を見開いた…………はず、けれども痛みはない。そして、蹴られ続けてゐる今も…………。

ここにきて、綾はあることに気づき、固く瞑つた両目を見開いた。

「あら、起きたの？ だつたらジュース買いに行つてね、お金はあんた持ちで。私はオレンジジュースだから」

目を開けたのを見た桜井は綾が起きたと思い、ジュースの注文をした。

「あ、私もオレンジお願い。無かつたら適当なの」

「私はファンタなら何でもいいから」

「私は緑茶買つてきて。緑茶が無かつたら私もファンタ」

それに続いて綾に次々とオーダーを続ける。誰一人リュックから財布を出そとする素振りすら見せなかつた。

そのことに対する特に何も言わなかつた。綾にとつてはいつものことだから。

それ以上に、綾の頭は気づいてしまった出来事で埋め尽くされていた。

部屋を出て、一人明かりの付いた廊下を歩いた。途中、何人かの先生に見つかってたが、ジュースを買いに行くだけと伝えると、先生達も黙認した。

綾はジャージの上から鳩尾を擦つた。蹴られた鳩尾も、蹴られ続けた手足や胴体も、まったく痛みを訴えなかつた。

そしてそれ以上に、怪我をした腕や手のひら、膝の擦り傷が無くなっていることに、例えようも無い不気味さを覚えた。

「ジュースを7人分買つても重くない…………なんで？」

ホテルのロビーの売店で、リクエスト通りジュースなどを買つこうができた。店員がビールの袋にまとめてジュースを入れてくれたので、持ち運びに不便することもなかつた。

右手に持つたジュースの入った袋を眼前まで持ち上げる。

「とつても軽い、まるで羽みたいだわ。私つてこんなに力持ちだつけ？」

綾は女子達の中でも非力な方だつた。綾自身、それを自覚していた。

「ははは…………本当、夢じやないよね、これつて……」

試しにまた頬を抓つてみる。ぎゅう、痛い。いや、これはとつても現実味のある夢に違ひない。きっと痛みが足りないので。そうに、違ひない。

さらに抓つてみた。ぎゅぎゅぎゅう、痛い、痛すぎる。まだ覚めないのだろうか？

さらにさりに力を込めて抓つた。ぎゅぎゅぎゅうーーーーーーーー

！ 痛い、洒落にならないくらい痛い。そして夢から覚めない。

どうか、これは現実なんだ！

「あほらし……何やつているんだ？…………私……」

なんだか自分が馬鹿に思えてきた。

思わずため息をこぼした。抓った頬がジンジンと痛む。

「ただいま……ジュース買つてきたよ」

部屋に戻った綾は、真っ暗な中、隅の方で固まっている女子達に  
ジユースの入った袋を掲げた。

部屋の中央まで来たとき、綾は不審な点を覚えた。女子達の顔に一様二つめら二つめを浮かべて、之のが見えなかつた。

「ねえ……何でそんな所に集まっているの?」

綾は嫌な胸騒ぎを感じた。

どうして照明の付いてない中、女子達の表情を読み取ることが出来たのだろうか？

しかも、照明の付いている廊下から今しがた戻つたばかりなのに。つまり、まだ暗闇にも目が慣れていないはずなのに……。それ以上に足元も見えないのにどうして分かったのか。

「た。その疑問に思い至った瞬間、暗闇から伸びた腕が綾の体を拘束し

悲鳴を上げようと口を開けた瞬間、それより早く口の中にタオルを押し込まれてしまった。

抵抗する間もなく、綾は布団の上に押し倒されてしまつた。背中から倒れこんだ勢いで頭を強かに打ちつけ、光と暗闇が交互に視界を埋め尽くした。

突然襲つた事態に、綾は体をがむしゃらに動かした。何が起きたのか分からなかつたが、自分が何者かに襲われていることだけは理解できた。

しかし、あつという間に四肢を押さえつけられた。そして、この時になつて初めて自分を襲つている人物が誰なのか分かつた。

「へへ…おこ、ちゃんと見張つておけよ」

「分かつていいつて、早く代われよ。」いつも我慢できやうにないからな

自分を押さえつけているのが同じクラスメートの男子達だった。

綾は愕然とした。

いつたいどうして！？

綾は押さえつけられながらも、必死に力を込めて女子達の方に目を向けた。

「ねえ、ちゃんとお金は用意してあるんでしょうね？ これでお金はないとか言つたら怒るからね」

女子達の一人、富北が見張りらしき男子の一人に話しかけていた。「安心しろって。ちゃんと金は用意してあるから、それにお前らも協力しろよ」

「分かつていいわよ。お金さえ用意してくれれば黙つておくから」

聞こえてきた内容に綾は目を見開いた。何を言つてているのか理解できなかつた……理解したくなかった。

「あ、こっち見ていいよ、富北」

こちらが見ていることに気づいた桜井が、富北にそう言った。

富北は綾の視線を見返す。面倒臭そうにため息を付くと、布団に押さえつけられている綾に近づき、男子生徒の邪魔をしないように少し離れたところに止まつた。

「どうして？ つて、顔しているわね、高田？」

「んん～～、んん～～、んん～～」

綾は一時、抵抗するのを止めた。先ほどから男子達は綾を押さえつけるだけで、それ以上に進もうとはしてこなかつたし、口にタオルを入れられたせいで、息苦しくて疲れてきたからだ。

「話は簡単よ…………金を貰つて貴女を売つた。ただそれだけよ」

その言葉を言い終わると共に男子達が綾のジャージを脱がそうと動き出した。

「…………つ！ んん～～～～！」

当然、綾は精一杯体を揺すつて抵抗した。自分よりも体格も大きく体重も重い男子達に拘束されないと分かっていても抵抗した。  
なんで、なんで！？ どうして自分がこんな目に遭わなければいけないの！？

悲しかつた、悔しかつた。そして、それ以上に恨んだ。

今まで感じたことがないくらい強い怒り。怒りは恨みに変わり、恨みはどんどん殺意に変わっていく。

気づいたとき、既にジャージの上は捲り上げられた。下に来ていたシャツも無理やり捲り上げられ、綾の小ぶりながら女性といえる部分が観衆にさらされた。

その瞬間、誰ともいわず男子達の動きが止まつた、が、すぐに行動を再開し、ジャージのズボンに手を掛け始めた。

「ああ！ もう動くなよ！」

それだけは、と綾が力を振り絞つて暴れる。焦ってきた男子の一人が、所持していたカッターを綾の頬に突き付けた。  
勢い余つて綾の頬に一筋の傷を付けた。血が滲み、ゆっくりと痛みが広がっていく。

「あ！ おい危ないだろ、刺さつたらどうするんだよ」

綾の右手を押さえている男子が、カッターを持った男子に鼻息荒く怒鳴つた。

「すまん、こいつが暴れるからおとなしくしてもらおうかと思つて……」

「おい早くしろよ、もう我慢できねえ！…」

左足を押さえている男子が急かす。

「そうだ、写真撮つとこうよ、写真」

じつと成り行きを見ていた桜井が突然提案をした。

「写真撮つておけば後でお金請求できるし、あんた達だつて、そいつで遊べるでしょ」

「頭いいな、桜井。そうだよ、おい、カメラ持つているやついるか

？」

一人見張りをしていた男子が、女子にカメラを持っているか聞いた。

「あ、あたしインスタントカメラ持っているよ」

女子の一人がリュックからカメラを取り出す。見張りをしている男子にカメラを渡した。

「やべ、俺もう我慢できねえ」

男子の一人が切羽詰つた声を出した。

「落ち着けって、これからいくらでも出来るようになるんだから」

右手を押さえている男子がそういうて窘めた。

綾はもう抵抗しなかつた。綾を覗いた全員がカメラの方に意識が向き、綾から注意が逸れていた。

綾は憎んだ。自分が辱めを受けるのをせせら笑つて見ている女子達を。

綾は憎んだ。畜生よりも劣る行為を平然と行おうとした男子達を。

綾は憎んだ。誰も助けてくれない周りの人達を。

綾は感じた。疲れ果てて腕すら上げるのも億劫に感じた自分の肉体から溢れてくる力に。それに比例するように膨れ上がる殺意に。

この時、誰か一人でも罪悪感を覚えて行為を中止していたら、未来は変わっていたかもしれない。

この時、誰か一人でも彼女の目を見ることが出来たら、未来は変わっていたかもしれない。

誰も気づかなかつた。綾が抵抗を止めていたことに。

誰も気づかなかつた。綾の瞳の色が、黒から血のような赤い色に変わつていたことに。

誰も気づけなかつた。この出来事で綾の心に重大な変化を与えたことに。

誰も気づけなかつた。異変はすぐ側まで迫つていたことに。

気づいた時はあまりにも遅く、全て手遅れだつた。

「あれ、こいつおとなしくなつ」

始めに気づくことができたのは、皮肉にもカッターを突き付けた

男子だつた。

「ふう……ふう……ふう……ふう……」

綾は立ち上がっていた。

四肢を押さえていた男子達は、一瞬で全員跳ね飛ばされた。

一人は蛙のような呻き声を上げて壁にぶつかり、一人は布団の上に頭から転がって動かなくなつた。

一人は見張りをしていた男子の方に跳ね飛ばされ、二人一緒に倒れこんだ。

「ふう……ふう……ふう……ふう……」

田にも止まらない速さだつた。瞬きすれば見逃してしまつくらいの。

一瞬でカッターを持つた男子を残し、他全ての男子を綾は行動不能にした。

「…………へ？」

一人取り残された男子は、田の前に広がつた事態に何が起きたのか分からなかつた。部屋の隅で見学していた女子達も、田をまんまと見開き、立ち尽くす綾を黙つて見つめた。

誰も話さず動かない静寂に包まれた中、綾だけが動き出した。

一步、また一步と一人立つてゐる男子の田の前まで歩み寄る。

「…………」

男子は田の前の少女を見下ろした。

跳ね飛ばされたクラスメート、呻き声すら上げない友達、跳ね飛ばされたクラスメート、その友達を跳ね飛ばした、自分よりも頭一つ分以上に小さい少女。

幾つかの事柄が、何度も男子の頭の中をグルグル回る。

綾の腕がゆっくりと上がる。男子はその腕が上がるにつれ、顔を上げる。

「…………へ？」

一瞬、綾の腕がぶれた。ぱしん、乾いた音が室内に響いた。

次の瞬間、綾の左手に今しがた男子の持つていたカッターが納ま

つていた。

「……え、え……えええ？」

男子は、ぽかんと 指が一つ残らずぐしゃぐしゃに折れ曲がった自分の手と、間接が一つ増えた腕と、カッターを持った綾を交互に視線を向けた。

それと同時に女子の一人が失神して布団に崩れ落ちた。誰一人手を貸すことはなく、室内にいる全員が綾と男子の行動を見続けた。綾はカッターを持つていない右腕を掲げ、ゆっくりと振りかぶつた。髪が捲れて綾の爛々と輝く血のよう赤い瞳が覗けた。

「…………え、「!?

綾の右腕がぶれる。そして、この時、綾の変動に気づいた最初の少年は……。

「…………？ た、助けっぁあ」

弾丸のように突き出された綾の右腕によって、腹に響くような破裂音と共に男子の頭は吹き飛ばされた。

男子の頭だつた部品は細切れに飛び散り、男子の後ろの壁に白いゲル状の物体や、血液、脳髄、眼球などが貼り付けられた。

頭を失つた男子は、吹き飛ばされて剥き出しになつた首の血管から規則的に血液が噴出し、男子の衣服と布団を赤く染めていった。その体は糸の切れた人形のよう音もなく倒れこんだ。痙攣するせず、文字通りただの血を吐き出す物体に変わり果てた。

「…………！？ つ！？ ぐぼおつ！」

それを見ていた女子の一人がへたり込む。次いで悲鳴を上げるよりも先に吐いた。他の女子達も先ほど食べたお菓子を吐き出し、中には失禁する者もいた。

鉄臭い臭いと、胃液の嫌な臭い、失禁した尿の臭いが室内を漂つた。

綾はそれらを黙つて見下ろした。捲り上げられた下着を下ろすと、月明かりが射し込む窓を開け放つた。

窓から入り込む夜風が室内の濁つた空気を洗い流し、綾の黒い髪

をなびかせた。

後ろを振り返る。血液を吐きつくした死体、吐しゃ物に塗れた女子達、いまだ動かない男子達、グロテスクに汚れた室内。

綾にとつてすべてがどうでもよく思えた。自分は人を殺してしまつたことも、どうでもよかつた。

ただ、警察に捕まれば無期懲役かな？　と面倒な事になるだらう未来を考え、煩わしく思えた。

ふと、握り締めていたカッターが目に入った。その瞬間、綾の脳裏に閃光が走った。

窓枠に手を掛ける、身を乗り出して窓枠に立ち上がる。後ろ手に上の窓枠を掴む。綾の体を月明かりが照らした。

眼前に高くそびえ立つた山々が見えた。鬱蒼とした木々が月明かりを阻み、夜風が木々をなびかせている。

「ここでは邪魔が入りそうだけど、あそこなら邪魔は入らない」

視線を下に向けると地面まで7～8mくらいの高さ。真っ黒なアスファルトが綾を見上げていた。普通に降りればまず骨折は免れない高さだ。

しかし、不思議と綾の心に不安は無かつた。この程度の高さで骨折などするわけがない、根拠のない、確信めいた思いが彼女を突き動かした。

「さよなら」

軽く中腰になる。両足に力を込めて高く飛び上がった。反動で窓枠がひしゃげ、破壊されたが、綾は氣にも留めなかつた。

助走なしで20m近く水平に飛ぶ。地面に両足で着地する。何事もなく立ち上がると綾は走り出した。

綾は振り返ることなく、山々を目指して暗闇の中を走った。その肩は震えてなかつた。

右手に力を込める。左手の手首に添えたカッターが音もなく引か

れた。

赤く染まつたカッターの刃。あまりのあつけなさに拍子抜けしてしまつた。

テレビなどで見た映像では血はじわりじわりと滲み出すようなものだつたのに、実際は少量の血が勢いよく噴出した後、体中の血液がポンプで押し出されるように、一定の間隔で噴出していた。

握り締めていたカッターを放り捨てる。手首からこぼれる血液が地面に降り注ぎ、その内の何割かは腕を伝つて肘から垂れて私の服を濡らしていく。

立つたまま背中の木々にゆっくり体重を預ける。時期に、出血多量で死が訪れるのは間違いない…と思いたい。

両親も、教師も、誰も助けてくれなかつた結果、私が選んだ死といつ終焉。

冷たくなつた私の亡骸を見て、父さんと母さんは涙を流してくれるだろうか？

それとも、面倒な事をしてくれたと怒鳴りつけられるだろうか？

そう思つと申し訳ない気持ちも湧かないでもない。

けれども、やはり遅かれ早かれ何時かはこうなつていたと思ひ。足に力が入らなくなり、ずるずると巨木に背中を預けたまま座りこんだ。

クス、つと口から笑みが零れる。すぐにそれは笑い声に変わつた。

「あは、あはは、あははははは」

不思議と、自分がとても滑稽に思えた。

普通こういう場面なら、やつぱり死にたくないとか後悔する場面かもしれないのに。

だけど、どうしても後悔という感情は訪れなかつた。

今私にあるのは、現実から逃れられる歡喜と、手足を撫でる山風の冷たさだけしかなかつた。その冷たさのおかげか、すぐに笑いは収まつた。

ふと、場違いな考へが浮かんだ。これから死んでしまうけれど、

どうしても気になってしまった。

「あ、服に泥がついちゃう」

自分がどこに腰を下ろしているのか思い出した私は、あわてて立ち上がりうつと思つた。けれども、よくよく考えてみたらジャージはすでに血で汚れてしまつているのに、すでに立ち上がる力も残つていない。

大きく息を吐き出す。

ふわり、突然私の周囲が光に照らされた。顔を上げて、息を呑んだ。

それはとてもきれいな夜空だった。

後にも先にも、これほど綺麗な夜空は見たことがない。……といつても、ゆっくりと夜空を見たということはないので、過去にその時よりもはるかに美しいプラネタリウムが広がつていたこともあったかもしねり。

けど、それでも私は、自らを白銀に染め上げる月の光と、全てを優しく包み込む母なる夜の闇が、例えよつもないくらい美しいと思えた。

ゆるやかに視線を落とす。暗闇の中でははつきりと分からぬが、きっと私の服は元の色が分からぬくらい血の色。

さつきまで文字通り、痛いほど主張していた手首のジクジクとした痛みも、はつきりと体温を奪つていく大地の冷たさも、少しずつ感じなくなつていった。

すでに自分が座っているのか寝ているのかも分からぬ。ぼやけ始めた意識と視界、それと同時に訪れる眠気。自然と下がつていく瞼に逆らおうとは思わなかつた。

(……いの?)

あと少しで死が訪れるというその時、誰かの声が聞こえたような気がした。

## 第一話・予感（後書き）

万が一見落としがなこよつ、毎回前書きで注意書きをします。

## 第二話・変異（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮ください。よろしくお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています。\*

## 第二話・変異

目を開けたら、そこには何も無かつた。

名作、『雪国』を連想させる言葉が脳裏をよぎった。いや、比喩ではない。

気づいたら綾は真っ暗な場所にいた。あまりにも暗すぎて目を開けたのかも分からぬ。

辺りを見渡しても真っ暗な闇、闇、闇。

驚いた綾は思わず視線を下ろす。不思議なことに、眼前に何があるのかも分からぬ暗闇の中、自分の体だけは白く浮き出て見えた。身に着けていたジャージすらなく、裸のまま暗闇の中をぽつんと立っていた。

しかし、足裏からは何の感触も伝わってこない。自分が立っているのか座っているか、それとも寝ているのかも分からぬ。お尻も、背中も、お腹も、何かに触れている感触はない。

「あれ？…………あれれ？」

綾はわたわたと足踏みをした。それでも両足裏からは何の感触も伝わってこない。だからといって、浮遊感もなく、落卜しているようにも感じなかつた。

「何、ここ……私つて手首切つて自殺したわよね…………どうして生きているのかしら」「

独り言をぼつりとこぼす。氣味が悪くなつた綾は何でもいいから声を出して薄気味悪さを消そうとした。

「もしかしなくても…………ここって死後の世界？　死後の世界ってこんな所なの？」

視界が滲む……涙がこぼれそうになつた。

綾はあわてて涙を拭つた。ふと、綾は今しがた目元を擦つた両手を見た。

「あれ…………血が付いてない」

べたべたと体を撫で回す。どこを触つても血は付いてなかつた。

「不思議……それに死後の世界つて何もないのね……」

(綾はまだ死んでいないから、ここは死後の世界ではないわ)

思わずこぼれ出た言葉に突如、返事が返された。突然のことにより見開く。

「……だ、誰ですか？ わ、私以外にも誰かいるんですか？」

「どこにいるのか分からないので、綾はとりあえず声を上げた。意味はないと思つたけど辺りを見渡す。

(ああ……綾、怖がらないで。私は綾の味方だから、怖がらないで)

「「ど」「ど」にいるの？ お願ひだから怖がらせないで」

綾は手当たり次第に手を伸ばす。その手は何も掴まなかつた。  
(大丈夫……もう綾を虐めたり怖がらせたりする人はいないわ。あの人達は私がやつつけたの……綾のせいじゃない。綾がやつたんじゃないの)

この言葉に息を呑んだ。どうしてその事を知つている？ あの時の事を知つているのは室内にいたクラスメートだけのはずだからだ。どこから話してきているのか分からぬけど、その声はあまりにも寂しそうで、あまりにも悲しそうな響きだったのが良かつたのだろうか。

不思議と、綾の混乱は少しづつ静まつていった。

「…………あなたは誰で、あなたは何を知つてているの？」

落ち着くと、今度は疑問が後から後から湧いてきた。だが心のどこかで、この質問は無意味なものなのではないか、綾はそう思つた。  
(私は貴女のことなら何でも知つてゐるの……初恋の人から貴女しか知らない悩み、はたまた家族との不和から、初めて初潮を迎えた時の貴女の台詞まで)

綾は言葉が出なかつた。普通なら鼻で笑つてしまいそうなのに、もう綾にはそれを信じない選択を選ぶことは出来なかつた。

「あなたは……何なの？」

(私は綾、綾は私、私は私で、綾は綾……)

まるで謎々のよつた返答だった。

(「めんなさ」……もつとゆつくり綾と話したいけど、今は時間が  
ないの)

声が話を仕切りなおした。

突如、綾の眼前に横並びに白い光の玉が一つ出現した。ピンポン  
玉くらいの大きさで、淡い光を放っていた。

「な、何これ？」

横並びの光の玉が音も無く動き出し、等間隔で円の軌道を描く。  
すると、玉の一つが透き通る青海のような青色に変わり、もう一つ  
が血のような、ドロドロとした赤色に変わった。

(これから綾は生き返る)

先ほどまで話していた声ではなかつた。さつきよつもずっと暗く、  
静かで、それなのに優しいようにも思える声。

その声に、今朝の出来事が綾の脳裏を過ぎつた。

「あなた……その声、まさか、あの時……それに生き返るつ  
て？」

生き返るという言葉に興味を感じた。しかし、それ以上に綾の胸  
に恐怖が湧き上がつてくる。声が震えてしまつのを抑えられない。  
生き返つてしまつたら、大切な何かを失つてしまつ。そんな気が  
したからだ。

(綾は不思議に感じていらないのね。どうして綾があの人達の拘束を  
振りほどくことができたとか、どうしてあんな高いところから降り  
て平気なのか、とか)

「え……つと、それは……それは……」

綾は愕然とした。

今までそれぐらい出来て当たり前という意識が根底にあつたが、  
落ち着いて考えると、事実に気付く。

綾が行つたことはどれも不可思議な事だった事を。

どうしてあんなに簡単に振り解けた？ 男達に押さえつけられた

時、どんなに力を振り絞ってもビクともしなかったのに。

そもそも、運動オノンチで、体育の成績も必ず最低点を取る綾にとって、あれらの行動はどう考えても無理なことなのだ。

この時、初めて綾は疑問に感じた。

そういえば、なぜ出来て当たり前だと思つたのだろうか。どう考えても不可能な事なのに。

(それだけじゃない、貴女は3階から飛び降りたのに怪我一つない。あまつさえ、助走なしで20㍍近くも飛べる異常な脚力)

「…………」

(肉眼で認識できない程のスピードでナイフを奪う異常な瞬発力、素手で人間の頭を吹き飛ばしてしまったのに、その衝撃に耐えられる常識外の頑丈さ、どれをとっても異常な話だと思わない?)

「…………」

あの時の出来事を一つ一つ思い出していく。

骨を碎く感触、クラスマートの頭を吹き飛ばした感触、体を撫でていく冷たい夜風、手首から流れしていく自分の血液。

体内の胃液が込み上げてきた。抑えようと両手を口元に持つてきました瞬間、その両手が血みどりに塗れていたことを思い出し、逆効果になってしまった。

吐き気を堪えて押し黙っている綾に、声はかまわず話を続けた。

(そんな力を綾は手にする。私が綾をそう作り変える……いえ、そうじゃない。作り変えるのではなく、抑えていたものを、元に戻す)

その言葉を聞いて綾は首を振った。

「作り変えるって、どういう事よ！ それに、あなたはだれなの！ 姿を現してよ！」

綾は聞き返す。何かが、綾の頭の中で激しく何かが鼓動する。息が荒くなつていいく……上手く呼吸できない。

気づいたときには既に、倒れて横になつていた。

「お願い……もう止めて、許して、私が何をしたのよ」

(勘違いしないで、私は綾を助けたいだけ……綾を苦しめるつもり

はない。今、綾の肉体は凄まじいスピードで変化していっている。

その影響が出ているだけ、すぐに収まる（）

「はあ、はあ、はあ、はあ……つ、うひひ……へん……きょう

…？」

朦朧とした意識の中、遂に意識を失った。

その瞬間、綾の体から光が四散していく。小さな光の粒が綾から抜けていく度に綾の体が少しづつ薄くなつていき、消えた。

（もうすぐ……もうすぐ……大丈夫、私は綾の味方）

完全に暗闇しかなくなつた場所に声は朝の時と同じく、話を続けた。

残つていた玉の一つ、透き通るような色をした青色の玉が、血の  
ような赤色の玉に包み込むように飲み込まれていく。

（大丈夫……私はずっと側にいる。今までも、そしてこれからも）

その言葉を最後に、暗闇の中、小さな光が現れた。

光は少しづつ強くなつていき、人間くらいの大きさになつた時、  
一瞬、形を変えた。

（ずっと……ずっと味方だよ……綾……）

ほんの一瞬、光は綾の姿をとつた。

次いで、その光が強く発光した。目を開けられないくらいの強さ  
だつた。そして光は一瞬で消え、それつきり光は姿を消した。

夜空よりも黒かつた森。その森が山々から姿を現した太陽に照ら  
され、少しづつ本来の色を取り戻し、美しい外觀を見せ始めた。  
太陽が高くなるにつれ緑葉の鮮やかさが増していく。森に棲む動  
物達も徐々に木々の隙間から降り注ぐ光が強くなるにつれ目を覚ま  
し始める。

早朝といつてもいい時間帯。肌寒い空気が山々を満たしていた。  
その数多く連なつていてる木々の中で、一際大きい木にもたれかか

つて寝ている少女、綾の姿があつた。

学校指定の青色のジャージ上下は、乾いて赤黒く変色した血で汚れてしまっていた。それだけでなく、綾の周りにはおびただしい血痕の後が残り、異様な雰囲気を醸し出していた。

そして綾の元にも太陽の光が射し込み、綾を照らした。

「…………ん…………ん…………眩、しい…………」

その眩しさを嫌がるよつに綾は寝ぼけながら、腕で両目を遮つた。

「ん、んん…………」

しばらく、そのまま綾はじつとしていた。その間にも少しづつ虫達の囁きも増え、綾の頭上を鳥が何匹も横切つていった。

太陽の日差しが少しずつ強くなつていき、綾の身体を焼いていく。

「…………眩しい？ 眩しいつて……ええ！？」

ぐつたりと寝ていた綾は眠氣を跳ね飛ばして立ち上がつた。重力に負けていた瞼もやる気を出した。

「う、おお？ ひ、貧血が」

寝起きに勢いよく立ち上がつたのが原因で貧血を起こし、すぐに地面に再開した。

「痛い、全部痛い」

両手を顔に当てて綾はのたうちまわつた。

「痛い…………もう、寝起きから悲惨だわ」

泥だらけになつた綾は、そのまま大の字に仰向けになつた。立ち上がつたらまた貧血を起こしそうだし、どうせ泥だらけになつてしまつたんだからという思いもあつた。

ぼんやりと木々の隙間から青空に目を向ける。

透き通るような青空に白くて小さい雲が所々浮かんでいた。太陽の光がさらに美しさを引き立たせていました。

首を横に傾けた。

雑草が繁茂し、木々が邪魔をして日の光があまり届いていない辺りは薄暗かつたが、奥の方に何かの動物が動いたのが分かつた。

「まるで別世界みたい。あつちが天国で、こつちが地獄。あんなに

大きいのに、あんなにも遠い」

両腕を掲げる。精一杯伸ばしても、少しも近づいた気がしない。

むしろ手を伸ばした分、ここからの距離を実感させた。

「手を伸ばせば伸ばした分だけ遠くなるなんて、意地悪な青空ね」

太陽を隠すように重ねると、光で手が透けて見えた。手の中を通る青白い血管が、暖かな炎のような糸に見えた。

「とても綺麗、なんだか身体が消えていくみた……！？」

最後まで言葉が出ることはなかつた。綾の表情も強張つた。

最初の時と同じ、それ以上に早く起き上がつた綾はたつた今見つめていた両手を見つめた。袖口は血で真っ赤に染まつていた。

手のひらにうつすらと付いた血痕が痛々しく映つた。

震える右手で左手の袖口を掴む。胸が苦しい、背筋に、じわつ、と汗が吹き出た。綾は意を決し、ゆっくりと袖をまくつた。

「……嘘」

左手首には血痕しか残つてなかつた。

「なんで？ どうして？」

傷が塞がつたのかと思い、血痕の付いている手首を掴み、擦つてみた。

綾の感覚は少しのくすぐつたさと抓つた軽い痛みしか伝えてこなかつた。

目を凝らしても、もともと怪我をしていないと思えてしまうくらい、何の傷跡もなかつた。

「どうなつているの？ それに……」

綾は顔を上げて、自分を照らす太陽を見つめた。

「全然眩しくない……瞬きだつてしていないのに」

視線を落として薄暗い木々の中を見つめた。さつきまで太陽を見つめていた両眼は、はつきりと、はるか奥の方に生えてある小さいキノコらしき物を見つけることができた。

「どうしてあんなに遠くの物が見えるの？ 私つてこんなに目が良かつたつけ？」

綾の背筋に冷や汗が流れた。ふつふつと湧き上がる違和感と恐怖感を振り払って立ち上がった……ところで、あることに気づいた。

「そういえば、ここからどうやって下山すればいいのだろう」

辺りを見渡すと、似たり寄ったりの風景が広がっていた。

一度大きく深呼吸をして、ため息を吐いた。そして、綾は田に付いた場所に足を踏み出した。

## ある刑事達の会話（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮ください。うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## ある刑事達の会話

「これはまた隨分と派手にやらかしたな、おい……」

勤続25年、少年課のベテラン刑事、大原はあまりの部屋の惨状にため息をこぼした。

亞麻色のくたびれたコートが、刑事という仕事の激務さを伝えていた。

「前田、お前はよく平氣だな」

大原は黙つて壁を見つめている相方に眉をひそめた。

「そうはいつても大原さん。今更血が飛び散っているくらいで気にしていたら、この仕事はやつていけないでしょう」

壁一面から目を逸らさないまま、大原に背を向けて返事をした。

「それにも限度があるだろうが、俺だつて長くこの仕事をやってきたが……はつきりいつて異常だよ」

「事件に異常も何もないでしょ」

「それは……そうだけどよ、今まで色んな事件を扱つてきたが、その中でも群を抜いて異常だと思っているんだよ」

大原も前田の横に並んで壁を眺めた。横目で相方の横顔を見つめたが、すぐに壁の方に向き直った。

「奇遇ですね、私も同意見です。それにしても、何をどうすればこうなるのでしょうかね」

その言葉を最後に互いに沈黙が訪れた。

大原と前田は、眼前の壁を静かに見つめた。

元は白色で小奇麗だつたであろう、白い壁紙は血を塗したように真っ赤に染まつていた。それも壁だけではなく、並べられていた布団にも、ふすまの美しい山脈の水墨画にも、取り付けられていた時計にも血が飛び散っていた。

大原は視線を上げて、取り付けられている時計に目をやつた。

まるで、飛び散った血で裝飾された悪趣味な時計のように見えた。

規則正しく時を刻んでいる時計の針の長針は血で見られなくなっていたが、短針は昼の2時を指しているのが見えた。

「血で染まつた寝具と壁、おまけに時計か……まるでホラーですね」

「奇遇だな、前田、俺もそう感じたところだ。なあ鑑識さん、一つ

バカな事聞くが、熊とか野犬とかじやない……よな？」

大原は側で現場検証をしている鑑識の一人にぱつりと尋ねた。

振り返つた鑑識の一人は、まだ年若い青年だった。彼は、一瞬考えた後、その言葉に答えた。

「僕としても、できることなら熊と断言したいところですけど、どちらも違います」

「それじゃあ、この部屋の惨状は、何が原因で起こったと思う。俺の固くなつた頭では何も思い浮かんでこないんだ」

「すくなくとも、熊や猪……野生動物という線は薄いですね。どちらかと言うなら、爆発物を使用したと考えれば、まだ納得できます」「といつて、頭の狂つたバカが爆弾でも投げつけたのか？」

青年は横に首を振つた。

「その可能性は高いと思います、現時点では何とも言えませんが、それでも腑に落ちない点がいくつかあります」

部屋を見渡していた前田も話しに加わってきた。

「どんな些細なことでもいい、今の段階でわかつているだけでも教えてくれ」

青年は少し、考える素振りを見せた。

「わかりました……けど、まだ確信があるわけではありませんから、あくまで参考程度にしておいてください」

「わかつていいよ、俺達だって今すぐ犯人特定に繋がるとは思つちやいない」

大原はコートのポケットからメモ帳とボールペンを取り出した。

青年は大原がメモを取る用意がすむのを待つて話し始めた。

「不審点は一つ、凶器に使われたと思われる爆発物と部屋の状況です」

「それのどこがおかしいと思うんです?」

「仮に、小さな爆弾が使われたとします。その爆弾の威力は人間の頭を吹き飛ばし、壁一面に血液を飛び散らす程の……それほどの威力の爆弾が使われたなら、被害者の身体に確実に残っているものが無いんです」

「それはいつたい?」

「火傷です」

「火傷? なんで火傷がないと変なんだ?」

前田は疑問に感じて聞き返した。

「たとえ方向性をつけて爆発させたとしても、普通は身体や回りの物にも多少は爆風が届くんです。しかし、あの死体には火傷の痕がどこにもありません」

「ふむ、火傷の痕か……」一いつ田たは?

「何よりも疑問が残るのが、爆発物の破片が何一つ残っていないことなんですね」

青年の言葉に、メモを取っていた大原が声を上げた。

「……残っていない? それは本当のことか?」

「はい、飛び散るはずの破片が一瞬で燃え尽きるくらいの爆発なら、まちがいなく死体は火傷を負っているはずなんです。しかし、火傷は見当たらない、おまけに破片もない、お手上げですよ」

「……君の意見では、どう考える? 何でもいい、現実的にありえないことでもいい、これと同じ事を行うにはどうすればいい?」

前田が青年に尋ねた。青年は少しの間口を開いたが、すぐに口を開いた。

「もし、これと同じことを行うとしたら、ハンマーですかね、と言つても、普通のやつでは駄目です。人の頭を覆い隠すくらいの大きさで、かなりのスピードで振りぬかないと、こうはならないと思います」

頭に手を当てて大原は呻いた。

「おいおい……頭よりでかいって、どんなハンマーだよ。俺の知つ

ているハンマーっていつたら金槌くらいしか思い浮かばないぞ」

「安心してください大原さん、私もそれくらいしか思い浮かびませんよ。そんな物をどうやって調達したのだろうか？」

「それ以前に、どうやつたらそれを使うことができたのかというところだな」

大原はメモとペンを懐に戻した。

「そんなの特注に決まっているだろ、ここであれこれ話しても仕方ない。後は本部で情報整理をした後に再調査だ」

「ところで、被害者の生徒は今どうなっている？」

大原と前田を乗せた車は、林の隙間からこぼれる夕陽を搔い潜るように走った。

林道を走る車が低い音を立てて排気ガスを吐き出した。車内のヒーターの電源を入れ、少しずつ温まっていく車内に頬を緩ませた大原が、前田に尋ねた。

「被害にあつた男子生徒は一人以外、死亡しました。その一人も、頭を強く打つ影響で、脳死状態。植物人間だそうです。ただ、同室の女子生徒は全員、外傷はなかつたとのことです」

「外傷は……か、内面はかなり酷いんじゃないのか？」

じろり、前田を睨んだ。

「睨まないでくださいよ……女子生徒は全員病院に搬送されましたよ、よほどショックを受けたんでしょうね。普通に鎮静剤を使つても効果がなかつたらしくて、倍の量を使つたらしいですよ」

「無理もない、大原は心の中で女子生徒に同情した。

「ところで、一人行方不明になっている女子生徒の事は耳に入っていますか？」

「知っているよ、同室の高田綾の事だろ？ ホテル中を探し回つても居なかつたんだ。おそらく犯人に連れ去られているか、既に殺されているか、そのどちらかだろう」

胸中に湧き上がつてくる煮えたぎる何か。大原はそれが何か分かっていた。

この仕事に就いた時から幾度となく感じた感情……怒り、犯人に対する怒りだ。

「大原さん、そろそろ行きましょう。いつまでも温まっている時間もないでしょう」

その言葉に、大原はいつの間にか握り締めていた両手の力を緩めた。

「自分も、犯人には怒りを覚えています。けれども、ここで怒つても仕方ない。この怒りは犯人逮捕に注げばいいのですよ」

大原と前田の二人を乗せた車は林道を走り続ける。夕日が作り出す

「そうだな、俺らしくも……ん？ あれ？」

「どうしたんです？」

「いや、な、今人影が見えたような気がしたんだ」

大原はガラスに鼻が触れるくらいの顔を近づけて外を見つめた。緩やかに流れしていく木々、そこに人影はなかった。

「気のせいですよ、ここいら辺は熊もてるらしいですよ、看板か何かを見間違えたんでしょう」

「気のせい……だったのか」

「そうですよ」

車は林道を抜けて走り続けた。その車が向かう先、捜査本部のある警察署を目指して。

## 第四話・夜の街（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮ください。うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## 第四話・夜の街

トンネルを抜けると、そこにはアスファルトがあった。

それを田にしたとき、綾の両眼は自身の意思を無視して涙を流した。

「やつと……やつと下りることができた……やつぱり、さつきの道を左に進んで正解だつたんだわ、幽霊のどそつなトンネルでも我慢して進んでよかつた」

よろよろとアスファルトで舗装されている道路まで出る。途端に膝の力が抜けたて座り込んでしまった。ひとつ、ふたつ、水滴が道路を濡らす。

「ううう、猪とか野犬とかなら追い払えると思っていたのに、熊は卑怯だわ。あの爪とか牙とか、人間に無いものを持ちすぎ。生きた心地がしなかつたわ」

冷たいアスファルトの感触が、不思議と心地よかった。自分は今、文明に触れている、知恵に触れている、奇妙な安心感があつた。

「それにしても、自分でもよく下山できた。普通だつたら3回は命を落としているわね、絶対」

綾の脳裏にここまで苦難が蘇つてくる。

下山を始めてから数十分後、突如飛び出してきた動物、綾の腹あたりまである大きな猪だった。これは負ける、瞬時に悟つた。

だが、襲われる前に逃げようという考えが思いつくよりも先に、猪が、こちらが心配になるくらいの勢いで逃げていった。

それからさらに数十分後、草むらを搔き分けた先、野犬の群れとの対面を果たした。これは負ける、考える余地はなかつた。

だが、先ほどと同じようにこちらが行動を起こすよりも先に、四方八方に逃げていった。

さらに數十分後、三つに分かれた分かれ道に出た。とりあえず、左から行ってみよう、大して考えることなく選んだのが運のつきだ

つた。

そこから數十分後、足を踏み外して崖下十数メートルを落下することになった。

幸いにも、かすり傷ひとつあることなく、お尻に大変なダメージを受けただけで済んだ。

そこから痛むお尻を擦りながら足を動かすことしばらく、綾の身体を覆い隠せるくらいに大きい熊に遭遇した。

これは死んだな。自然と諦めの言葉が出た。

しかし、予想外にも、熊は綾を無視して走つて茂みの中に消えていった。

しばらく、その場を動くことができなかつた。

ようやく動けるようになつて下山を続けると、幽霊がダース単位で出そうなトンネルを見つけた。怖いけど、もしかしたら、人が住んでいる所に出られるかもしれないと思い、恐怖を押し殺して入つてみた。

中に入つてみると、不思議とトンネル内の壁の染みまで見ることができ、足元もはつきり確認できた。

まるで明かりで照らされたみたいに。

背筋に薄ら寒いのを覚えた。

やつとトンネルを抜けた時、人の手の入つた道路、アスファルトを見つけることができて、気が抜けてしまつた綾は、その場にしばらくうずくまつっていた。

「……あれ、よく考えたら、道路の真ん中で座つていたら危なくない？」

太陽が山々に姿を隠し始め、緩やかに綾の影を伸ばしていく日差しが少しづつ弱まつてきた。のろのろと立ち上がり、とりあえず、道路わきに寄つた。

「これで家に帰れる、けど、帰つても私は……」

綾は自分の両手をじっと見下ろした。その手で道路わきの生い茂つた雑草を掴み、身体を押し込む。

「私……殺人犯なんだよね、犯罪者なんだよね……」

茂みを搔き分け、草むらの間に腰を下ろし、膝を抱えた。道路側からは、覗き込まないと見えない、こちらからは見える。すわり心地は悪かつたが、隠れるにはよかつた。

「殺しちゃったんだよね……殺人犯なんだよね。見ている人いっぺい居たし、きっと警察がホテルに到着しているよね。それで私のことを捜しているかな、殺人犯を捕まえろ、って……」

膝に埋めた顔を上げる。その時、一台の車が綾の前の道路を走つていった。

「今……車に乗っていた人、私のこと見たかな？ もしかしたら警察の人かもしない……逃げなきや」

綾は大きくため息を吐いて立ち上がり、草木を押し分けて道路に飛び出す。

「でも、どこに逃げる？ ビニに逃げればいいんだろう？」

特に思い浮かぶ所はない。

「さつきの車……」

気づいたら車の向かった先に足を向けていた。

日も沈み、街灯が町を照らす。ひつきりなしに側を通過していく車を、綾は横目で眺めていた。

綾の横を通り過ぎていく人々たちは、コートやマフラー、手袋、暖防具を身に付けている。皆、綾の姿を見ると眉をしかめ、啞然とした表情を向けた。

綾はそれらに目を合わせずに俯いて足を進めた。

軽くため息をつく。周囲との温度差によつて、まるで白い霧を吐いているように思えた。

顔を上げて側を通り過ぎていく通行人に視線を向ける。寒そうにマフラーに顔を埋める人、手袋の上から手をすり合わせる人、ポケ

ットに手を入れる人、足早に帰路に急ぐ人、皆、寒さに耐えていた。

両手を組んで、そこに息を吐いた。

しかし、吐息より暖かい両手は温かさを感じなかつた。

「こんなに息が白くなるのに、どうして寒く感じないので、まったく寒さを感じない身体に、何度も感じた不自然さを思い出した。

そして、朝、森の中で田覓める前に見たあの夢の事を思い出す。

「まさか……まさかね……そんなことあるわけ……ん？」

聞こえてきたBGMに立ち止まる。綾の身体をショーウィンドウの中のテレビが照らす。テレビからはコメディ番組が軽快な音楽と共に始まっていた。

「そういえば、今日はこれがある日なのだね……すっかり忘れていたわ」

その番組では、司会者の毒のあるギャグと、始終笑いつぱなしのゲストが観客を笑わせて番組を盛り上がらせていた。

昨日までの綾なら、きっと笑つていただろう。

でも今の綾には、とてもではないけれど笑つていられる余裕はなかつた。

そこから離れる。テレビに振り返ることはせず、再び歩く、歩く。幸いにも、上下のジャージは直接肌に夜風を浴びせることを防ぎ、冷たい等の感覚はなかつた。といつても、身体はまったく寒さを感じていないので、たとえ手足がむき出しでも、平気だつたかもしれない。いや、平氣だ。

言葉に出せるような証拠はない、けれども、大丈夫だといふことを理解できた。

「どこに逃げようか」

特に行き先があるわけでもない綾は、気の向くままに歩いた。

頭の中を、昨日から今日までの出来事が、繰り返し、繰り返し、鮮明に再生される。

自分を犯そうとする獣のように血走った瞳、人を殴った感触、肉

を殴った感触、人を殺した感触。すべて、たった今起きたことのように思い出せる。

けれども、後悔はしていないし、罪悪感を覚えることもない。

自分が犯されそうになつた。それが嫌だから、無我夢中で抵抗したら殺してしまつた。殺されても仕方ないことを、あいつ等はした。言い訳は、いくつでも作ることができた。

でも、すべて違うような気がする。

本当は、あんなふうに彼らに仕返しがしたかったのかもしれない。初めて人を殺したのに、なんの感慨も無い。

感覚が麻痺してしまつてゐるのだろうか。本当は今にも泣き出してしまうのを、無意識に抑えていたのだろうか、それも分からぬ。解けない疑問に、自然と歩調が速くなつっていく。

胸中に渦巻く捕らえることのできない何かが、自分に答えをさせやいているような気がした。

視線を通り過ぎて行く車や人通りに向ける。並木道を進んで行くと、商店街に出た。既にいくつか照明は消え、ほとんどの店はシャッターを下ろして閉店していた。

例外は喫茶店やファミレスなどの飲食店などは営業していた。窓からのぞいた中は客で満員、それに近い人数で席は埋まっていた。見て回つてみると、どこから肉の焼ける良い匂いがしてきた。辺りを見回すと、牛のイラストが大きく書いてある看板が見えた。匂いはここからきているのだろう。いはここからきているのだろう。ぐう。

思わず鳴つてしまつたお腹を押さえる。今頃になつて、自分が今日一日何も食べていないことに気づいた。

「お腹すいた……」

ジャージのポケットから財布を取り出して中身を確認、お札と小銭がちらほら……計2780円。

ぐう。

また鳴つてしまつた。いちど意識してしまつと、どんどん空腹感

が強くなつていぐ。強くお腹を押さえつける、余計に大きな音を立てた。

「仕方ない、コンビニに行こう」

商店街を抜けた先に見つけたコンビニで、おにぎりを買った。出るときに時間を確認したときは、20時を少し過ぎていた。  
休める所がないかと探し回り、やっと公園を見つけてたることができたとき、お握りは冷え切っていた。

公園の中に建てられた時計を見て、一時間近く歩き回つていたことに気づいた。

「ずいぶんと遅い晩御飯になっちゃつたな……、カツラーメンとかにしなくてよかつた。冷たくなつたラーメンなんて食べたくないしね」

ベンチに腰を下ろす。夜風と体温によつて冷やされた木板が、ジヤージ越しにお尻に触れる。

「……冷たいけれど、冷たくない……いつか、それならそれで楽だし」

もう気についても始まらない、綾はあれこれ考えるのを止めた。  
ビニールの袋からおにぎりとお茶を取り出す。鮭、昆布、シーチキン、基本だ。

本当は梅にしたかったけれども、無かつたので妥協した。  
とりあえず、温くなつたお茶を取り出す。体温よりも低いお茶の温度が、微妙に心地よい。

小さくため息をついた。いけない、何だか今日一日の間に沢山ため息をこぼしたような気がする。

綾は背筋を正して気を引き締めた。そして、お茶のキャップを開けて、一気に喉に流し込んだ。

「……んん!? げほ! げほ! うええ!」

一気に吐き出した。

「げほ、げほ、な、なにこれ、味が変」

綾は飲んだお茶をすべて吐き出し、一息つくと、今度は買ったお茶を眼前まで持ち上げた。ペットボトルの中は半透明の茶色い液体が容器を満たしていた。

蓋に鼻を近づけて臭いを嗅いでみる。

「うへん……変な臭いはしないし、色はお茶とそんなに……まあ、おかしくても分からぬけど」

恐る恐る、少しだけお茶を飲んでみた。

「……うええ、不味い、不味すぎる、飲み物じゃないわ、これ」胃に入った分はすぐに強制的に吐き出された。

涙目になりながらも、今さつき苦しまれたお茶を見つめた。

「腐ったお茶を売るなんて、どういう店なのよ」

すっかり気分が落ち込んだ綾は、お茶をビニールの袋に戻した。気を取り直して、鮭のおにぎりを取り出す。

「はあ……あんなに不味いお茶飲んだのは初めてよ」

おにぎりを包んだビニールを剥がす。のりを破かないようにきれいに剥がすことができた。

「あのコンビニは、なんてものを売つけるのよ……まつたく」

三角形の黒いおにぎりを一思いでぱくり。

口中に広がる、ほんのりと香るのりの匂い、冷え切った米の味と鮭の味。

「…………ぶへえ、じほ、じほ、うえええ！　げほー！　げほー！」

それらを堪能する前に吐き出された。

「うひひ……ま、不味い、言葉に出せないくらい不味い。おにぎりまでも腐っているとは思わなかつた……コンビニ店員、無表情でなんでものを売りつけるの」

胃液の苦い味がさらにもう一度吐き気を誘つ。涙目になりながら、お茶を飲もうと袋に手を伸ばそうとして、止めた。

「やうじえば、お茶も駄目なんだつけ」

ビニールの袋から、残りのおにぎりを取り出し、裏返す。賞味期

限は後8時間も余裕があった。

「よく考えたら、お茶が腐るつて、いつたい何ヶ月置いたら……ああ、お腹減った」

残りのおにぎりを食べようとする気持ちも薄れた。しかし、お腹は激しく自己主張を繰り返し、食べ物を催促してくる。

綾はお腹に手を当てて空腹を紛らわした。気休めにしかならないけれど、少しは空腹感が薄れたような気がした。

綾はベンチの上に横になつて休んだ。吹き付けられる風は冷たいと感じたけれども、寒いとは感じなかつた。

綾はゆっくりと目を閉じた。

夢でありますよつに。

心の中で、お祈りした。

ぐう〜。

その願いにお腹が答えた。なぜだか涙が出てくるのを感じた。

広い部屋だつた。

床には素人目にもわかるくらい柔らかそうな絨毯が一面に敷かれていた。部屋には窓が一つもなく、汚れ一つない真っ白な壁が四方一面に広がつていた。

その一つの壁には、場違いな鋼鉄製のドア、横にバスワードが入力できるようになつてているコンソールが取り付けられていた。

天井には大型の空調機が動いており、部屋の空気を清浄にしていた。

その中央に大きな丸い円卓が、ぽつんと鎮座していた。その円卓には十個の椅子が置かれ、そのうちの五つに、男女が座つていた。

「なあ、あの話はどうなつている?」

暖房によつてほどよく温まれた室内。椅子に座つていた一人の学

生服を着た男が誰ともなく訪ねた。

ぼさぼさの茶髪にきりりとした目、高い鼻、皮肉げにゆるんだ口元、どこから見ても優男に見えてしまいそうな男だったが、瞳の奥にある絶大な自信がそう見せなかつた。

「あの話つて何？」

その言葉に返事を返したのは対面に座つている、藍色の学制服を身に付けて、長い髪を後ろに縛つた女性だつた。切れ長の目と、程よく高い鼻、横一線に閉じられた唇、全般的にすらつとした顔立ち。背筋を正して座つている姿と、後ろに縛つた髪が武士を連想してしまつ、文句なしの美人だつた。

「明美、亮一が言つているのは麻薬を売りさばいている、あのクズのことです」

「明美、亮一が言つているのはへロへロになる薬を売つてゐる、あいつです」

女性の疑問に答えたのは女性の横に座つていた少女達だつた。瓜二つ、同じ顔をした、双子の少女が手をつないで座つてゐた。斜めに下がつた眉と、眠そうに閉じられた両目、可愛らしくちょっとある鼻と小さな口、二人が着てゐる白のワンピースが少女達を幼く見せた。一人の首にかけられた純銀のネックレスと、左右対称になるように互いの指にはめた指輪が、蛍光灯にきらめく。

「違えよ、いや、それもだけど、それじゃなくてさ、中学生惨殺事件の話だよ」

男、亮一は、手を振つて答えた。

「今朝のニュースでやつていたやつ？　あれがどうかしたのか？」

武士のような女性、明美は、姿勢を崩すことなく、視線だけを亮一に向けた。

「あの事件、まだ犯人が見つかっていないはずだつたよな？」

「見つかつたというニュースは聞いていないが、何か気になることがあるのか？」

「実はさ……」

鬼気迫った表情で、亮一が円卓に身を乗り出した。明美は視線だけを向け、椅子を動かして身体を引いた。双子の少女、明日香と明日菜は眠そうな顔を、亮一に近づけた。

「俺と明日香と明日菜の三人で、ちょっと事件現場を見に行つたんだよ」

「見に行つたって……お前、見つかってはいなうだろうな？」

明美が驚いて亮一に問いただした。

「その辺は問題ねえ、そのための明日香と明日菜だ」

「そのための私達」

「用は身体が目当て」

「明日香と明日菜は、さりげなく、凄いことを言つた。

「おい！ 人聞きの悪い事を言つた！ お前ら喜んでついてきただろ！」

「ひどい人……私達があなたに逆らうと思つ？」

「もうあなたの身体無しでは生きてゆけないのに？」

明日香と明日菜はお互いの手を組んで、すすり泣いた。

誤解を招くようなことは言つた、五階も六階、身体が目当てのは確かでしょうに、ねえ、明日菜？ 何て可哀想な私達、涙なくしては語れぬですね、明日香。

静かだった部屋は騒がしくなつた。主に亮一と双子が騒がしい。

「お遊びはそこまで……で、何のために見に行つた？」

静かに、しかし、妙な迫力をもつて明美は三人に尋ねた。

部屋に再び静寂が戻つた。

三人とも、背筋をピシッと伸ばした。

「事件現場を見に行つたんだけどよ、酷いもんだぜ。部屋中に飛び散つた血痕、被害にあつた死体、ホラー映画の撮影かと思つたらいいだ」

「私達も、おもわづオシツ「漏らす」とこひでした。ねえ、明日菜」

「ええ、明日香。うら若き乙女がお漏らしだなんて、そんな……」「で、それがどうかしたのか？」

明日香と明日菜を、明美は華麗に無視した。

とりあえず亮一も、話を続けた。

「焦るなって、盗み聞きしたところみると……だ。被害者の中には、頭が完全に消失しているものや、肋骨を粉碎されているものもあつたらしいんだ」

「肋骨を……もっとオッパイ大きくしないといけないわね、明日菜」「ええ、明日香。そうすれば、ぼよよ～んとガードできるかもしません」

「もつたいぶらずに、さつさと話せ、時間の無駄だ」

お互いの胸をわしづかみしている双子を明美は意識から除外した。「ぶつちやけ、俺が言いたいことは、その事件を起こした人物は何かしらの力……俺達と同類なのかもしれないってことだ」

「ということは、オッパイだけ大きくて心許ない……と、ねえ、明日菜」

「ええ、明日香。ボン、キュー、バン、のナイスバディでなければ駄目なのですね」

「確信をもつて言えるか？ 愉快犯の犯行かもしけんぞ」

互いのお尻を撫で回している双子の存在を、明美は存在しないことにした。

「最初は爆弾か何かを使つたんじゃないか、つて話が出たらしい。けど、状況からみて、爆弾の可能性はゼロに近いって刑事と鑑識が話していたのさ」

「そうです、ぼよよ～んになれる可能性はゼロではありません。ねえ、明日菜」

「ええ、明日香。ナイスバディも夢ではないということですね」

双子の少女は椅子から立ち上がり、天井を指差した。

「ああ、どうしてあなたは明日香なの？ それはパパとママが名づけてくれたからよ。どうして私達は双子なの？ それはパパとママが頑張ったからよ。寸劇が始まった。

明美の眉が引きつった。亮一の顔から血の気が引いた。

「は、話を聞いた限りじゃ、同じ事をする為には、頭よりもでかいハンマーを使って、メジャー選手並みのバッティングをしなければ不可能らしい。しかし、普通の人間にはそんなことできるわけがない」

「ふむ……話を聞くかぎりでは、能力者の可能性が高いな」

明美は椅子から立ち上がった。そして、明日香と明日菜に身体を向ける。

突然、明美の右腕が小さく光を放ち始めた。光は徐々に右手に集まりだし、集まつた光が棒状に形作つていく。棒状になつた光が弱まり始めると共に、鮮明になつていく。光が消えた時には、一本の抜き身の刀が右手に納まつっていた。

明美は双子の少女を、ギラリと睨んだ。

「先に言つておくが、私はあまり我慢強いわけではないんだ」

殺し屋も逃げ出してしまうくらい、怖かつた。

青い顔が白くなり始めた亮一が、少しづつ明美から距離をとる。睨まれた明日香と明日菜は、眠そうな外見とは裏腹に、素早く椅子に座つた。

「どうしたの、刀なんか出して。嫌なことでもあつたの？」

「明日香、聞いては駄目よ。今日はきっとあの日なのよ」

明日香と明日菜は素知らぬ顔でとぼけた。それを見て、亮一はさらに距離をとろいどとして、壁にぶつかった。

明美の眼光が鋭くなつた。背中に感じる堅い壁の感触に亮一は涙が出そつだつた。

「そこまでじや」

大惨事が起きそつた少女は、円卓に肘を乗せ、顔の前に手を組んだまま話を続けた。

「明美、お主は少し落ち着け。明日香、明日菜、あんまり挑発する話に参加していなかつた少女は、円卓に肘を乗せ、顔の前に手を組んだまま話を続けた。

話に参加していなかつた少女は、円卓に肘を乗せ、顔の前に手を組んだまま話を続けた。

でない。それから亮一、そんな遠くまで行かないで、いっちに戻れ  
明美は少女に反論した。

「しかし、アリス様」

「じゃから、落ち着け。今に始まつたことではないじゃろう? 笑  
つて流せばよい」

少女、アリスは、絶世の美少女だつた。夜空に輝く月のように鮮  
やかな銀髪。すらっと整つた眉、長いまつげと金色の瞳、高すぎず  
低すぎない形良い鼻に、微笑んでいるように見える桃色の唇。絶妙  
のバランスで置かれた各部位のパーツは一つ一つが最大限の魅力を  
放っていた。フリルのついた黒のドレス、両手には防寒のためとは  
思えない、高級感溢れるシルクの手袋。首元から見える雪のよう  
な肌、耳に付けられたピアスが、さらに少女の魅力を引き出していく  
た。

アリスは全員が落ち着くのを待つて、話を続けた。

「話はわかつた。亮一の話からすると、その犯人は間違いなく能力  
者じや。よつて、お主らに任務を与える、よく聞くのじや」

アリスは手を組んだまま、全員を見渡した。室内は重く、静かな  
重圧に包まれた。

「まず、明日菜、明日香

「「はいです」「

明日香と明日菜は同時に返事を返した。

「お主らは、麻薬を売りさばいている、あのグループを殺せ。場合  
によつては亮一と協力してじや。部下も全員な。証拠は残すな、そ  
して儲けていた金を手に入れろ」

明日香と明日菜は同時に椅子から立ち上がり、アリスに向かって  
一礼した。

「了解しました、アリス様。不肖、『暗殺者』の明日香、行かせて  
もらいます」

「了解しました、アリス様。不肖、『暗殺者』の明日菜、行かせて  
もらいます」

明日菜と明日香は手を繋いでドアに向かつた。

「明美、亮一」

「「はい」「

明美はまっすぐに前を見つめたまま、亮一は片手を上げて返事をした。

「お主らは、協力して中学生惨殺事件の捜査に当たれ。能力者と衝突するかもしだれん、場合によっては殺害してもかまわん。亮一はさつき言った通り、お前は平行して事にあたれ」

あれ……明日菜、ドアが開かないわ、パスワードが変更されたのかしら。そんな話は聞いていないわ、パスワードを間違えているのよ。

「アリス様、能力の有無、能力の種類等は確認しなくてよいのですか？」

チラリと、明美はアリスに顔を向けた。

「確認する余裕があれば、確認してもかまわん。じゃが、能力が分からぬ以上、深追いは禁物じや」

明日菜、ドアが開きません、どうしましょ。パスワードが使えないなら呪文を唱えればいいのです、明日香。それはナイスアイデアですね、明日菜。

「アリス様、場合によつては仲間に引き込むのは駄目か？」

椅子から立ち上がつた亮一は、ドアの方に向かいながら尋ねた。

「それはお前たちの判断で決めてもかまわん」

開け／ゴマ、開け／ゴマ、アニヨハセヨ／、開く気配が皆無です、明日菜。あきらめはいけません、明日香、あきらめたら、そこで試合終了ですよ。分かりました、安西先生。

「了解しました、アリス様。不肖、『斬鉄剣』の明美、任務承りました」

椅子から立ち上がりつた明美は、ピッタリ60度の一礼をした。

「うなつたらリレミットです、リレミットしかありません、明日菜。

残念ですが明日香、MPが足りません。では宿屋です、宿屋で回復

しましょう。明日香、宿屋は外にでなければありません。そり……  
もう、駄目なのね。

ドアまで行き、手早くパスワードを入力した亮一は、改めてアリスに向き直った。  
「了解、アリス様。『幻影』の亮一、任務承りました……と」  
直後、双子の少女はきやーきやーと、はしゃぎながら部屋を出て行つた。

## 第四話・夜の街（後書き）

いちおう、読み忘れないよう、毎回前書きに注意書きを書きます。

## 第五話・出会い（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮ください。うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

「おい、お前……そんな格好で何をしているんだ？」

その言葉と共に、綾は目覚めた。広がる夜空が、今自分が寝ている場所が、ベンチであったことを思い出した。

「おい、お~い、生きているか~。俺が見えてるか~」

ベンチに横になつたまま、顔だけを声のする方に向けた。

そこには、自分を見下ろしている男がいた。茶色いジャンパー、

ジーパン、スニーカー、剃られた頭。怪しい男だった。

腹筋に力を込め……力を入れているのか分からいくらい、あつさりと起きることができた。そして、改めて男を見つめた。

「おおお、生きている、生きている、大丈夫か？ こんなところで寝ていたら凍死するぜ」

男は二ヵつと笑顔を見せた。2本抜けた前歯が少し間抜けだった。「こんな所でどうしたんだ？ もう夜中の4時だぜ。……いや、朝の4時か？ どうちでもいいか……おれ、喜一、武田喜一、喜一って呼んでくれよ」

へらへらと笑みを見せながら、喜一は自己紹介をしてきた。  
ぼ~っと、その様子を見ていた綾も、じつと綾を見つめ続けているので、自己紹介をすることにした。

「高田……高田綾です。何か御用ですか？」

「喜一！」

喜一はずいと顔を近づけて、綾に注意した。

「は！ そ、そうか、恥ずかしがり屋め、お兄ちゃんと呼びたいんだな、そうかそうか、よし、お兄ちゃんと呼べい！」

どういえばいいのか分からぬ綾は、黙つていた。しかし、喜一はこりと笑顔を見せたまま、綾を見つめる。

右を見る、誰もいない。左を見る、誰もいない。前を見る、喜一がじつと見てている。

「…………喜一…………さん」

「違うー、お兄ちゃんだ！」

笑顔のまま、気合の入った催促が帰ってきた。

「…………お兄ちゃん」

「ぶらぼー！ やつた、やつたよ俺、お兄ちゃんだぜー。」

「あの…………といひで、何か用でも……」

小躍りしている喜一に、綾は尋ねた。

「おつと、やうだつたな。お前、こんな所で何しているんだ」

当然すぎる疑問に綾は言葉に詰まった。

本当の事を言うわけにはいかなかつたからだ。人を殺して、逃げているうちに疲れて、ベンチで寝ていました。なんて言えるわけがなかつた。

「い……家出です、家出」

仕方なく、誤魔化すことにした。

「…………嘘だる」

あつという間にばれた。

「う、嘘なんかじやありません、何を根拠にそんなことを……」

「血で染まつたジャージを着ていて、家出に見えたと思つているのか？」

見えなかつた。そういうえば血が付いていたことを思つ出した綾は、次の言い訳を考える。だが、思いつかなかつた。

走つて逃げようか？ そう思い至つた綾は、チラリと公園入り口に視線をやる。

けれども次の喜一の言葉が、綾の逃避行を思いとどまらせた。

「行くところがないなら、俺の家にこないか？」

ビシッ！ つと、綾は硬直した。その様子に、喜一は今しがた自分が放つた言葉の危険性に気づき、あわてて弁明した。

「あ、でも、身体が目当てとか、そんなんじやないぜ！ そづじやなくて、行くところがないんだろ？」

あたふたと、身振り手振りで喜一は言った。

両手を組み、喜一から距離を取る。具体的には、一步横に移動する。

「…………」

「ああ、止めて！ そんな目で見ないで！ そんな口コロンを見るような目で見ないでくれ！」

綾のあまりに冷たい視線に、喜一は戦慄した。

何を思つたのか、喜一は手で顔を隠し、必死に綾の視線から逃れようとする。

「……ロリータコンプレックス」

「ぐはあ、ち、違う」

だが、そんなことでは逃れられるわけがない。

追い詰められた喜一は、年頃の女性には言つてはいけない、禁断の言葉を口にしてしまった。

「俺は口コロンじゃない！ 俺の好みは、もつと出るとこからは出て、引っ込むところは引っ込む、ポン、キュー、バン。ツルツルまな板はストライクゾーンから外れているんだ！」

瞬間、綾の視線に殺氣が混じる。

自分が何を言つてしまつたのか分かつていらない喜一だったが、綾の視線に気づき、ようやく自分の仕出かした事の大きさに気づいた。恐る恐る、喜一は弁明を述べた。傍目から見ても、情けない姿だった。

「別に、綾はまな板じゃないと思つぞ。これからどんどん成長すると思つし、まだ成長期じゃないか」

「こいやかな笑顔を浮かべ、綾の肩を叩いた。

見事なくらい、墓穴を掘つていた。

綾はこみ上げてくる怒りを必死に抑えながら、教えることにした。いくら相手がフレンドリーに接してくるからといつても、初対面なのだ。いきなり怒鳴るのは、よくない。

「それって裏を返せば、今はまな板つてことじやないですか？」

「え……あ……」

綾に教えられ、ようやく喜一は自分が墓穴を掘つたことに気づいた。

喜一は内心、自分を殴りたいと思った。

けれども同時に、ここで挽回すれば、綾の怒りも治まるに違いない。そう考えた喜一は、行動に移ることにした。

首を傾げ、片手を頭に当てて、舌を出し、ワインクして一言。

「「めんちゃー」

どこをとっても、ふざけてこるようにしか見えなかつた。

綾は顔を赤らめて怒つた。

「私だつてちょっとはあるもん！ 脱いだらす」「いんだから…」「だー！ その話は置いとけ！ そうじやなくて、ここであつたのも何かの縁。嫌になつたら、いつでも出て行つていいいからさ……なあ？ お前だつて、いつまでもここに居るわけにもいかないだろ？」確かに、いつまでもここにいるわけにもいかない。かといって、家に帰るにしても、既に警察が待ち構えているかもしれない。ホテルに泊まるお金もないし、バイトをするにしても、連絡先は書けない、住所も書けない、そもそも年齢が足りない、ないないづくしだ。最終手段として、売春をするという手段もあるけれども、考えただけで嫌だつた。

「怪しくないの？」

「へ？ 何が？」

なぜ、初対面の私を泊めよつするのだろうか？ 綾は胸中で呟いた。

「あなたの家に行つたら、お金を盗んでどつか行つちゃうかもしねいわよ」

「あ、それは無理。お前そんなことしないだろ」

あつさつと決め付けた。そこに躊躇の一文字はなかつた。

「とにかく、お前は家に泊まるー 僕はお前を泊めるー これで全てだ」

バカだ、バカがいる。どうしようもないくらい、お人よしのバカ

だ。

喜一の言葉に、小さくため息を吐いた。

しかし、今度のため息は悪い意味ではなく、なんだかくすぐったい、暖かい何かが、胸中をよぎった。

たとえ自分の身体が田当てだったとしても、初対面の喜一が、こんな自分を泊めてくれると言つてくれたのが嬉しかった。

緩む頬を必死に引き締め、一言返事を返す。

「先に言つておくけど、変な事しようとしたら、警察に電話するからね！」

その返事に、喜一は目を輝かせて喜んだ。

「おお、泊まつていくか！ 僕も、一人で食べる飯は寂しいと思つていたんだよ……後、俺はロリコンじやないから、警察に電話することはないぞ」

綾はさらに顔を赤らめた。桃色から、熟したリンゴへと。

「そ、そんなこといつて、後でお風呂とか覗かないでよー。」

「お風呂……ねえ」

喜一は、綾の身体を上から下まで、何度も視線を往復させた。綾は見せ付けるように胸を張った。それだけでなく、とりあえず頭の後ろに両手を組んでポーズ。

「…………」

喜一は悲しそうな目で綾を見ると、無言で綾の左手と横に置いてあつたビニールの袋を掴んで歩き出した。

「ちょ、手を繋ぐな……つて！ あんた！ 今の目は何！ 今私を哀れんだわね！ いいもんないもん！ 今は人よりちょっと小さいだけだもの！ すぐに手で收まりきらないくらい大きくなるもん！」  
「もういい…………もういいから、早く帰つて暖まろう、そうしよう、綾」

「だから～、そんな目で見るな！ すぐにブロジヤーが必要になるわよ！ そのときには泣いて後悔しても知らないからね！」

喜一は黙つて綾の頭を優しく叩いた。その目は穏やかだった。

反比例して、綾の頬は真っ赤なトマトへと熟した。

「頭を撫でるな！ 子供じゃないんだから～！ そんな目で見ないでよ～！ バカ！ バカバカバカバカ～～！」

無言にけなされて、涙目になりながらも、腑に落ちない疑問がある。

どうして喜一は自分を泊めようとしてくれているのか。どうして自分は大して警戒心を抱くことなく、彼に付いていっているのか。それが分からなかつた。

チラリと自分の手を引く喜一と名乗った男性の後姿を見つめる。おそらく、一人でご飯を吃るのが寂しいというのは本当だと綾は思った。もし悪意があるなら、もう少しマシな言い訳を使つていいだろ～う。

ならば、なぜ自分はトボトボと彼に大人しく従つてはいるのだろう。そんな綾の懷疑的な視線に気づいたのか気づいていないのか、喜一は後ろに振り返り、二力つと前歯が抜けた間抜けな笑顔を見せた。瞬間、綾の疑問は氷解した。始めから答えがそこにあつたかのように、自然と理解できた。

「寒かつたら上着貸すから、いつでも言つてくれよ。ていうか今すぐ貸そう、すぐ貸そう」

綾はその申し出に答えた。

「いらない」

「即答ですか！」

きっと、こいつの間抜けな笑顔を見たせいだ。綾はそう思った。

喜一が住んでいるアパート、初めて家に入ったときの感想は、掃除しないわね、であつた。

入つてすぐ右手の方に台所があり、左手の方には洗面所とトイレがあつた。真っ直ぐ奥に進むと、大きく一部屋、リビングがあつた。一人で住むには十分な広さであつた。

ただし、ちゃんと掃除をしていればの話。

「まあ、ちょっと散らかっているけれど、くつろいでくれ」

喜一は、にへら、と笑顔を見せてこう言った。

視線を洗面所に向ける。洗面所は飛び散った水滴で水浸しになつて、悲惨な状況だつた。

視線を台所に向ける。流しには大量の使つた食器、ゴミ等で埋め尽くされていた。

視線をリビングに向ける。放り出された衣服、袋詰めされたゴミ袋がちらほら、埃がたまつた廊下に電化製品。まともに掃除されているよつとは見えなかつた。

「…………掃除しないでしょ」

綾は半眼で喜一を睨んだ。

「細かいことは言いつこなし。とりあえず、今日はもう遅いから、一眠りしてからにしよう」

喜一は、ゴミ袋を部屋の隅にまとめて、押入れから布団を二組取り出して並べた。

片方の布団の上に座つて、ビニールの袋から、おにぎりとお茶を全て取り出した。

「この食べかけのおにぎり一個もらひば」

「あ、ちょっと待つて、それ腐つて……」

綾が止める暇もなかつた。食べかけの鮭のおにぎりを取り出すと、一息に口に放り込んだ。

「…………大丈夫なの？」

「んん、なふいが？」

口いっぱいにおにぎりを頬張つたまま、お茶のキャップを開け、

残つていたお茶を一気に飲み干した。

「ふはあ、おにぎり冷えているけど美味かつた……あれ、もしかして後で食べようとか鮭を残していたのか？ だったら、洗面所の方に冷蔵庫があるから、そこから適当に食べたり、飲んだりしてくれていいぞ」

「セーフィヤなくて……おにぎりの味、変じやなかつた？ 後お茶も」

喜一は小首をかしげた。

「別に変じやなかつたぜ、普通に美味かつたけど……お茶も、普通にお茶だつたし。もしかして賞味期限が過ぎてこるとか？」

「過ぎていないわ。ちゃんとロハビールで買つたやつよ」

綾は残つている毬布のおにぎりを手にとつて、賞味期限を確かめたが、賞味期限まで、まだ余裕があつた。

おにぎりのビールをはずす。軽く、おにぎりの先端を摘んで引きちぎつて、食べた。普段からよく食べていた、のりとお米の味だつた。

けれども、綾にはビーフしても不味く感じた。

「……不味い」

ふと、公園で食べたとき不味いと感じたが、味自体は変わつてなかつたことに気づいた。ただ、とんでもなく不味く感じただけで。

「そうなのか？ ジヤあ、俺がもらひつぜ」

またも綾が何か言つ前におにぎりを奪い取ると、豪快におにぎりを頬張つた。一口、一口、三口、食べ終わつた。

喜一はジャンパーを脱ぎ捨て、放り出された衣服から、ジャージを取り出して着込んだ。

「それじゃ、お休み。トイレとかは好きに使つていいから。後、これは好きに使つていいから」

どこからか取り出した一万円札を綾に手渡した。

綾はそこまではなくとも、と喜一に返そうとしたが、喜一は照明を消して布団に入つて横になつてしまつた。すぐに寝息が聞こえてきた。

綾は渡された一万円札を黙つて見つめていた。一万円札をジャージのポケットに入れてから、立ち上がりて冷蔵庫に向かう。

冷蔵室のドアを開けてみると、500mlのペットボトルのアクエリアスがあつた。

冷蔵庫からアクエリアスを取り出して、冷蔵庫を閉める。栓が閉

まつてあるアクエリ亞スは、まだ誰も開けていない新品である」と  
が分かつた。

アクエリ亞スの栓を開けて、匂いを嗅ぐ。変な臭いはしなかつた。  
少しだけ、湿らせる程度に、口に含む。

「んんん！」

急いで洗面所に向かい、口の中の液体を吐き出した。

口の中を水でやさしいで……水も不味く感じたので、吐き気が治まるのを待つて、音を立てないようにリビングに戻る。喜一は顔をこちらに向けて静かに眠っていた。

綾は、喜一を起こさないように布団に入った。

「お腹減った……のど渴いた……」

お腹が食べ物を催促している。水分も求めている。身体を丸めて我慢する。

ふと、田に入った喜一の寝顔を眺める。暗闇の中でも、はっきりと田に映つた。

ぐうぐう。

慌ててお腹を押さえた。ちらり、喜一に田をやると、あどけない寝顔と穏やかな寝息。安心して力を抜いた。

もう、誤魔化すのは止めよう。

自分の身体が普通じゃなくなっていることも、自分が殺人犯になってしまったことも、全て認めよう。

喜一の寝顔を見て、綾は少しずつ、自分のことを受け入れようと思つた。

手を伸ばしてほっぺをつづく。以外にすべすべ、なんとなべつつく、つつく。  
ぐうぐう。

お腹が鳴つた。今度は押さえようとは思わなかつた……けれど、ちよつとだけ、恥ずかしかつた。

## 第六話・児（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮ください。うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## 第六話・兄

綾が喜一の家に泊まって一日目。

窓から差し込む朝日を見て、ずっと喜一のほっぺをつんづんしていたことに気づいて、しばらく顔の赤みが元に戻らなかつた。

綾は泊めてもらつた早朝、といつても、3時間くらいしか泊まつていなかつが、喜一に一言お礼をしようと思つていた。

しかし、喜一と綾が寝たのはつい3時間前。時計を見ると朝の8時。たぶん起きるのは昼過ぎになるかもしれない。

仕方ないので、何をすることもなく布団の中でくつろぐ。時計を見る、五分経過していた。布団の中でくつろぐ、時計を見る、5分経過していた。

お腹が減つて眠れないのもあつたが、単純に眠氣を感じないので、時間の経過が遅く思えた。

書置きを残して行こうか、とも考えたが、なんとなくそれは止めることにした。

短い時間でも、親切に泊めてくれた喜一に恩返しをしよう、そつ思い至つた綾は布団から飛び起きた。途端に飛び散る埃。

「すごい埃……そうだ……」

ジャージのポケットから一万円札を取り出し、綾はじつじつと笑つた。

始めはすぐに終わるだろ?と考えていたけれども、予想以上にはかどらないものだ。

手始めに散乱しているゴミ袋を片付けることにした。

一つ一つ中身を確認し、ゴミ捨てを完了するのに要した時間は一時間。幸いにもゴミ捨て場はすぐに見つかったが、ゴミ袋が見つからなかつた。

仕方なくコンビニを探し、必要な道具を買いに行つて戻つてくるのに30分。

しかも、捨てるゴミ袋の量も半端ではない。

「ゴミ袋に詰め込める量には限界があり、また、それを持つ手は一つしかない。おまけに綾の手は小さいので、何度も往復することになった。

次に、流し台の食器を買つてきた洗剤とスポンジで、片つ端から洗いまくる。洗い終わつた食器は全て丁寧に布巾で水気を拭き取つた。汚れたフライパンも、力を込めて洗う。少しフライパンが変形してしまつたが、綾は気にしないことにした。最後に洗剤を洗い流したフライパンを火で熱して乾かす。

埃がたまつた調理器具は一つ一つ洗い、電化機器は埃をぬぐつていぐ。全て洗い終わる頃には、スポンジはすっかり泡がたたなくなつていた。なぜかフライ返しが変形していた。

最後に油や埃などで汚れたコンロ周りと流し台も、濡らした布巾で丁寧に拭いていく。こんどは変形することはなかつた。

次に洗面所に向かつた。新しくスポンジを取り出し、邪魔なものを片付けてから洗面台を洗う。おつかなびっくり、蛇口周りをスポンジでコシコシ、カビや水垢で汚れていた洗面台も綺麗になつた。

トイレもしっかりと洗う。買つてきたゴム手袋を付けて、裏までゴシゴシ、洗剤も満遍なく使つてゴシゴシ。新しいスポンジを取り出して、便座もゴシゴシ。

作業を終えてリビングに戻つて時間を確認すると、12時を過ぎていた。

随分と騒がしくしてしまつた。もしかしたら起こしてしまつたかもしれない。

不安に思つた綾は、喜一の寝顔を確認。そして安心すると同時に呆れた。喜一はいまだ夢の中だった。

多分こいつは大地震に襲われても一人眠りこけているに違ひない。綾は確信を持つて断言できた。

ぐう、と綾のお腹が食べ物を催促した。掃除に集中していたおかげで空腹感を忘ることはできたが、それが終わると途端にこれだ。何を作ろうか？ 台所へ向かつ。

「お腹減った……何か食べよう」

冷蔵庫を開けて中身を確認。昨日は特に中身を見てなかつたせいで気づかなかつたが、意外と色々あつた。

「ベーコンに……卵……卵食べられるのかな？ それとウインナーが一袋か……飲み物は、昨日私が飲んだアクエリアスと、お酒と、コーラ」

よし、気合を入れて、綾は冷蔵庫から卵を取り出した。お椀に割りいれると、みごとにヘドロと化した卵らしきものが出現した。綾は迅速に流しに捨て、大量に水を流すことでなかつたことになつた。

お椀も洗剤でよく洗つて布巾で水氣を拭き取る。リビングに戻つて喜一の様子を確認してみた。

「うわ……うわ……あ～～や～～」

のぞり、のそりと、喜一は自分の手を、綾の使つていた布団に潜り込ませていた。

布団の中を、喜一の手が這い回る。なんだかおかしくて可愛い、その言葉が浮かんだ綾は、慌てて首を振つて忘れることにした。

「あ～～……や？ あや……綾！」

喜一は突如布団を跳ね飛ばして飛び起きたと、綾が寝ていた布団を引つペがした。

「綾！ 綾！ どこに行つた！ もしかして透明人間になつたのか、だつたらお兄ちゃんに一言伝えておいてくれ！」

布団をぱたぱたと叩きながら、掛け布団に向かつて叫んだ。

綾は落ち着いて、今しがた使つていた布巾を喜一に丸めて投げた。

「うお！ なんだ、これ……おおお、綾！ お兄ちゃん心配したじやないか！」

「心配も何も、透明人間なんかになれるわけないでしょー！ 後、

人の使つていった布団に手を突つ込ませるな！ 気色悪いでしょうが

！」

ちつちつち、喜一は舌を鳴らして指を振つた。

「綾、俺のことはお兄ちゃんと呼びなさい。喜一と呼ばれるのも捨てがたいが、やっぱりお兄ちゃんには負ける」

「なんで私があんたのことをそう呼ばないといけないのよ」

綾は喜一を睨んだ。喜一は胸を張つて自信満々に答えた。

「そんなの、お前が綾だからに決まつていいんじゃないか

「理由になつてないわよ」

「ええい、理由も理屈もない！ 俺のことはお兄ちゃんと呼べ！」

朝からテンションの高い奴だ。綾は率直に思つた。

「喜一って呼ばせてもらひつわ……とにかく、このお金ありがどいつ。

おかげで助かったわ

喜一は床に両手をついて落ち込んだ。

「なんて寂しいことを……あ、そのお金は綾にプレゼントしたもの

であ……おこ、なんか綺麗になつてないかい、マイキッチン

すぐさま、床からバネのように立ち上がりつてキッチンを指差した。

「ああ、それはお礼にと思つて掃除しておいたのよ。それじゃあ起きたことだし、私はこれで……」

深々と一礼し、綾は玄関に向かつた。

それを見た喜一は綾よりも早く、玄関に立ちふさがつた。

「待てーい、なぜに出て行く。まだ一日も経つていなーじやないか

「なぜつて、もともと一泊のつもりだし……」

「行くところないんだが、だつたらもう一泊していkeyo

「申し出は嬉しいけれど……やっぱり帰るわ。あんまり長居する」と迷惑かけそудだし、私お金持つてないし

その言葉に田を輝かせる喜一、嫌な予感を感じた綾は一步距離を取りうとした。

それよりも早く喜一は綾に近き、綾の身体を一気に抱え上げた。

「きやー！ な、なにするのよ、降ろしなよー！」

「ふははははは、降ろしてほしければ、もう一泊していくと言え！  
でなければ、このままメリーゴーランドだ！」

綾の身体を抱えたまま、喜一はぐるぐるとその場で回り始めた。

「バカなこと言つてないで、降ろせ～～～！」

じたばた、じたばた、綾は四肢をばたつかせて抵抗したが、効果はなかつた。

「もう遅い、綾に残されている言葉は、お兄ちゃんと泊めてくださいの一つだけだ！ 綾は軽いからどんどん回るぜ！」

「あんた、どれだけ私にお兄ちゃんつて言つてほしいのよ…」

「なんとでも言え！ 鶯つても俺が気持ちよくなるだけだ！」

「バカ！ アホ！ 変態！ 喜一のバカタレ！」

「もつとだ……もつと俺を罵るがいい…………それが俺の力となり血肉となるのだ」

「ちよ、はや、早くなつてる！ 早くなつてる～～！」

結局、綾が泊めてほしいと答えるまで、喜一のメリーゴーランドは続けられた。その日、喜一は一日中「機嫌に過ご」と、綾はそんな喜一の様子を見て、まあ今日一日くらことは……と、自分を納得させることにした。

翌日、喜一が再びメリーゴーランドを駆使して綾を引きとめ、綾はなんだかんだ文句を言つて、最後に苦笑して承諾する。それから毎日行われることになるとは夢にも思わなかつた。

しかし、その顔は繰り返される内に、いつしか喜一と同じくらい……それ以上に笑顔を見せて承諾するようになつていつた。

喜一の家に泊まるよになつて14日目。

いつも喜一は日が暮れるとどこかに出かけて行き、明け方に帰ってきた。出かける際には必ず、知らない人には出るな、変な人が来たら、すぐに警察に電話しようと、何度も綾に念を押した。

きっと、ホストか何かだね。綾は黒いスーツを着て、笑顔で接

寄する喜一を想像した。

人気なさそうだけど。すぐに考えるのを止めた。

綾は喜一の仕事のことは、深くは聞かなかつた。喜一が聞いてほしくなさそうな顔をしていたからだ。

泊めてもらつたお礼にと、綾は家事をするようになつた。

喜一はしなくていい言つたが、綾はそれを聞き入れなかつた。掃除自体は好きではなかつたけれども、喜一の部屋を掃除するのは楽しかつたから。

それを繰り返しているうちに、いつのまにか綾が家事をするようになり、この日もいつも通り、綾が部屋の掃除をしていた。

台所の椅子に座つて掃除を眺めていた喜一は、てきぱきと掃除をする綾を見て、感心したため息をこぼした。

「綾は真面目だね～、俺だったら一週間に一回くらいしかしないぞ」

「喜一だつたら、一週間どころか一ヶ月はしないんじやない？」

綾は掃除機をかけている床に視線を向けたまま返事を返した。

「ははは、違いない……………ところでいつになつたら俺のことをお兄ちゃんと呼んでくれるんだ？ 俺は待ち遠しくて仕方ないが」

「一生呼ばないから、その願いは」コミに出しなさい

掃除機をかけたまま喜一を見む。喜一は口笛を吹きながらそっぽを向いた。

「ん……………あら、服を吸い込んでたわ」

綾は掃除機の電源を切つて、喜一の衣服を取り外した。

喜一のポケットから小袋が落ちた。綾は小袋を拾い上げた。

「風邪薬かしら……」

「それに触るな！」

突然、喜一が大声を出した。綾は驚いて小袋を落としてしまつたが、喜一がすぐさま小袋を拾つて自分のポケットにねじ込んだ。

その様子に、綾は驚いた眼差しを喜一に向けた。喜一は居心地が悪そうに綾から視線をそらした。

喜一の普段とは違う行動に、綾はその小袋の中身が何なのかを理解した。

「喜一…………それって…………」

喜一は黙つたまま、綾の質問に答えなかつた。

ふう、綾はため息を吐き、掃除機のプラグを抜いて掃除機を片付けた。

「いきなり大声出さないでよ、びっくりするじやない。その風邪薬が大事だったら、ポケットとかに入れずに、肌身離さず持つておきなさいよ」

喜一の横を通り抜けて、綾はキッテンに向かつた。喜一は綾の後姿を見つめた。

「もうお昼だし、チャーハンでも作るけど、喜一はそれでいい？」「俺は綾の作るものなら何でも食べるけど……聞かないのか、これのこと」

喜一はポケットから小袋を取り出して、ぽつりと聞いた。重く、静かな空気が室内を漂う。

綾は冷蔵庫から材料を出しながらも、喜一の方を向いたのはしなかつた。

「聞いてほしいの？」

「…………どつむかかっていつと、聞かないでほしにけど、綾は嫌じやない？ 俺が…………その…………薬売つてているの」

「ただの風邪薬でしょ、変わつた職業だと思つけど、気にする程のものじやないわ。それに、喜一だつて私のことを聞かないじやない」重苦しい雰囲気の中、綾は規則正しく材料を細かく切つていく。

「それは…………まあ、人には色々聞いてほしくない話があると思つて…………」

喜一の脳裏に、一週間前の出来事がよみがえつてきた。

いつも通り、綾を引き止めることに成功した喜一は、なんとなく、

置物となつてゐるテレビを見ようと思つた。喜一は特にテレビを見る方ではなかつたし、綾は年頃にしてはまつたくテレビを見ようとしなかつたからだ。

きつと遠慮してゐるのかもしない。  
綾は変なところで遠慮するからなー、と緩んだ頭でテレビの電源を入れた。

その横で綾が顔を赤くしてそっぽを向いていたのも、喜一を「」機嫌にさせた。

だから氣づかなかつた。朝のニュース番組に映し出された事件の報道に、そっぽを向いていた綾の顔色が悪くなつていたのを。

「私、他の見たいわ、ニュースはつまらないもの」

震える声で、綾が喜一の横をすり抜けて電源を切ろうとしたのを見て、ようやく喜一は綾の様子がおかしいことに気づいた。

しかし、綾が電源ボタンに手を伸ばすよりも早く、画面には綾の顔写真が映された。

綾も、喜一も、凍りついたようにテレビの画面を見つめた。綾の顔写真の他に、数名の少年少女の写真が映し出され、ニュースキャスターが報道を続けていた。

『……の事件にて、行方不明になつてゐる、女子中学生、高田綾さん当時15歳。高田綾さんは警察の捜査もむなしく、まだ発見されていないようです。また、犯人からの電話等の身代金の要求もないことから警察は、高田綾さんは既に殺害されている可能性が高いとして、捜査を続ける方針です。また、かや』

最後まで言わせることなく、喜一はテレビの電源を切つた。  
綾は血の氣が引いた青白い顔で、喜一を見つめていた。身体は震えていた。

綾が何かを話すよりも早く、喜一は綾を抱きしめた。

抵抗はなかつた。そのことに喜一は不安を覚えた。

喜一はさらに強く綾を抱きしめた。綾の腕がゆっくりと喜一の袖をつまんだ。

「俺は聞かないぞ」

綾の身体が大きく震えた。

「迷惑をかけるとか、そんなの俺は平気だぞ。お前が何をしたのか、何から逃げているのか知らんが、そんなことで出て行こうとかするなよ。本当にこの家から出て行きたくなつたら出て行つてもいい。けど、それ以外のことで出て行くとか許さないからな」

綾が身じろぎして離れようとするが、喜一は綾を抱きしめた手を組み合わせて離れないようにした。

「一人で食べるご飯は美味しいんだぞ……兎は寂しいと死んじゃうんだぞ」

「…………」

返事はなかつた。そのかわり、袖を摘んでいた綾の手が喜一の背中にゆっくりと回された。そして、喜一の胸に押し付けられる体温。かすかに嗚咽が聞こえてくる中で、小さな、本当に小さな声で、バカ喜一、そう呼んでくれたような気がした。

「いやいや、気にしていてもしかたない」

頭を振つてそのときの出来事を頭から追い出した。幸いにも、綾は材料を炒めるのに忙しく、喜一の方を見てなかつたので、変な目で見られることはなかつた。

「あのときはびっくりしたが、それからはよかつたな。妙におとなしくなつた綾は可愛かつたし、ペタペタ甘えてきたのはグッときた」

「喜一、お皿取つて」

「気づくと俺の背中にくつついてくる姿はまさに現代の癒し……この殺伐とした時代に現れた天使！」

「喜一、お皿へ、焦げる前に早く～」

「だが、それも三日も経つと甘えなくなつてしまつたのは辛い。ちくしょう、あのときお兄ちゃんと呼んでもらえたチャンスだったの

「六

ようやく、喜一の様子に気づいた綾は、無言で皿を取り出し、二人分盛り付けした。田代と喜一は正気に戻ると、綾に向かいに座つて、食べ始める。

綾も手早く後片付けを終え、椅子に座つてチャーハンを見つめる。食べたい気持ちはまるでないが、意を決し、チャーハンを一口パクリ。

綾はトイレへ走った。

喜一は心配そうに綾の後姿を見送つた。手元のチャーハンをもう一口、ほんのりと香る香ばしい匂い。薄味だが、とても美味しかつた。

喜一の家に泊まるようになつてから20日目。

喜一の住んでいるアパートの近くにある銭湯の帰り道、喜一と綾は並んで帰路についていた。

季節も秋から冬に変わり、もう完全に過ぎしやすいう季節ではなくなつていた。

喜一はジャンパーの下に2枚服を重ね着して、綾はジャージとう、ラフな格好のままだつた。

傍目にはとても寒そうなのだが、綾が平氣な顔をしてるので、喜一は特に口出しなかつた。

「そういう……話してなかつたな」

お互に話すこともなく、穏やかな静寂の中、喜一が綾に話を切り出した。

「俺さ、薬を売るの、止めよつと思つてゐるんだ

綾は何も言わず、喜一を見つめた。

「この前、薬を売つていたら、怖そうなオッサンが来て、こんなもの売るんじゃない！ って、怒鳴られたんだ。けど、そうしなきや生きていけないんだよって言い返したら、そのおっさんが仕事を紹

介してやるつて」

綾も、喜一も、立ち止まっていた。

「俺……半信半疑だつた。けど、昨日本当に仕事を持つてきてくれたんだ。とりあえず昨日は顔合わせして、明日から働くことになつているんだ」

「そそそと、いつもの喜一とは見えないくらい弱気になつていた。高校行つてないし、親もいないし、特技があるわけでもないけどさ……そこの人達、皆優しくて……」

「やればいいじゃない」

喜一は顔を上げた。綾はにっこりと笑つた。

「私は反対しないわ、あなたがそうしようと決めたのなら、そうすればいいと思う。私のことは気にしなくていい、邪魔になつたら出て行くし、今の仕事を続けたいなら断ればいいじゃない」

「邪魔なんかじゃない！」

喜一は声を張り上げて否定した。先ほどまでの弱気な様子とは違ひ、今度の言葉は力強かった。

綾は照れくさくなつて、そっぽを向いた。赤くなつた綾を見て、喜一は一瞬、笑顔を見せたが、すぐに心配そうな顔に変わつた。

「それはそうと、今日も食べてなかつたな」

赤くなつた頬もそのままに、綾は申し訳なさそうにつづみいた。

「本当に大丈夫か？ 俺、綾が家に来てから一回もご飯食べているのを見たことがないぞ。どんどん痩せてといつてているし、いつか倒れるぞ」

「大丈夫よ……お腹は空いているけど、意外と平氣よ」

嘘だつた。本当は体中の脱力感が強く、最近は一度座ると立ち上がるのが辛いと感じるくらいになつてしまつた。

「……まあ、いいさ。綾が食べられるモノは分かつてゐるし、いざとなつたら……」

「何？ なにか言つた？ それに、その指痛くないの？」

綾は喜一の手を指差した。指差された喜一の左手の指先、小指と

薬指が根元からなくなっていて、包帯が巻かれていた。

「別に痛くないよ。ちょっと仕事辞めるのに必要って言つたの……気になる?」

「でも、四日前には小指でしょ、そんで一日前には薬指、顔色も悪くなつてゐるわよ」

綾は喜一に左手を取つて、包帯の上から擦つた。

綾自身は気づかなかつたが、このときの綾の瞳は壮絶な色を帶びていた。まるで、大好物を目の前にした獰猛な獣のような……。

そんな綾の変わりようを、喜一は黙つて見つめた。

「よし、実は一昨日けつこう売れたんだ。いつもより給料大目に貰つたから、夕食はレバーラにしようぜ!」

途端、綾の瞳に理性が戻る。

「またレバーラ? 喜一つて本当にレバーラが好きなんだね」

「血が、血が足りないんだ。顔色悪いと言われては、レバーラ食べて血を増やすしかない」

「はい、はい……いっぱい作つてあげるわよ」

再び、二人は歩き出した。自分たちが帰る家へと。包帯の巻かれ

た喜一の左手と、綾の右手が重なるのはもう少し経つてからだつた。

。

喜一の家に泊まるようになつて28日

朝から続いた雨は、夜になつても振り続けた。

綾と喜一、二人で一本の傘を使って、身を寄せ合つて濡れないようにしていた。

綾はいつも通り、上下のジャージ。喜一は出合つたときに着いたジャンパーを身に付けていた。

「迎えに来てくれるとは思わなかつたよ。スーパーに行くときでも帽子被つて顔を隠していたのに」

「暗かつたし、傘で見えないようにしたから。喜一も頑張つているじゃない」

喜一は包帯に包まれた左手で器用に傘を持つて、綾を濡らさないようになりげなく傘を傾けた。

「まあね、やっぱり可愛い女の子が家にいると、仕事に対する気合が比べ物にならないくらい違うな」

「褒めたって何もでないわよ」

「事実だから大丈夫だ……ところで今日のレバーラ多めにしてくれよ」

綾は赤くなつた顔をスーパーの袋を抱え上げて隠した。

「喜一って本当にレバーラ好きだね……そういうえば、顔色も悪いままだし、どこか病気なんじやないの？」

綾はじつと喜一の右手を見つめた。視線の先、喜一の右手は包帯に包まれていた。

「病気ではない、ただ俺の熱い想いがカロリーを燃焼させてしまつているだけだ。後、そんなに見つめるな、ちょっと恥ずかしいぞ」

喜一は綾から見えないように右手を隠した。綾は喜一を見上げて、問い詰めた。

「でも、今度は右手も……本当に大丈夫？」

「大丈夫、前の仕事は縁を切つたから、もう心配することないよ……これは俺の不注意が原因」

だから泣くな。そう言つて喜一は右手で綾の流れた涙を拭つた。包帯にしみこむ綾の涙はとても熱く、右手に添えられた綾の左手はとても優しかつた。

その涙を見て、喜一の脳裏に名案が浮かんだ。

「そうだ綾、服を買いに行こう」

喜一は綾の身体を見下ろした。出会ったときから着ているジャー

ジは、洗剤で洗われているにもかかわらず、少し汚れて見えた。

「今まで平氣そうにしていたから気づかなかつたけど、よく考えたらジャージ一枚しか着るものがないのは女の子としては致命的だ。俺のお下がりばかり着ていては……いや、それもいいか？」

「え……でも、いいよ。喜一の服があるから」

喜一の右手を頬に当てたまま、拒否した。一言話すたびに伝わる振動がくすぐつた。

「駄目だ、これはもう決定だ。明日は綾の服を買いにいこう。たまにはオシャレもしないといけないぞ。それに、一週間分の給料もったからな」

喜一はジーンズの後ろのポケットを叩いた。綾も反対するには無駄だと……内心とても嬉しく思い、喜一の笑顔を見上げた。

降り注ぐ雨の中、喜一と綾は一人見詰め合っていた。時々通る車も、他の通行人も、このときばかりは現れなかつた。

…………一人を除いて。

ぞくりと、綾は嫌な臭いを感じた。とても、とても嫌な臭いだった。

「見つけた、まさか足を洗つているとは思わなかつたぜ」「いつの間にか、綾と喜一から少し離れた所に、一人の男が立つていた。

黒いロングコートに身を包み、サングラスで顔を隠した茶髪の男は小さく笑みをみせてコートの中に手を入れた。

男が懐から黒光りする銃を取り出すのと、喜一と綾が突然現れた男に視線を向けるのと、同じタイミングだった。

「悪いな……恨むなら、その男を恨みな」

その言葉と共に、銃口から放たれる弾丸。綾は反射的に喜一の前に躍り出て、かばうように両手を広げた。

弾丸は綾の着ているジャージを貫き、下着を貫き、皮膚を貫き、内蔵を貫いた。

綾の背中に抜けた弾丸が喜一のお腹に当たつて地面に落ちた。喜一のジャンパーは綾の血で赤く染まつた。

喜一は、呆然とした表情で、血で染まつたジャンパーと、綾を交互に見つめた。

げふ、と水の詰まつたような音が綾の喉から漏れた。

次の瞬間、綾の口から大量の血液が噴出した。

痛い、痛い、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

頭の中が痛みで埋め尽くされる。それでも、綾は両手を下げることはしなかった。

「あ…………あ、あ、あ、あ…………あや…………」

喜一の手から傘が滑り落ちる。綾と喜一の身体を雨が濡らしていく。

銃声はまだ終わらなかつた。一一、一二、三四、五、六。銃声は6回繰り返された。銃声が一回響き渡ると、それに合わせて綾の身体が人形のようにカク、カク、と動いた。喜一は自分の胸に凄まじい激痛を覚えた。震える手で胸を押さえると、そこから赤い液体がジャンパーの内側から漏れ出した。

男が銃を懐にしまう。綾の身体がぐらりと揺れる。喜一は無意識に手を伸ばし、頭をぶつけないよう綾のジャージを自分へ引っ張つた。

掴んだジャージの部分は血で湿っていた。

「おつと、これは持つていかないとな」

いつの間にか近づいていた男が、喜一の後ろポケットから給料の入った封筒を抜き取つていた。

お前は誰だ、なぜこんなことを、なぜ俺達を、男に浴びせたい罵声が喜一の頭をぐるぐると回つたが、こみ上げてくる血液が邪魔して口に出せなかつた。

喜一が先に倒れ、その上に重なるように綾が倒れた。二人の身体に降り注ぐ雨水と一緒に血が一面に広がつていつた。

「亮一、そつちは終わりましたか？ こつちは終わりましたよ」

「金になりそうな物はありませんでした、浪費家だったのかかもしれません」

自分に向けられた言葉に、男、亮一は背後に振り返つた。そこには同じ服、同じ靴、同じ髪型、同じ顔をした二人の少女が傘も使わずに立つていた。

「明日香、明日菜、頼むから能力を使つたまま来ないでくれ。冗談

抜きで怖いから

二人の少女、明日香と明日菜は互いを抱きしめて微笑んだ。

「あなたに言われたくないわ、ねえ、明日菜。それより早く帰りま  
しょう」

「ええ、明日香。このままでは身体を悪くしてしまうわ、」

明日香と明日菜は雨に濡れるのを気にしていいのか、ゆっくり  
とした足取りで亮一の服を摘んだ。

亮一は抜き取った封筒をホールの中につまつた。

「誠のやつ、来ているか？」

「来ているわ、亮一。既にこの辺り一帯に結界を張つたって連絡が  
きました」

「これから外に出ることはできても、中に入ることはできないと  
のことです」

「万が一助けが来ることもない……か。それじゃあ、帰りますか」  
亮一の言葉と同時に、三人の身体が淡く光り、一瞬強く光を放つ  
て、消えた。

光が消えたときには、そこには三人の姿はなかつた。後には、喜一  
と綾だけが残された。

どれくらいそうしていたのか分からない。綾と喜一は地面に横た  
わつたままじっとしていた。おびただしい量の血液が地面を伝つて  
いく。

「…………あ…………き…………き…………ち」

喜一の上で、綾はうめいた。『ぽ、嫌な音を立てて綾は血反吐を  
吐いた。激痛に悲鳴を上げる身体を無理やり起こして、綾は喜一の  
頬を叩いた。

「おき…………お…………お…………き…………き…………」

綾の口からこぼれ落ちた血液が、喜一の頬を伝つて流れしていく。

その上から、綾の両目からこぼれ落ちた涙が、血液の跡を洗い流し

た。

「……よ……よお……綾……元気そづじや……ないか……」

喜一の瞼はゆっくりと開かれ、綾の視線と合わせた。さらに綾の涙が溢れた。

むせ返る血の臭いも気にせず、喜一の首もとに頬を擦りつける。

「き…………き…………いち…………き…………ち…………」

「喋るな、話を、聞け、最初で最後の、話だ」

次第にはつきりしていく意識とは裏腹に荒くなっていく喜一の呼吸。綾は僅かに首を振つて嫌がつた。

話が終われば、喜一が死んでしまう。ならば、話を聞かなければ喜一は死なない。そんなありもしない可能性に縋りたかったからだ。

「いいから、話を、聞け、お前のことだ」

今度は首を振る」とはなかつたが、鼻や頬を擦り付けるのは止めなかつた。

「お前、ずっと飯も食わず、水も飲まずに、いたけど、お前は生きている、何でだと思う、普通なら、とっくに、倒れている、はずだぜ」

綾は何も答えなかつた。喜一はかまわず話を続けた。

「それはな、俺が、お前に、ご飯を食べ、さしてたからだ、簡単な、話だろ、最初は、左手小指、次は、薬指、次は、右手の指」

綾は黙つたまま、喜一の身体を抱きしめた。

「最初のときは、夜中寝ているとき、お前が、起きて、お腹がすいた、お腹がすいた、そういうて、外に出て、行つたのを、追いかけて、んだ、そしたら、公園で、野良猫を、捕まえて、猫を、生きたまま食べていた」

綾は顔を上げて、喜一の頬と自分の頬を擦り合わせる。

「でも、すぐに吐き出した。これじゃない、ってさ、泣くんだ、辛そうに、泣くんだ、だからさ、俺、自分の、小指、切つて、綾に、食べろつて、言つたんだ、そしたらさ」

綾の目から涙が次々に流れ出し、喜一の頬を濡らしていく。

「美味しいって、嬉しいのに、幸せそうに、食べたんだ、そしたら  
で、これで、我慢できる、そういうって、寝ちゃったんだ、俺、コン  
ドで、傷口焼いて、包帯まいて、寝たんだ、痛くて、寝られなか  
つたけど、お前、覚えてなくて、ちょっと、安心、したんだ」

嗚咽を漏らして、喜一の頬に口づけする。喜一はくすぐったそう  
に片目を閉じた。

「薬指、切ったときも、同じように、食べさした、すぐに焼かずに、  
血も飲ました、綾、美味しそうに、飲んでいた、俺、痛かったけど、  
すげー、嬉し、かつた」

「も……しゃえ……ちや……めえ」

途切れ途切れの声を、喜一は無視した。

「綾、俺を、食べろ」

身体を震わせ、何度も口づけをして、涙を流し続ける綾の頭を撫  
でる。

ぐう、大きな腹の音が響いた。綾はあわてて自分のお腹を抓つ  
た。

「きつと、綾は、助かる……食べろ……分かつて……いるだろ  
嫌、嫌、嫌は首もとに顔を埋めたまま答える。

「つづらと……覚え……て……いる……だろ……頼む……食べて、  
くれ」

頭から手を下ろし、背中に手を這わす。背中のジャージの穴に指  
を差し込んでみると、血で滑る暖かい肌が指先に触れた。  
傷口は塞がっていた。

綾は胸の傷口に触れないよう、馬乗りになつた。

途切れ途切れになつていく喜一の呼吸。

「俺……幸せ……だ……た……ほんと……う……幸せ……だつた  
綾に……あえて……しあ……」

ゆっくりと、身体を倒して喜一の身体に体重を預ける。

止まらない涙、薄く開かれた綾の唇の隙間には、鋭く尖った歯が  
見えた。

死を迎えるとしている喜一の耳に、唇を寄せて。

「私も幸せだったよ…………お兄ちゃん」

僅かに、本当に僅かに、いつも笑っていた笑顔とは違う、夜の公園で出会ったときに見せてくれた、ちょっと間抜けに見える笑顔を見せて、喜一は静かに息を引き取つた。

それらを全て見届けた綾は、まだ温もりが残っている頬に口付けして、むき出しの首に歯を突き立てる。

## 第七話・決意（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださいと  
うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## 第七話・決意

綾が家に帰ったとき、部屋は悲惨な状態だった。引き出しへ全て無造作に開けられ、食器棚の皿もいくつか割られて中を荒らされた。

キッチン、洗面所、トイレ、押入れ、無事な場所はひとつもなかつた。渡されていたお金を保管していたテレビ後ろの隙間を見ると、そこには何もなかつた。

果然と部屋の惨状を確認していると、無造作に捨てられていたノートを見つけた。あんな物あつたつ? そう思つて拾い上げた。ノートの表紙には、汚い字で、喜一の日記と書かれているのを目にした途端、綾はその場でページを開いた。

そこには綾と出会つた日から、昨日までの日々が書かれていた。そして、中には綾にそつくりで、綾よりも年若い少女の写真が挟んであつた。

『月×日 天気は晴れ。

今日はいい日だ。なんてつたつて綾が帰つてきたんだ。ずっと会いたかつた綾が帰つてきたんだ。こんな嬉しいことはないぜ。しかも、俺が寝ていて、部屋の掃除をしてくれたんだ。よくできただ妹だ。

あのときは守つてやれなかつたけど、今の俺は違つ。あいつを守る為ならなんでもする。今日から頑張ろ!』

ページをめくる。

『×月×日 天気はくもり。

時間を戻せるとしたら、俺は過去に戻つて絶対テレビをぶつ壊すだろう。

なんてこつた、綾があんなに怯えている。

でも大丈夫だ、綾! 今度は俺が守つてやる、もづ、親父に怯えていた頃の俺じゃない。お前を笑顔にするなら何でもしてやる……

後、喜一じゃなくて、お兄ちゃんつてあの頃のように呼んでくれないかな？そりや、俺のことを恨んでいとと思うけど、やっぱりお兄ちゃんつて呼ばれたいな』

### ページをめくる

『×月 日 天気は晴れ。

綾に俺に仕事がばれちまつた、今思い出しても胸が痛い。

でも、そんな俺を綾は許してくれた……やっぱり綾は可愛い！けど、いつまでもこの仕事を続けるわけにはいかないし、別の仕事探さないと。

でなきや、綾に心配かけちまつ。綾には、死んでいつた綾のようになつてほしくないんだ、だから綾、無理はするなよ

### ページをめくる

『月 ×日 天気は晴れ。

最近、俺は凄く幸せだ。無事に薬の仕事を辞めることができたし、仕事もすぐに見付かつた。

なにより、綾が応援してくれたのが嬉しかった。

妹の分も、幸せにしてやりたい。だから応援してくれ、俺がんばつちやうから』

ノートの上に涙が零れ落ち、文字が滲んだ。かまわざページをめくる。

『×月 日 天気は少し雨。

明日は給料日だ。前の仕事のお金がまだ残っているから、当分は大丈夫だし、給料をもらつたら、綾の服を買いに行こう。俺のお下がりどジャージしか着るものが女のは女の子として可愛そうだ。

明日になつたら、綾の服の好みを聞いて買いに行こう……そうだ、綾と一緒に買えばいいんだ。雨は明後日まで雨が降るらしくから、綾と相合傘だ』

ページをめくる。そこから先は白紙だった。

綾は涙を拭つて、写真を戻して、ノートを閉じた。コンロに向かい、ノブを捻る。淡い青色の炎に、ノートの端を近づける。

すぐにノートにも炎が燃え移り、舐めるように炎がノートを侵食し、中に入った写真も、綾の手をも燃やしていくが、気にせず炎に手を突っ込ませる。

ノートは一片の破片も残さずに灰に消えるのを確認して、綾はコンロの元栓を締めた。燃やされた手には、火傷の痕ひとつなかつた。「喜一……私、本当の化け物になっちゃつたね。というか、もつと前から化け物だつたんだろうね」

泥だらけになつたジャージの上から自分のお腹を撫でる、久しぶりに感じる満腹感。ぼろぼろと、湿つた土が床に落ちた。部屋の端に落ちていた時計に目をやると、夜中の1時を過ぎていた。

落ちている物に気をつけて洗面所に行き、鏡の前に立つと、そこには血で汚れた穴だらけのジャージを着ている綾が映つていた。「……目の色変わつていてる……おまけに目つき鋭くなつていてるよ」

少し高い鼻、桃色の唇、そこは変わつていなかつたが、それ以外、瞳の色が赤色に変わり、目つきが鋭くなつていた。

ジャージ上下を脱ぎ捨て、改めて鏡に肢体を晒す。

「身体洗わないといけないかな、通報されるかもしれないわ」

鏡に映つたささやかな乳房、青白く見える一步手前の魅惑的な白い肌、そして身体を包むように広がつた血痕。胸をつついてみると、わずかな弾力の向こうには、筋肉の堅さしかなかつた。

「結局、これは大きくならなかつたな……あのときは胸なんてすぐに大きくなるつて言つたけど、そんなに早く大きくなるわけないのにね」

軽く胸を揉んでみる、手のひらにぴったりなのが、ちょっと悲しかつた。

リビングに戻つて、ジャージをゴミ袋に入れる。ふと、窓の向こうに目をやると、いくつもの雨水が窓にぶつかつて流れていつた。

ん、少しの間考えて、綾はショーツも脱いで袋に入れる。それを背中に担ぎ、玄関に向かつた。

「これを持てた後は服を探さないと……今までの私は捨てよう。これを出たら、もう私は……」

最後に、綾は振り返つて部屋を見渡す。

喜一のご飯を作ったキッチン、並んで歯を磨いた洗面所、一人で笑いあつて過ごしたリビング。

そのどれもが心を明るく照らし、孤独を癒し、素晴らしい思い出となつて綾の脳裏を流れていく。

「バイバイ、喜一。あんたは最高のお兄ちゃんだつたよ。服は全て置いていくわ、どうせ血で全て汚れると思つし、あなたの服は汚しあたくないからね」

玄関を少し開け、誰もいないのを確認してから、急いで出る。廊下の手すりの上に裸足のまま飛び乗り、そのまま屋根の上にジャンプ。

一気に数メートル近く飛び上がり、簡単にアパートの天井に飛び乗れた。

そのまま屋根伝いに飛び、数十メートルの距離がある屋根に飛び移り、十数メートルの高さのビルを飛び越える。体中から力が湧き上がつてくるのを実感でき、今なら何でもできそうな気がした。

「ミミ捨て場に、担いでいた袋を投げ入れ、誰にも見られないように屋根の上を飛び乗つていく。

「亮一、明日香、明日菜、誠……臭いだ、あの臭いを探せば

降りそぞぐ雨をものとせず、夜の街を駆け抜けていく。

「あいつらは……必ず私の手で！」

爛々と輝く赤い瞳が夜の闇に光る。四肢に力を込め、一気に飛び上がつた。白い影が雨を突き抜けて進み、綾を空へと運んだ。

「脱出した」

「…………は？」

大きい円卓が鎮座されている白い部屋、二人の男の会話が静寂を破つた。

「脱出したと言つてはいるのだ、亮一……殺し損ねたな」

「誠…………せめて主語を入れる、さつぱり分からん」

誠の言葉に、亮一はうんざりしたように頭に手を当てた。

亮一と呼ばれた男は、ぼさぼさの茶髪にきりりとした目、高い鼻、皮肉げにゆるんだ口元、一見すると優男に見えてしまいそうな顔立ちだったが、瞳の奥にある何かが、彼をそう見せなかつた。

誠と呼ばれた学生服を着た男は、きつちりと整えられた黒髪に、一直線に閉じられた唇、眉間にシワを寄せた姿は、亮一とは反対に厳格な仕事人に見せた

「お前が3時間前に殺した男と少女のことだ。どうやら、少女の方は生きているみたいだな、ピンピンした様子だつたぞ」

一瞬、何を言われたのか分からず、ぽかん、と誠を見ていた亮一は、すぐに我に返つて問い合わせた。

「新手の冗談か？ 僕は確かに鉛の弾丸を一人に打ち込んだんだぜ、特に女の子の方は五発も撃つた。男だつて胸の辺りに一発当たつた、どちらかというと、逃げることが出来るのは男の方なんじやないのか？」

「冗談なんかじゃない、…………確かに少女は大怪我を負つていた。そこは俺の能力で分かつてはいる。だが、たつた今少女が何かを担いでどこかに向かつたのは確かだ」

誠は大きくため息を吐いて、頭を振つた。

「少女が脱出する前に、男の側で何かを行つていたみたいだが、何をしていたのか、それは分からん。おそらく、男の方は絶命したと思つていいだろ？」

「恐らく、つて、お前の能力じゃ、中の様子とかは正確には分からぬのか？　どこに向かつたとか、何をしていったとか」

じろりと、横にいる亮一を睨む。

「前にも言つたが、僕の能力はそこまで便利じゃない。年老いているか若いか、男か女か、大きいか小さいか、どんな顔か……分かるのはそれくらいだ。少女だと分かつたのも、小さい方が動いたからだ」

睨まれた亮一は、誠の視線から逃れるように首をすくめた。すぐに、真剣な表情になつた。誠も、それに合わせる。

「ということは、何らかの能力者である可能性があるということか」「可能性というより、確実に能力者だ。自己修復に特化した能力か、それに近い何かというのがアリス様の意見だ。既に、『正義』が処理に向かつている」

『正義』の単語に、亮一は目を見開いた。

「よりもよつて、あいつに任せたのか！　あの男を向かわせて、あの女の子がどうなるか分かつているのか！」

「殺されるだろうな。『正義』なら、そうするだろう。それに普通には殺してやらないと思う。ジワジワと痛めつけてから殺すだろうな」

「どうしてだ！　能力者なら仲間にすればいいじゃないか！」

亮一は誠の胸倉を掴んで引き寄せたが、誠は無表情に話を続ける。「あのときは君が能力者だとは知らず、とんだご迷惑を、とでも言つて仲間に出来ると思うか？　普通なら敵対してくるのが当然だ。それに、あの少女には自己修復能力がある、ではどうやって殺す？　お前も、私も、直接ダメージを与える能力ではないのは分かつているはずだ」

「だったら明美に行かせれば……」

「今動けるのは『正義』だけだ……私だって心苦しいが、組織に敵対する可能性のある存在は全て排除しなければならない、それも分かっているはずだろう？　それと、少女の顔写真を撮るために、頭

の中を念写されたから氣分が悪い、手を話してくれると助かる」

亮一は学生服から手を放して、自分のポケットに手を突っ込む。納得いかないと顔に出ているのを、誠は見ないことにした。

「あの子の念写は、いつ受けても氣分が悪いな。一時間ジエットコースターに乗り続けたような氣分だよ……あまり氣にするな、仕方ないことなんだ」

「……分かつていてよ、俺も……」

誠はそう言い残して、部屋を出て行った。部屋にはうつむいて拳を握り締めている亮一だけが残された。

降りそそぐ雨に身体に付着していた血の跡も全て洗われ、全身が水浸しになっていた綾は急いで大型のデパートの屋上に着地した。そこから忍び込もうとしたが、中に入るためのドアには鍵がかかっていたので、力ずくで開けた。

普段従業員しか使われていないであろう通路を通り、階段を下りると、鍵のかかった鉄製の扉があつたので力ずくに開ける。かなり大きな音をたててしまつたけど、警備員が来るよりも早く中に侵入した。

中は真っ暗だったが、綾には関係なく店内を識別できた。自分にとって、それは出来て当たり前のことだから。『気にせず中に進み、ネットで覆うように囲われた商品等を見回す。

テレビ、掃除機、照明器具、パソコン……どうやらこの階は電化製品を売つてゐるみたいだ。

エレベーターを探して歩くと、意外とすぐ見付かった。横に案内掲示板が張られていたので、今の自分の位置が5階だということが分かった。衣服を販売している階は3階……2つ下だ。

エレベーターを押してみると、ボタンのランプが点かなかつた。

各階に通じるエレベーターは停止しているようだつた。近くにあつた、止まつてゐるエスカレーターから階を下りた。

途中、戸棚にタオルが置かれていたので、値札を引きちぎつて身体を拭いた。雨に濡れても身体はまったく辛くなかったが、いつまでも濡れねずみでいるのはよくないと思ったからだ。

幸運にも、エスカレーターを出て正面に下着売り場はあつた。こもネットで下着売り場全体を囲つていたが、ただ囲つているだけなので下から潜り抜けて中に入った。

中には可愛らしいキャラクターがプリントされたものから、細やかな刺繡が施されたものまであつた。中には女性用のトランクスもあつた。

とりあえず上下セットの下の方、高そうな黒いやつを選んでみる。値札を見ると、ゲームソフトが5つ買えそうな値段だつた。履き心地も良いし、上の方もちょうど良かつたのでこれにした。

次に衣服だ。

裸から下着姿にバージョンアップを果たせたが、これで外を出歩くには心許ない。せめて一着は着ておきたい。

下着姿のまま、ペタペタと綾の足音が誰もいない廊下を進む。と、一瞬、遠くのほうから明かりが見えた。

警備員かもしれない！

急いで横のネットに入ろうとして、手を止めた。おそらく警備員が探すとしたら、商品が置いてあるネットの中を重点的に探すと思えたからだ。

「だつたら……上！」

判断は早かつた。素早く天井までジャンプして、両手の五本指だけを突き刺した。指を曲げて落ちないようにしてから体勢を変え、天井に張り付くように両足をつけた。なんというかどこのクモ男みたいだ。

カツ、カツ、カツ、と革靴の規則的な反響音。ゆっくりと足音が近づいてくると共に、足元を照らす明かりも強くなってきた。

あとちょっと、もう少し、すぐ目の前、そして綾の真下に来て、止まつた。

天井からだつたから顔は見えなかつたが、身体の大きさと青色の服から、彼が警備員であることが分かつた。彼は何度かしゃがんで、綾がさつきまでいた下着売り場のマネキンを照らしたり、ネットの下の中を照らしたり、商品を照らしたりしていたが、綾の方には気づかずに入り過ぎていつた。

……もう大丈夫かな？

音をたてないように気をつけて、床に着地する。裸足のおかげか、ほとんど無音で着地できた。

振り返つて警備員が戻つてこないのを確認してから、服探しを開した。

左右にネットで囲われたスペースが奥の方まで並んでいた。中を覗こうとしてもネットが邪魔して見えない。いちいちネットを持ち上げてみると、左の方のネットを持ち上げて覗いてみると、ネットを着たマネキンがいくつか立つていた。少し中に入つてみると、就職活動用のリクルートスーツ、ホストが着そうな黒のスーツ、カッターシャツ、色々あつた。

ここは見る必要ないか……それにしても、下着売り場の横を、スーツの販売売り場にするのは駄目なんぢやないだろうか？ なんだか氣まずいことになりそうな気がする。

綾は少し、この店の販売方法に疑問を覚えた。だが、覚えたところで意味はないので、すぐにその考えを忘れることにした。

気を取り直してスーツ売り場の向かいのネットを持ち上げて中を確認する。中には男性用の下着などが多数、置かれていた。ネットを戻してさらに奥に進む。

ふと、自分が行つていることは、立派な窃盗であることを思い出した。

「そりゃ、これって犯罪なんだよね……まあ、いまさら考えても意味ないか」

けれども、こうするしか方法がないので、気にしないことにした。しばらく探し歩いて、ようやく若者向けの衣類を見つけた。また警備員が回ってきたが、さつきと同じように天井に張り付いてやり過ごす。

さつそく中に入る。

ワゴンに入った服は鍵がかけられていたので、鍵を握りつぶして中を漁る。

その中で、黒いワンピースを手に取った。古臭いようにも、新しいように見えるそれを、一旦で気に入つた綾はそれに決めた。

外に出て、初めて雨が上がっていることを知った。綾は、黒いワンピースを風になびかせて走り出す。そして空に飛び立ち、一気に数十メートルもジャンプする。

高度の上昇が収まると、重力が綾の身体を地面に縛り付けようとする。数十メートルの高さから緩やかにスピードが加速されていき、重いものを叩きつけたような音を立てて駐車場に着地した。

「い……痛……痛い」

その結果、綾の両足は粉碎した。

「……お……おう……おうう」

今度からはもうちょっと低いところから下りよう、綾はそう思つた。

地面に着地した瞬間足が折れてしまった。急いで両手で踏ん張つたおかげで上半身は無傷で済んだが、少し手を擦りむいてしまった。けれども、すぐに痛みは収まった。手の皮は新しく変わり、両足も凄まじいスピードで傷が塞がっていくのを実感する。

綾は自分の身体の「タラメ」に呆れた。

「どれくらいで立てるようになるかな……んん？」

どこからか、騒がしい喧騒が聞こえてきた。しかも自分に近づいて来ているのが分かった。酔っ払いだろうか？

「おい……やばいんじゃね？ これって自殺だろ、自殺」「でも、どこから飛び降りて来たんだ」

「そんなのどうでもいい、やつべ、マジやつべ」

「うわ、足がやべーことになってる」

うつ伏せになっているせいで人数は分からなかつたが、脚の数を見ると、数人の男女が私の周りをぐるぐると回つているのが分かつた。中には勝手に写真を撮つて、ゲラゲラ笑つている人もいた。

「やつべー、写真撮つちまつた」

「やべーって、マジ呪われるぞ」

「いいから、記念だよ、記念」

仕舞いには記念撮影までしだした。

綾はとりあえず、傷が完全に塞がつてゐるのを確かめるために立ち上がつた。

「うわ！ 起き上がつた！ やべー！」

驚いている人達を尻目に、綾は自分の足を確認した。既に傷も塞がり、足は元通りに治つていた。手に入れた服は濡れてしまつたが、不幸中の幸いにも血は付いていなかつた。

ああ、そういえば、靴を取つてくるのを忘れたわ。裸足を見て、綾はそんなことを考えた。

改めて集まつてゐる人達に視線を向ける。茶髪、金髪、赤色の髪、白色の髪、髪を様々な色に染めた4人の若者がいた。男も女も、どこの民族と言いたくなる化粧をして、一人、小さな人形のストラップがついている携帯を、こちらに向けている金髪の男がいた。

一步、金髪の男に近づくと、その分、若者達が一步下がつた。かまわずさらに歩み寄る。

「な……なんだよ……近づく」

黙つて金髪の男の横を通り過ぎた。

何か言つたような気がしたが、問答するつもりはなかつた。いちいち相手をしていてもしょうがないし、いつまでもここにいるわけにもいかない。さつさと駐車場を出ようと綾は考えた。

「ちよ……おい、待てよ。こんな時間にビーツしたの、なんか事件へ？」

綾の後ろに金髪の男がついてきた。それにつられてるようこそ、他の若者達も一緒に後ろをついてくる。質問に答えずに足を速めるが、それでもついてくる。

「待てよ、ちよっとくらい話聞けって！」

「こんな時間にウロウロしているんだから暇でしょー。せつき上から落ちてこように見えたけど、なんかの口ケ？」

「ちょっとお金貸してくれない？ 私達困っているんだ。病院に連れて行つてあげる代わりに、お黙黙頂戴。」

「後で返すからさー、ちょっと向こうで話そうよ。エスコートしてあげるからさー」

口々に話しかけてくるけど、綾は全て無視した。

それって恐喝だし、せめて統一して喋れ！

一言怒鳴り返したかったが、綾自身は身長も低いし、なにより女だ。おそらく怒鳴ったところで意味はないし、逆上させるだけだと思つたので、あえて無視することにした。

執拗に迫つてくるお金の催促を無視していると、田の前には高い網のフェンスが立ちはだかった。立ち止まつてフェンスを見上げる。目測の高さからして、綾の身長の2倍近くあった。こんなに高いフェンス、なんの意味があるのか、綾には眞面目検討もつかなかつたが、きっと防犯のためだろう。

「そんなに急ぐなつて……悪いよにはしないからさー」

金髪の男が綾にそう言つて近づいてくる。綾は振り向かずに一息でフェンスを飛び越えた。フェンスに触れずにジャンプしたために、落ちるときに綾のワンピースがまくれた。白い太ももどころか黒い下着も見え隠れしたが気にせず着地した。

立ち上がりつてフェンスの向こうに振り返る。

全員がぽかんと綾を見ていた。金髪の男は何度も、綾とフェンスの間を視線が行き来していた。

そして、もう振り返ることはせず、デパートを後にした。

見つけた……あいつが能力者か。

彼は双眼鏡を片手に、今しがた観察した獲物の力を推測する。「ふん、クズならクズらしくゴミに埋もれてれば良かつたものを」彼の姿は誰もが嫌悪感を覚えた。

皮脂でぬめつた鼻に、にきびが大量に出来た頬。腫れているよう

に見える唇に、ニヤニヤと笑みを作る目。異様な男だった。

肌寒い夜、白のランニングシャツにハーフパンツをはいた姿は異様だった。それだけでなく、やせ細った身体は、煮干の魚のようなイメージを与えた。

枯れ枝のような腕で、もう一度双眼鏡を覗き込み、獲物を確認する。

「再生能力と、ちょっとした身体能力強化か、ゴキブリのようにしてぶといかもしれん」

双眼鏡を持つ腕が一気に膨れ上がった。それは腕にとどまらず、全身に広がった。

「さて……どうやって殺そつか、殴つて？ 握つて？ 押しつぶして？ 千切つて？ どちらにしろ、ゴミはゴミ箱に捨てるのが一番だ」

枯れ枝のように痩せていた腕は、瞬く間に丸太のように太く、鋼のように強靭になった。胸板も分厚くなり、両足もはつきり分かるくらい発達した筋肉がうかがえた。元は160センチくらいだった身長も、180センチ近くまで大きくなつた。

彼はアスファルトを踏みしめて、綾の後を追つた。

誰かが自分の後を付けて来ている。

それに気づいた綾は、振り返ることはせずに、不自然にならない程度に人通りの少ない道を選ぶ。

その行き先は山。自分の命を自分で捨てた場所。そして生まれ変わった場所であり、始まりの場所。

森から漂ってくる不思議な香りの中に感じる、微かな臭い。それが後方から風に乗つて漂つてくるのを、綾は感じた。

「忘れない……この臭い。腐ったような、濁ったような、おぞましい臭い。こんなに早く会えるなんて思わなかつたわ、まさか一日も立たない内に向こうからやつて来るなんて……」

風に混ざる臭いが強くなつてきている。思い出すのも嫌な、あの者達の臭いに、綾は奥歯をかみ締めた。

「必ず……あいつらを殺す。喜一と同じようになに腦に風穴を開けてやる」

雨に濡れたアスファルト、水溜りに映つた映像を裸足で壊す。

だが、本当に殺していいのだろうか？

綾の心に、僅かな迷いが生まれた。

仮に今追いかけてくる奴を殺せば、喜一の無念を少しでも晴らせるだろう。

だが、それだけでは駄目だ。

「どうにかして、後ろの奴から情報を聞きださなければ駄目ね」

亮一と名乗っていた男。そいつの情報を手に入れなければならぬ。そうするためには、どうすればいいか。

街並みも変わり、閑静な住宅街を抜け、一ヶ月前に綾が通つた林道を進む。

「一ヶ月前は半日かかつたけど、実際はこんなに近いのね」

もしかすると、山の中を彷徨つた時間が長いだけで、道路に出てからは短かったのだろうか？

考えても意味がない、綾は早々に切り捨てた。

少しづつ、生い茂る木々が濃密になるにしたがって、道路の角度がきつくなってきた。

かまわず、綾はどんどん上つていった。後を付いてくる何者かも、一定の距離で近づいてきているのが分かつた。

そうして上つていくと、大きな広場にたどり着いた。大きな時計塔と公衆トイレと自動販売機、それと、いくつかのベンチが置かれた、文字通りの休憩所だった。

ここがいい、ここなら邪魔も入らない、誰にも見られない。

時計は、深夜の2時30分を回っていた。

広場の真ん中で立ち止まり、今上ってきた道路を振り返った。そこには男が立っていた。鋼のような胸板、丸太のような腕、発達した太もも、どう見ても普通の男ではなかつた。

「先に言つておくが、なにか遺言はないか？」

男は首を鳴らして、ゆっくりと綾に歩み寄る。綾は不敵な笑みで答えた。

「私の勘違いなら謝る、なぜ私の後を付けたのかしら？」

「理由は単純、お前を殺せと命令が出たからだ。目撃者は消せとうのが俺達の鉄則なんだ」

「どうして喜一を殺したの？」

「喜一っていうのが、誰かは知らんが、お前と一緒にいた男のことか？ そいつなら、麻薬の売人だつたから殺しただけだ。生きていても意味がない男だと組織で決まつたからな。俺達はこれでも正義の組織なんだよ」

「生きるために薬を売るしかなかつたとしても？」

「知つたことではない。薬を卖つてはいるだけで悪だ。クズを生かしていくとも、クズ以外になることはない。私達に殺されただけ、感謝してほしいくらいだ」

綾は拳を握り締めた。体中に怒りと力が湧き上がってくる。

「最後に質問。あんたたちは何者?」

「私達は弱き人達のために戦う、正義のための組織だ。ゴミはゴミ箱に捨てる、それが私達の仕事だよ。さて、それではお別れだ」綾の前に立つた男は、大きく腕を掲げ、振り下ろした。

綾は避けようとなかった。

丸太のような腕から、風を切つて振り下ろされた筋肉の弾丸。ぐちゃ、ベキリ、肉をすり潰すような音を立てて、綾の身体はボールのようにアスファルトを転がった。

痛い……痛いなあ……さつき足を折ったときよりも痛い……。

痛む頬を押さえようと思つたけど、その腕も折れていることに気づいた綾は、内心苦笑した。

顎を粉々に碎かれ、人形のようになにアスファルトに横たわって、綾は夜空を見上げた。

そういえば、喜一と会つたときもこんな夜だつたつ。喜一の間抜けな笑顔が胸の奥に広がつた。

男は倒れた綾に近づき、綾の頭を掴んで持ち上げた。

首が痛いわ、女の子の頭を掴まないでよ。綾は男を睨み付けた。

男と綾の視線が重なり合う。しかし、男はまったく躊躇せず、綾の身体をアスファルトに叩き捨てた。

首の骨が砕け、肋骨が折れ、内臓を傷つける。

叩きつける音は、濡れたタオルを叩きつけるような音に似ていた。アスファルトに横たわっている綾を、ゴミか何かのように蹴りつけ、踏みつける。その顔は愉悦に歪んでいた。

「ははは！ バカが！ ゴミが！」

バカ、ゴミ、さつきからそればかりね。もつ少し、悪口の引き出しを持つていないので？ 漫画の三下みたいよ。

それに、気づいていないのかしら？

私がこつそりと重要な器官を瞬時に再生させている」とこ……気づいていないでしょうね。

ぐひゅり、ぐぢゅり、繰り出される足が、綾を痛めつける。

「『ナリはナリ』からじくドブに転がつていればいいんだよー。」

それじゃあ、女の子を蹴つていいあんたは？

言つても無駄か……こいつ、なんか相手を殺すこと自体、とても楽しんでいるみたいだし。といつも、いつまでも蹴るんじゃないわよ。喋ることはできないけど、しつかり痛みを感じているのよ。分かつてる？

広がつていく血の海、それが男の靴を汚していく。

「私達は正義だ！ お前らみたいなクズを正義の名の下に殺すのだ！」

面白い考え……その正義は誰が決めているの？

まさか自分達で決めているのなら、お腹抱えて笑つてあげるわ。自分で決めた正義を誰かに押し付けるなんて、どこかのヒーローよ。正義つてバカみたいに繰り返すけど、どこからみても、悪の手先にしか見えないわよ。

男は蹴るのを止め、軽蔑の眼差しを綾に向けた。

「こんな女が私達の仲間になる？ 麻薬を売ることを容認した女を？」

綾の周りをぐるぐる回る。一歩足を踏み出すたびに、ぴぢゅり、ぴぢゅり、ぴぢゅりと血が飛び散る。

そうしなくとも生きていけるあなたは恵まれてこいるのでしょうね。それに、たとえ仲間に誘われてもあなた達とは仲良くなつていけるとは思えないわ。

「私達、誓ある選ばれた正義が、このよつな女と同列？ ふざけるな！ 生まれ落ちたとき、既に私達は選ばれたのだ！」

選ばれた選ばれた、つるさいな。あんたがどれくらい偉いか知らないけど、それで誰かを殺していい理由にならないと思うけど。

「アリス様も、こんなやつらに情けをかけるなど、甘いことを……アリス様……か。様つてことは、この人達は何かの組織に属しているかもしけな……この人はいつまで演説を続けるつもりかしら？」

どうせなら、他の人達の情報とか漏らしなさこよ。」  
「……」

「…………まあいい…………そういえば、この女は自己修復能力があると聞いていたが……こつまで経つても回復する素振りをみせないな……。もしかしたら、こいつは自分の力を使いこなせていないのか？」

綾は思わず身体を震わせた。けれども、肉体が受けたダメージが酷すぎて、身体はピクリとも動かなかつた。不幸中の幸いだ。  
見られていた？ でも、この口振りからすると、傷を治すところを見ていたのは別の人みたいね。だったら、今すぐ傷を治してしまつたら疑われてしまうかもしないわ。

できる限り弱そうに、できる限り普通の女の子のよう……下手に応援を呼ばれたら、後々厄介なことになる。

そう考へ、傷の再生スピードを弱めようとしたとき。

「遅かつたか」

自分を痛めつけた男とは別の、綾にとって聞き覚えのある声が割り込んだ。

一際強く、心臓が鼓動したのが分かつた。

「この声……忘れない、こいつは喜一を！」

「なんだ、亮一か。邪魔するなよ……正義を執行しているところだ」「正義……ね、俺には難しいことなんて分からぬいけども、さつさと楽にしてやれ」

「それが聞いてくれよ、この女、まともに能力が使えないみたいだ。どうやら、こいつが自己修復能力を持つていてるというより、あの男がなんらかの治癒能力を持つていたみたいだ」

血溜まりの中、綾はうつ伏せになつたまま黙つて会話を聞いた。  
会話からすると、こいつら、普通の人間じゃないみたいね。もしかすると、私と同じものなのかもしれない。そうだったら、1対2は厳しいわ。

服をカモフラージュにして、少しづつ胴体を再生していく。体外

に排出された血液等はどうしようもないの、体内で生成する。

「そうか……どうりで。今さつき、テレビのニュースがあつてな。

あの男の事件が報道されていたんだ」

「それがどうした。人通りが少ないとはいえ、死体が一つ転がつていたら事件にもなる。マスコミが嗅ぎつけてもおかしくないだろ」「気づかれないように目を瞑り、目に入つた血も全て吸収して体内に戻す。

あら？ そういうば、全然呼吸していないけど、大丈夫かしら……大丈夫みたいね。つくづくいいかげんな身体。

「そのニュースだと、男の死体は胴体がすっかり消失していると報道された。お前の話からすると、女の子に能力があるわけではなく、男の方だったみたいだな。たぶん、自分を代償にして、他者を治癒する能力者だ」

「今となつては関係ない話だ……どちらにしろ、この女があの男の罪を容認していたのも事実だ。田撃者は消す、悪を滅ぼす、それだけだ」「…………いいさ。俺は確かに伝えた、後、もうそいつは死んでいると思うぞ」

「分かつていてる。最後にもう一度やるだけだ。こんなやつが人間と同じ顔をしているだけで虫唾が走る」

「……いい趣味しているよ、あんた」

亮一の身体が淡く発光し、そして音もなく姿を消した。

「ふん、うるさいやつだ」

男は頭をガシガシと搔き、綾の元へ近づいていった。先ほどのような歪んだ笑みではなく、面倒くさそうな顔をして。

「……よく考えたら、亮一に待つてもらえばよかつたか」「待つてもらえばよかつた？ ということは、亮一って男は、もうここにはいなわけね。

決断は早かつた。瞬時に見た目には分からぬ程度に、むき出しひ四肢を再生していく。

しかし、内心、綾は焦っていた。

度重なる出血と再生を繰り返したことによって、強い倦怠感、空腹感が肉体を蝕んでいたからだ。

予想以上にダメージが大きい……今私では、あいつらと正面から戦つても、勝ち目は薄い。それに、あいつらは私をどうやって見つけたの？ 仮にこの男をここで倒したとしても、またすぐに追っ手を差し向けるかもしれない。

それでは駄目。

あいつらからの追手を失くすためには、どうにかして、自分が死んだということをアピールしないといけない。

だけど、どうやって？

今まで我慢した分、3倍にしてお返ししてやらねば、腹の虫が治まらない。

けれど、今それを行つたら、後々面倒になる。

綾の葛藤をよそに、男は綾の横に立った。

綾の頭を掴んで持ち上げ、最初のときと同じように、大きく腕を掲げ、弾丸のように振り下ろした。

男の拳が綾の顔を打ち抜き、綾の身体はアスファルトを滑るようになに転がつた。

「さて……帰るか」

男は小さく欠伸をして、道路を下りていった。後姿が暗い道路に小さくなつていき、ついに見えなくなつた。

誰もいなくなつた広場で、頭がなくなつた綾の身体が静かに動き出した。

首から肉が盛り上がつた。頭があつた部分に大きな肉の塊ができ、次第に小さく、形付けられていく。数秒もすると、そこに綾の顔が再生された。

「…………どうやら行つたみたいね。これからどうしようかな」

男の姿が見えなくなり、臭いも感じなくなつてから、綾は身体の再生を始めた。首元から順に治していく、ものの数秒で全ての怪我

を傷一つ残さずに治し終えた。

途端、はつきりと自覚してしまった飢餓感と倦怠感。

「疲れた……本当に疲れた……」

重い身体を動かして、気合でベンチまで身体を持っていく。崩れ落ちるようにベンチに腰を下ろし、そのまま横に倒れた。すっと意識が黒く染まつていった。

いつからだろう、私が嫌われるようになったのは。  
いつからだらう、私が姉と比べられるようになったのは。  
いつからだらう、両親が私に見向きもしなくなつたのは。  
いつからだらう、誰も私に見向きしなくなつたのは。  
どうして自分はこうなつてしまつたのだろうか、そんなことを考えた。

綾の眼前に浮かんでは消えていく思い出。辛かつたり、楽しかつたり、悲しかつたり、その形は様々。

そして次々に湧いてくる恨み、怒り、悲しみ、絶望。過去を思い返せば思い返すほど、それらは強くなつていった。

目を瞑っているのに、鮮明に映し出される悪夢。綾は視線を逸らそうと思ったが、どうしてか出来なかつた。

ふと、一つの映像が綾の前に止まつた。

それは綾が、まだ小さいときの映像。親戚同士で集まつたときの思い出。

思い出の中の叔父が言つ。

『本当、お姉ちゃんは賢い子だ』  
つるわこ。

思い出の中の叔母が言つ。

『まだ小学生なのに、もう中学生の勉強をしているのね』  
つるわこ。

思い出の中の父が言つ。

『綾とは違つて美人になるぞ』

「ふむや。」

思い出の中の母が言つ。

『どうしてあなたはこんなに出来が悪いのかしり』

「ふむや。」

思い出中の先生が言つ。

『姉とは違つて、こんなことも出来ないんだな』

「ふむや。」

思い出中のクラスメイト達が言つ。

『もしかして、血が繋がっていないんじゃないの?』

「ふむや。」

思い出の中の初恋の人人が言つ。

『お前じゃなくて、姉に用があるんだ』

「ふむや。」

思い出の中の皆が言つ。

『お前なんて生まれて来なければ良かつた』

「ふむや。」

田の前の映像から逃げたい。そう思った綾は、映像に拳を叩き込んだ。

んだ。

ビシリと映像にビビが入り、あつけなく砕け散った。

そして、また数え切れないくらいの思い出が浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

じわっと、目尻が熱くなり、涙が視界をぼやけさせていく。  
あわてて涙を拭う。けれども、後から後から出てくるため、いくら拭つても拭いきれない。

「ぐつ、えぐ、えつ」

嗚咽が漏れる。綾は涙を堪えられなかつた。

「えぐ、えぐ、ふええ、ふえええへへん」

ついには、幼子のように声を張り上げて泣く」としか出来なくな

つた。

誰も居ない場所で、綾は一人涙を流し続けた。

眼前に広がる映像には、綾の姿は無い。あれも、これも、どれも、全て姉に対する贊美と、綾に対する侮蔑しかない。  
いつからだろう、私が嫌われるようになつたのは。  
いつからだろう、私が姉と比べられるようになつたのは。  
いつからだろう、両親が私に見向きもしなくなつたのは。  
いつからだろう、誰も私に見向きしなくなつたのは。  
もしかしたら、自分はこうやって泣き続けるために生まれてきたのかもしれない。

一人寂しく、誰にも知られることなく、誰にも見向きもされず、泣き続けるために、生まれてきたのかもしれない。

その考えに思い至った瞬間、綾の眼前には映像ではなく、一つの光が現れた。

その光はとても温かく、綾の心を優しく照らした。

「喜一」

綾は手を伸ばし、その光を抱きしめた。

「喜一、喜一、喜一」

名前を呼ぶたびに、光は答えるように鼓動した。

綾は嬉しくなつて、何度も名前を呼んだ。もう、涙は止まつてい  
た。

「喜一、喜一、喜一、喜一」

その度に、光は答えてくれた。

嬉しかつた。

こんな自分でも愛してくれている人がいることを。

こんな自分でも命がけで守ってくれる人がいることを。

こんな自分でも、まだ他人をこんなに愛せることを。

それらが嬉しくて、綾は兄の名前を呼び続けた。

誰かに呼ばれたような気がした綾は目を開けた。

「……」「……どこ？」

何時の間にか光は消え、綾は立ちぬいていた。真つ黒な暗闇が四方を埋め尽くし、一寸先すら見通すことが出来ないくらいの暗黒。音もなく、静かに綾の言葉が広がり、消えていった。

「ここって前にも……て、いうか私、また裸なのね」

呆れたように自分の裸身を見下ろし、ため息をついた。

むん、と腕を組んで、虚空を睨んだ。

「こそこの隠れてないで出てきなさい。どうせどこかに居るんですけど? あんたに聞きたい」とはいっぽいあるから、とりあえず出てきなさい!」

綾の声が暗闇に広がる。

それが呼びかけになつたのか、綾の眼前に白い光が突如出現して、それがどんどん勢いを増していく。

光は橢円形に広がり、そこから四本、細い光が伸びた。それが少しずつ形作られ、手足の輪郭が見えてくる。みるみる光は人間の形になり、指が生え、頭が生え、顔のパーツが盛り上がり、身体に凹凸が出来る。

そして綾にとつて見慣れた姿になつた。

「わ……私……?」

綾と同じ顔をした、彼女は微笑んだ。

「そうよ、私は綾。綾は私。けれども、私は私で、綾は綾よ」  
彼女はそう言ひと指を鳴らした。乾いた音が暗闇に広がつていった。

その瞬間、暗闇に変化が始まった。

泥が崩れ落ちるように暗闇が消え、消えていつた場所から新しく景色が作られていく。

一分もしないうちに、世界の変化は終わりを告げた。

「…………どうこうこと……この光景つて……」

綾は辺りを見回した。とても見覚えのある風景だった。

辺りを覆う木々、一本の大きな木が自分を見下ろし、先ほどまで感じなかつた土の感触を足裏に感じる。そして……。

また……見れたんだ。

はるか空を見上げれば、そこに月が浮かんでいた。自らを白銀に染め上げる月の光、全てを優しく包み込む母なる夜の闇が、例えようもないくらい美しい。

「喜んでもらえて嬉しい」

綾は視線を下げ、自分と同じ顔をしたものに向けた。

彼女は、二三回と笑みを浮かべた。

「とりあえず、立ち話もなんだから」

「…………そうね」

彼女は、大きな木の根元に背中を預けて座つた。ちょい、ちょい、手招きで綾を呼ぶ。断る理由もないのに、その隣に座つた。

「本当はもつと貴方と話したいけど、私はここに長く存在できないの。でも、ずっと綾の中にいるから、話し足りないことがあつたらいつでも呼んでね」

彼女は頭を押されて、心で呼んでもれればすぐに分かるからと言つた。

彼女の言葉に、綾は眉間に皺を寄せて彼女を睨んだ。

「なんとなくそういうじゃないかと思っていたわ。私が聞きたいのはそれじゃなくて、どうして私を呼んだかということよ」

しかし、彼女は綾の質問に答えなかつた。

「綾はあの人達を探し出してどうするの？」

ポツリと溢した問いかけが、綾の表情を凍りつかせ、言葉の行き先を封じてしまった。かまわず彼女は話を続ける。

「今からでも遅くないわ。警察に行つて、保護してもらえばあの人達もそう簡単には……それに、綾に危険なことはしてほしくない！」

彼女は綾の正面に回り、両肩に手を掛けた。哀願した。綾と彼女の視線が交差する。

「お願い……綾……」

「…………無理よ」

綾は小さくため息を付いた。視線を2~3度、右に左に逸らしてから、彼女と再び視線を合わせる。

「今からでも遅くない? 逆よ、今からでは遅すぎるの」

綾はその願いを即決で断つた。

「あの事件は全国に報道されている……まだ一ヶ月程度しか経っていないから、今警察に行つたらあつとう間に日本中に報道されてしまうわ。そうなつたら、あいつらに私の存在を教えることになる」「でも……綾の家族に守つてもらえれば」

「守つてくれると思う? ずっと私の中にいたつことだから、それくらい検討が付くでしょ」「…………」

「彼女は否定できなかつた。」

「…………それにね」

両肩に乗せられた彼女の両手をそつと外し、彼女の手を包み込むように手を重ねる。触れた彼女の手は温かいものだった。

「修学旅行のあの日、学校に向かう途中で私に話しかけたのは……語りかけたのはあなたでしょう?」「…………」

「あのとき、あなたはたしかこう言つたわ。あなたは孤独を味わうかもしけないってね。あなたのいうことは今更なのよ」「…………」

「そして、あんたが行つた結果が、今あなたの目の前にいる私なのよ」

彼女は俯いて何も言わなかつた。それは無言の肯定の証だつた。

「私の身体は元々そうだったのかもしれない。けれど、切つ掛けを作つたのはあんた」

胸のうちから湧き出でてくる言葉を、止めることはできなかつた。

「私の身体を作り変えたのもあんた。『ご飯が食べられなくなつたのもあんたが原因。人間を辞めることになつたのも、あんたが原因。そして何より……』

ギュッと手の平の中の、小さな手を握り締める。

「喜一を食べることになつたのも、あんたが原因」

その瞬間、微かに、微かに、彼女の両手は震えた。

「…………恨んでいるの？」

数秒の沈黙の後、彼女は俯いたまま静かに綾に聞いた。その言葉にはどんな思いが込められているのか、それは綾には分からなかつた。

だから、綾は正直に自分の思いを包み隠さず話すこととした、話さなければならぬと思った。

「恨んでいないわ

その綾の答えに、彼女は驚いて顔を上げた。目じりに涙が溜まつていた。

綾は握った手から力を抜き、優しく握る。彼女も優しく握り返してきした。

「だつて、そのおかげで私は喜一に会えた

」 彼女は呆然と綾を見つめた。自然と、綾は微笑みでお返しする。

「あんたがいたおかげで、私はかけがえのない人に会えた。世界でたつた一人の……最高の兄に会えた。だから私は恨んでいない。寧ろあんたに感謝しているわ」

綾は思い出していた。一ヶ月という短い時間ながら、とても充実した日々を。

今にして思う。私があの日、喜一に警戒心を抱かなかつたのは、私のことを本当に心配していたからだということを。

たとえそれが死んだ妹の身代わりとしての行動だったとしても、私は満足だった。

私を想ってくれたのだから。

何がある度に出来の良い姉と比べられ、家でも学校でも必要とされず、同年代から見下された私を、必要としてくれたから。

最後は私を助けるために自分の命すら投げ出してくれた。だから今度は私が兄の為に命を賭けるのだ。

「力を貸して。私にもっと力を。あいつらに負けない絶対な力を」  
あのとき私は誓つたのだ。

鉄臭い血液と私の涙が混じりあつたあの夜。

喉を通る生臭い臓物に喜びを感じると同時に絶望を感じたあの夜、降りそぞぐ雨粒の中で、私は誓つたのだ。

「あいつらを……あの男を……私は！」

綾は叫んだ。そこには全く躊躇がなく、本気の思いが詰まっていた。

彼女は無言で綾の想いを聞いていた。握られた彼女の両手は凍りついたように動かない。

……いくばくかの時間が流れた。数秒か、はたまた数時間か、重苦しい空気が綾と彼女の間を流れた。

そして、彼女は諦めたようにため息を吐き、了承した。

「……いいわ、協力する。綾がそう決めたのなら、私は最後まで付いていくわ

「……ありがとう……」

綾は万感の想いを込めて、礼を言った。彼女はそれを微笑みで返した

「こちらこそ……綾に嫌われなくて良かつた……つと、もう時間ね」「言葉が終わると同時に、少しずつ彼女の後ろの景色が鮮明になり、その分彼女が薄れていく。

綾はあわてて彼女の両手を握り締めるけど、すぐに彼女の両手は完全に透明になつて消えてしまった。それだけに止まらず、どんどん透明の部分が彼女の体を侵食していく。

「……行くのね？」

「ええ行くわ……ところで、意識が戻った後はどうするの？」「ここ

はあの日の事件現場からそう遠くないから、事件にならないわけないわ。綾の言つた通りなら、綾の死体がなくて事件が取り扱われないと、逆に不振に思われるんじゃない？」

彼女の意見は正しかった。確かに、綾の死体が発見され、事件が報道されなければ、綾を殺そうとした人達に綾が生きていると知らせるのと同じことだからだ。

その人達の目を搔い潜るには、一度綾を死んだことにしなければならない。そうしなければ、再び綾を狙つてくるかもしないのだ。

「それくらい、わかつているわ」

綾は、全身が透明になり、ほとんど霧みたいになってしまった彼女に向かって不敵に笑みを浮かべた。

「私に考えがあるの。まあ、ただでさえエネルギーが底を尽いているのに、そこに追い討ちをかけるような作戦だけね

「……作…戦？」

ポツリと彼女の声が僅かに響く。ついには、彼女の姿は完全に消えてしまった。

そして、ふわりと綾の身体が浮かび上がる。大木よりも高く、ゆっくりと上昇していく。綾の身体は月に向かってスピードを上げていく。

加速していく綾の身体は光の粒子に分解され、あつという間に消えた。

世界には、どこまでも広がる森林と、母なる光だけが残された。

## 第八話・奔走（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださいと  
うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

大きな時計塔と公衆トイレと自動販売機、それと、いくつかのベンチが置かれた粗末な休憩所。虫の声も野犬の声もしない静かな場所だった。

辺りにはおびただしい量の血液が散乱していて、血液の海の中心に綾は立っていた。服を脱ぎ捨て、下着を脱ぎ捨て、生まれたままの姿で立っていた。

綾は内心、今日はずいぶん裸になることが多いわねと、場違いなことを思った。

音もなく通り過ぎていく夜風が、綾の頬をくすぐっていく。

「……いい風ね。早いうちに済ませちゃいましょうか」

綾は両目を閉じてダラリと身体の力を抜き、自然体になった。そして、大きく深呼吸をする。一回、二回、三回。

ゆっくりと閉じられた綾の目蓋が開かれ、中から赤い瞳が姿を現す。

「　　つふ！」

綾は気合を込めて、右腕で左腕を引きちぎった。ブツブツッと、嫌な音を立てて左腕はあっけなく身体から分離した。

途端、噴水のように噴出す血液。普通なら腕を失う激痛と失血で即死してもおかしくないものだが、綾には関係なかった。

左腕の激痛を堪え、意識を流れ出る血液に集中する。すると、身体から噴出した血液に変化が表れた。

地面にこぼれた血液に、白い点が浮かんだ。すぐさまその白い点の数は増え続け、互いがくつ付き合い、一つの塊になっていく。

綾は意識を集中させ、体内の血液製造のスピードを加速させた。塊はみるみる姿を変え、塊だと思った物は人間の少女の腹部だった。そこから伸びるように胸の部分が生え、四肢が生えていく。

ただし、首は生えなかつた。なぜなら、本来なら綾の死体は顔面

を打ち抜かれ消失しているからだ。なので、肉体の数箇所をわざと穴を開けて再生させ、内臓もいくつか出血させた状態にした。

数分後、人間の少女と思しき死体が完成した。綾は脱ぎ捨てた自分の衣服を死体に着させた。全ての工程を終了させた綾は、大きく息について膝を付いた。

「はあ、はあ、はあ……どうにか形になつた……お、おおお？」  
作業を終了させた途端、とてつもない空腹が綾を襲つた。今まで感じたことが無い程の、強い空腹感だった。

「い、これは……空腹で死んでしまう。餓死してしまわ……」

綾のお腹は恐竜の鳴き声を上げた。あまりの大音量に、綾はあわててお腹に両手を当てた。

「うーー……これは耐えられない」

綾は急いで頭の中にいる彼女に呼びかけた。彼女はすぐに返事を返した。

『一応、私の偽者を作つた。前の自分の身体をイメージして作つたんだけど、これで警察を誤魔化せるかな？』

（大丈夫、ちゃんと誤魔化せるわ。作った偽者の身体は、以前の綾の遺伝子を偽造して作られているから、検査しても綾だと断定されるの）

綾は、ほつと息を吐いた。まず一つ目の不安要素が解消されたからだ。

『……そういうば、私つていきなりこんなもの作れたのだけど、なんでかな？ もしかして貴女が何かサポートしてくれたの？』

（人が呼吸の方法を意識せず覚えると同様、綾のその力も、初めから身体が覚えているのよ。だから私は何もサポートしていない、全ては綾自身の力よ。）

『へえ、ありがとう。とりあえず、話はこれで終わり。また気が向いたら話しましょう。今はお腹が空いて堪らない』

（食べなくても数週間は生きていられるけど、その分空腹が強くなるからね。できるなら、定期的に取り入れた方がいいわよ。それじ

やあ、またね）

「それじゃあ、またね」

すうつ、と何かが頭の中から消えたような感覚を覚えた。きっと

今のが、彼女なのだろう。

「適当な人を見つけて、早く食事を済ませないと……」

綾は山を降りることにした。ゆるやかに流れる夜風が綾の全身を撫でていく。

血溜りを抜け、アスファルトに血の足跡を残して傾斜を下る。足裏に触れていた血液がアスファルトに奪われていく感触。綾はそのとき、とても奇妙な感覚を覚えた。

ピタッと足を止めて、背後の偽者の死体へ振り返る。

「…………」

そこには、綾の衣服を身に着けた、物言わぬに肉の塊が転がっているだけだった。

ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる、綾の胸の中で、何かが渦巻いている。だが、綾にはそれが何か分からなかつた。ただ、その何かは、今まで大切だつたもので、これからはいらないものである。それだけが理解できた。

数秒、綾は死体を見つめる。もちろん、死体は何の反応も示さなかつた。

「…………はあ…………早く、誰か見つけないといけないわね。できるなら服も手に入るかな…………あまり注目を集めるとわかれにもいかないし、身体も洗わないと……血でベトベト」

綾は踵を翻して歩を進めた。もう振り返ることはしなかつた。

とりあえず、先に衣服から。そう考えた綾は、再び大型のショッピングセンターを訪れた。最初に進入した屋上に着地したとき、既に空は僅かながら朝の兆しを見せ始めていた。

急がないと、店員が店を訪れてしまう。それまでに、必要な物は

全て手に入れなくてはいけない。

そう思つた綾は、壊していた入り口から素早く中に進入し、これまた壊してある鉄製の入り口を通りて中に進入する。

手早く下着売り場を目指す。途中、タオルを何枚か取つて、身体に付着していた血痕を拭い取る。固まつてボロボロになつていた血痕は、面白いくらいに簡単に拭い取れた。

でも、血つてなかなか汚れが取れないものではなかつたか？ そういう疑問を感じた綾だつたが、気にしないことにした。気にしても意味がないことだつたからだ。

運よく、同じ下着とワンピース、それに、かわいらしい靴を手に入れて、ショッピングセンターを後にしたとき、空はかなり明るくなつていた。

こんどは着地に気をつけ、何度も減速をかけて地面に着地した。そのために、何箇所か建物に傷が残つてしまつた結果になつた。

「こんなにでかいのだから、だれも気づかないでしょー」

綾は足早にショッピングセンターを後にした。

衣服を入れ、とりあえず注目を浴びることはなくなつた。そして空腹という、もつとも重要な課題をどうクリアするのに、綾は誰を狙うか決めていた。

「まさか、助かるなんて思つていらないでしょーね。私を知つていてるあんた達を逃がすことはない。待つていなさい！」

恐竜のうめき声が辺りに響いた。綾はそつと、お腹を押さえた。

## ある刑事達の会話、一一（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮ください。うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## ある刑事達の会話、二

『……にて、小学生達の元気な声が賑わい、会場は大盛況でした。……次のニュースです。4日前、野木山近くの街道にて、女性の死体が発見された事件の続報が入りました。つい今しがた入りました情報によりますと、発見された死体は、一ヶ月ほど前に起きた、ホテル少年少女無差別殺人にて行方不明になつていた高田綾さん（当時15歳）のものと判明しました。』

テレビの中のニュースキャスターは、悲痛そうに原文を読み上げていた。その様子を、大原と前田は無表情に眺めた。

テーブルにはいくつかの写真付の書類が乱雑されていた。ソファーに互いに座り大原と前田はテレビを見ながらそれらに目を通していた。

二人が居る部屋には他に人はいない。テレビから出る声と、アナログ時計の秒針の音が静かな空気に圧力をかけた。

妙に訳知り顔で事件の悲痛さと異常性を話している犯罪心理学の権威とか名乗っている太った男を見て、思わず大原は愚痴を言いたくなつた。

そこまで分かっているならさつさと犯人の場所を教えてくれ、と。『本当に惨い事件ですね。ただ誘拐して殺害するだけでなく、わざわざ遺体の首を切断するなんて……未だ犯人が見付かっていないそうですし、本当に警察には頑張ってほしいのです』

太った男は横目に視線を向けた。横に座っていた小奇麗な女性キヤスターが、太った男の意見に同意した。

『本當です。私も被害にあつた人も同じ女性なので、他人事とは思えません。幸いにも、被害にあつて生きていた学生達は全員、無事に病院を退院なさつたそうでなによりです』

『けれども、その学生達にもまだまだ心のケアは必要でしょう。何でも、退院した生徒の何人かは、ふらふらと行方をくらましたりし

たらしいですからね』

『ええ！ それは大丈夫なのですか！？』

女性キャスターは、驚いたように太った男に顔を向けた。

大原はそれを白々しく思つた。先に原文を読んだりしてリハーサルをしているはずなので、キャスターの行動が妙に嘘くさく思えたのだ。

太った男はよくぞ聞いてくれましたと腹を揺すつて質問に答えた。  
『今、警察で行方を追つているらしいのですが、まだ見付かっていないそうです。おそらく、夢遊病に近い何かの心の病を患つてしまつたのでしょうか。行方をくらませた生徒達も、多分何でそんなことをしているのか分かつていなはずです。結局のところ、早く警察に見つけてもらわないと危険かもしれません。もしかしたら、自傷行為に走る可能性もあるのではないか』

最後まで見るつもりはないので、大原はリモコンでテレビの電源を切つた。それでも、何も映さなくなつたテレビをジッと見つめた。同時に、テーブルを挟んで隣に座つてテレビを見ていた前田も、苦肉を噛み潰した表情で黒くなつたテレビ画面を見つめていた。

一瞬、空気が無音になつたが、先に沈黙を破つたのは前田だつた。  
「まだマスコミには伝わつていないみたいですね」

ポツリと零した前田の言葉に、返事をしてやろうか迷つた大原だつたが、返事を返すこととした。

「もし伝わつていたらこんなものじゃないだろうな。少なくとも、殆どのニュース番組はこれを取り上げるだろ」

「確かにそうですね」

大原の率直な意見に、前田は苦笑した。

大原はチラリと視線をテーブルに戻し、書類を一枚手に取つた。

そこには行方不明リストの人名が記載されていた。

前田は大原の持つている書類に目をやると、肩をすくめて天井を仰いだ。

「行方が分からない生徒達の内、死体で帰つてきていな子供は後

「一人だけ……か。まるで出来の悪いミステリー小説みたいですね」  
口に出して同意はしなかつたが、内心もつともだと大原は思つた。  
なので、大原も疑問に思つてることを前田に言つた。

「しかも戻ってきた生徒達は全員肉体の大分部が破損、または欠損だ。おそらく犯人が持ち去つたであろう遺体の一部は、現在でも発見されていないと来ている。ミステリーにホラーにスプラッタ、怖いもの無しだな」

「笑えない話ですね……それはそうと、残つた行方不明最後の一人は、まだ足取りは掴めていないのですか？」

前田の質問に、大原は疲れたようにため息を吐いた。

「残念ながらまだ何も。そつちの方はどうだ？ 娘の首無し死体が見付かって、ずいぶんと親御さんは取り乱しただろ？」

大原はテーブルに残つている残りの資料を手に取つていく。前田もそれを手伝つた。

「それが……嬉しそうでしたよ」  
ピタッと大原の手が止まつた。

「…………どういうことだ、前田？」

前田は大原に構わず、一枚一枚折り目がつかないよう慎重に、丁寧に資料を集めて纏めていく。

「どうもこうもありませんよ」

資料を全て集めた前田はソファーから立ち上がると、大原に指で入り口ドアを指示した。

「とりあえず残つた行方不明者も搜さないといけません。詳しい話は車の中でしましよう」

大原はその提案に同意し、ソファーから重い腰を上げた。

車で市内、県外を散策すること数時間。既に太陽は地平線に半分姿を隠し、世界を赤く染め上げていた。大原は、それがまるで身体にまとわり付くように感じた。

何十回目かの信号で止まつたとき、道行く歩道路に視線を向けていた大原に、前田はポツリと話した。

「そういえば、あのときもこんな夕陽でしたね」

前田の突然の問いかけに、大原は振り向いた。前田は視線を前から外すことなく、そのまま話を続けた。

「ホテル事件のときですよ。あの時も、現場から林道を抜けるとき、こんな夕陽でしたねって話なんですねけどね」

「そういえば、そんなこともあつたな」

信号が青に変わり、二人を乗せた車は市街地を走りだす。その横を、何台も車が通つていった。歩道を進む人々は、寒そうに身体を縮こませていた。

「あの時よりも気温が下がつて寒いですし、事態も悪化している…

…という点を除けば、前と一緒にですね」

「…………たしかにそうだな。ところで、そろそろ話してもらいたいのだが」

大原の言葉に、前田は一瞬黙つたが、すぐによりを開いた。

「…………ニュースになつていた、高田綾の自宅に行きました。大原さんが知つている通り、遺体解剖の許可を貰うためにです。それなりに覚悟していたんですよ。なんせ、娘さんの遺体を解剖するのですから

「前置きはいい。結局親御さんの反応はどうだつたんだ？」

「はつきり言えば、好きにしてください、だそうです。遠まわしに言えば、事件解決のために協力します、とのことです。私的にはどうでもいいと聞こえましたけど」

それつきり、前田は口を閉ざした。車内には窓の向こうに流れる空気の音と、静かなエンジン音が響いた。

大原は思つた。

こういう時、頭の回転が速い奴は何か上手いことを言つて空気を和まつたり、気の利いたジョークでも言つたりするのだろう。しかし、大原にはそんな要領など持ち合わせてなく、無言でしか答えら

れなかつた。

重苦しい空氣の中、カチッと車内に音が鳴つた。途端、車前方のライトが点灯して、前方を明るく照らした。

大原は顔を窓に寄せて、外を見た。

「……いつの間にか日が落ちていたみたいだな」

「ええ、私も今気づきました。これじゃあ、警察官失格ですね」

「それだったら、気づかなかつた俺も……ん？」

大原は頬をガラスにくつつけて、薄暗い外をじっと見つめた。

「どうしたんです？」

「…………いや、な。こんな季節に素肌が見える寒そうなワンピースを来た女の子が歩いていたのが見えたんだが……」

「この時期にワンピース？ 女の子が？ 大原さん……もしかして溜まっているんですか？」

可笑しそうに前田は笑つた。大原も苦笑した。

「バカを言うな……ただの見間違いだ」

「だと思いますよ」

そして、再び車内に沈黙が訪れた。

大原は、振り返つた。かなり後方に小さく見える後続車しか大原の目には映らず、歩道にも、道路にも、女の子は居なかつた。

## 第九話・決着（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカーバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださいと  
うお願いします。

\*ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています\*

## 第九話・決着

目覚めたとき桜井は、そこが何処なのか検討が付かなかった。なぜならば、目覚める前の彼女の記憶にあるものは、買い物から帰宅している途中だったのだ。見慣れた道を通り、見慣れた家々を通り、いつも通り家に帰るところだったのだ。

いつそこに来たのかも分からない。それどころか、どうしてここにいるのかすら、桜井には理解できなかつた。ふと気づいたとき、回りの景色が一変してしまうという事態に、桜井の頭はそれらの疑問を思考することを放棄してしまつた。

鉛のように重く感じる身体を動かし、大きな木に背中を預ける。ここで初めて、自分が木に背中を預けていることに思い至つた。周りを取り囲む木々、目の前でうずくまっている肌色の何か、その周りで転がつてゐる丸い物。

上手く動かない頭を、ぼんやりとした意識で操縦して、目の前の景色を眺めた。

その間、ジユルジユル水をするような音と、硬い何かを噛み砕くような音が辺りに響く。どうしてか、その音を聞いていると、とても不安を感じた。

数秒後、肌色の何かは小柄な人間だと理解できる程度まで意識が回復した。

そして、周囲に転がつてゐる丸い物の正体も同時に理解できた。理解できてしまつた。

「…………ひ……い……い……い……ひ……い……い……い……い……！」

理解した瞬間、桜井の喉は声を出すことを放棄した。喉から掠れた声が絞り出され、蚊の鳴くような悲鳴だつた。

立ち上がりつて逃げようと考えるよりも早く、下半身は主を裏切つてしまつた。

桜井は恐怖のあまり腰を抜かしてしまつたのだ。

必死に力の入らない両足に力を込めるが、全く言うことを聞かない。せめて手で這つて逃げようとするも、桜井の両手は意味もなく地面を搔き築るだけだった。

そして、幸運は訪れなかつた。

「……あら、起きたの？」

気配に気づいて、小柄な人間……綾は、桜井へ振り返つた。

綾はショーツ以外着ていなかつた。少女らしく柔らかに伸びた手足とほんの僅かにくびれた腰周り、むき出しになつた胸、ほとんど裸であるという点を除けば、どこにでもいる少女だつた。

ただし、その身体が血まみれになつていなければ。

ただし、綾の左手に、首から下が無い人間の頭部が握られていなければ。

元は女性だつたのだろう。綾は長い髪を無造作に掴み、だらりと垂れ下げていた。無くなつた首から、血が流れ落ち、地面に吸い込まれていつた。

首だけになつた遺体を見て、桜井は声にならない悲鳴を上げた。

「…………つ、あ……あああ！」

「あ、これ？ 驚いた？ あんた達仲良かつたもんね……友達がこんな姿になつて悲しい？ それとも嬉しい？」

それは、首だけになつた富北の姿だつた。

目は恐怖で見開かれ、開いた口から舌が垂れ下がり、見るものに恐怖を与えるオブジェに変わり果てていた。

親友の変わり果てた姿を見て、桜井は恐怖のあまり綾から視線を外した。

それがさらに桜井に恐怖を与える結果になつた。

「…………み…………みん…………み…………な…………」

綾の回りに転がっている死体。一人一人、全て見覚えのある顔だつた。かつてあのホテルで、あの部屋で、一緒に居た人達なのだから。

皆が皆、出来の悪い人形になつていた。

あるものは腰が正反対を向いて、腹部が消失している者。あるものは手足が引きちぎられ、胴体が無造作に捨てられている者。

共通していることは、全員が殺された死体であること。それら全て、綾が行ったということ、それらの死体には、一人残らず首から上が無くなっているということ。

「やっぱり食事って大切だよね。よく動いて、よく食べる。当たり前のことだけど、とっても素晴らしいことなんだよね」

綾は持っていた富北の首を放り捨て、一步、また一步、桜井に近寄る。

桜井はその様子を黙つて見つめた。逃げようと思つても、桜井の身体は凍りついたみたいに指一本動かせなかつた。

「知ってる？ 人間って牛とか豚とかと一緒に、場所によつて全然味が違うんだ。筋肉も、内臓も、血液も、人それぞれで全部違う」「まるで明日の天氣を話しているかのように、気さくに綾の話は続く。

桜井は体中の震えをとめることができなかつた。顎は壊れたように規則的に歯と歯を打ち鳴らし、体内から漏れ出了た尿が辺りに異臭を放つた。

綾が一步近づいてくる。その分、自分に死が近づいてきていると、桜井は麻痺した頭で考えていた。

きっと、おそらく、絶対、確實に彼女に殺される。

四肢を引きちぎられて死ぬのだろうか。

それとも、首をもがれて死ぬのだろうか。

それとも、あの男子のよう、頭を吹き飛ばされて死ぬのだろうか。

「でも、やっぱり一番美味しかったのは喜一だわ。きっと……うん、これからも、喜一以上の者に出会えることはないでしょうね」どちらにしろ、桜井は心のどこかで理解していた。

もう、好物のお菓子も、好きなアイドルの歌も、お気に入りのリ

ツプも、使えなくなるのだということを。

そして、桜井の前に綾は立った。不思議と、綾の身体からは血の臭いも死臭も、臭わなかつた。

綾は右手を振りかぶつて……止めた。

「最後に言つておくことない？ 遺言くらいなら聞いてあげないわけでもないわ」

「……た、た……たす……け……けて」

「そう、それが遺言ね。それじゃ、さようなら」

綾は振りかぶつた右手を桜井の頬に張つた。

ブチッと嫌な音を立てて、桜井の頭部が地面を転がつた。次いで、むき出しになつた桜井の首から、噴水のように血が噴出した。噴出した血がどんどん桜井を汚していく。

綾はそれには目もくれず、地面に落ちた桜井の髪と、先ほど放り捨てた宮北の髪を掴んだ。

そして、桜井の背後にそびえ立つ大木に、視線を向けた。

「…………さよなら」

全てを見届けた大木に別れを告げ、綾は一人山を降りた。

首を適當な路地裏に捨てた綾は、一人歩いていた。

宮北を連れ去つてから3日、桜井の場合は半日。おそらく宮北の方は親が捜索願をだしているだろう。

なんとか彼らが自分のことを話す前に、始末できてよかつた。綾は安心した。

おそらく、たとえ彼らの内の誰かが話したとしても、誰も信じなかつただろう。それに、話してしまつたら確實に世間の視線は、彼らの首を絞める結果になる。

だが、万が一にも彼らが綾のことを話し、一人でも彼らの話を信じる者が表れた場合、それがどういう事態を招くか綾には分からなかつた。

だから、どんなに空腹が身体を蝕んでも、綾は真っ先に彼らの口を封じることを選んだ。陽炎のように頼りない可能性でも、摘み取つておきたかったからだ。

このとき、運命は綾に味方した。

一人目、二人目、一人ずつ、確実に始末していくことが出来たのだ。

一度でも見付かってしまえば終わり。綱渡りのような状況の中、綾は目的を達成していくことが出来た。

結果、首尾よくホテルの事件に遭遇した生徒達全員の口を塞ぐことができた綾は、ふう、と肩の力を抜いた。

「これでやっと自由に動くことができるようになつたわ。下手にあの事件のことを話されてしまつたら、後々面倒なことになりそうだものね」

しかし、それでも綾のこれからのは課題はまだまだ残っていた。

まず普通なら、住む所と、服と、食料と、当面の資金の確保が必要になる。

まず住む所はいらない。

綾の肉体は、食事さえしつかり取つていれば、睡眠を必要としない。綾はそのことを、ここ数日之内に知ることができた。

身体の汚れであり、人間が必ず出す体内の廃棄物である垢も、出なくなつた。

どういう理屈でそうなつているかは知らない。綾の肌は常に風呂上りみたいに滑らかで、乳液を塗つているみたいにしつとりと潤い、うつすらと甘い匂いを放つていた。

おまけに身体に付着した血等の汚れも、皮膚表面から吸収され跡形もなくなつてしまつ。氷点下の寒空の中でも全く辛く感じない綾にとって、住居を構えるということは、行動に制限を与えるだけだった。

次に、服。これは何かと必要になる。

食事の際、どう気をつけていても服や下着が血で汚れてしまうことがある。服を脱いで、パンツ一枚で食事を取つても、そうなることがある。

綾の身体 자체はいくら血で汚れても数秒から数分で吸收されてしまうため、気にしなくていい。

だが、服には血の跡が残つてしまつ。血は一度付いてしまうと、なかなか汚れと臭いが落ちない。

綾自身、喜一を食べたあの日から、羞恥心を感じることが無くなつてしまつていたので、汚れてしまえば後は裸、でも構わなかつた。もし、裸で街中を散歩する事態に陥つても、綾は恥ずかしいとは感じなかつただろう。

綾にとって、他人とは全て餌でしかない。鳥や犬に裸を見られて羞恥心を覚える人がいないと同様、綾にとってもはや人間とはその程度の認識だつた。

だが、それでも綾は人間の脅威を重視していた。単体ではなく、群体で行動する彼らの底力の前では、たとえ綾でも勝ち目はないだろうと分かつていただ。

そのために、人間に注目されない程度に見た目を彼らと近づけなくてはいけない。

結果、服はどうしても必要になつてしまうのだ。

次に食料だが、これはどうしようもない。

何人か殺して保管しておけば、綾は一度そう考えたが、すぐに諦めた。

なぜなら、死体の腐食の速さは予想以上に早いからだ。

当然だが、主が死んでしまうと体内の免疫細胞である白血球も死滅する。雑菌を殺す役目を担つていた白血球が機能しなくなると、人間の肉体は雑菌にとって最高の苗床に変わつてしまつ。結果、数日で人間の肉体は雑菌の塊になつてしまつのだ。

いくら綾でも、腐臭を放ち始める人間を食べたいとは思えない。

そのとき、そのとき、臨機応変で行くしか方法は無くなっていた。

最後に、当面の資金。これはどうにかして手に入れたい。

喜一を殺した人達を探すためには、どうしても金が必要になるからだ。

だが、現在綾は死人ということになつていて、バイト等をして金銭を稼ぐことはできない。それ以前に、連帯保証人になる相手がないので、仕事をすることができない。

ならば、適当な人から金品を巻き上げて資金を稼ぐか、と聞かれれば綾は、はつきりと、否定しただろう。

綾が人を襲つて捕食するのは、生きるため。それだけでなく、綾にとつての愛しの兄である喜一は、決して誰かを脅して金を取らなかつたのも理由の一つだ。

といつても、綾が見ていないところで恐喝等もしていたかもしない。

しかし綾の知る限りでは、非合法で許されない商売をしていたが、決して誰かを脅して金を稼ごうとはしなかつたのだ。

もし綾が力ずくで金を手に入れたとき、喜一がいたら頬を張り飛ばしても止めたかもしれない。そう思うと、綾は行動に移せなかつた。

だから、金を手に入れるのなら、正当な報酬として手に入れたいと綾は思つてゐる。けれども、それは不可能に近い。

ならば、捕食した人間から金品を奪うしかない。その考えに思い至つたとき、綾の心にどうしても納得できないものが残つた。

綾は国道へ続く道をひたすら進んでいく。

横を何台も車が通り過ぎていき、その度に綾の身体をライトが照らす。

既に陽は落ち、辺りは薄暗く、静かになつていた。たまにすれ違う通行人も、今は全く見かけなくなつた。

綾の頭は、新しい街に行つた後の見の振り方をどうするかということで、いっぱいになつていた。

「とりあえず食事と、服には目を瞑るとして、問題は資金だわ。あいつらの情報を集めるにしても、どうしても資金が必要になる。どうにかしてお金稼ぐ方法を見つけないといけないわ」

恐喝等の行いで金を稼ぎたくない綾にとって、それ以外の方法を選びたいが、皮肉にも、恐喝という方法が資金を調達しやすい。もしくは捕食した人間相手から奪うという手だが、これも資金を調達しやすい。どちらにせよ、無理やり奪うしか方法がないのが現状だ。

ならばどうする？

綾は一人自問した。

考えても、考えても、綾の頭には良い考えが思いつきそうになかった。

「…………はあ、どうしようかな…………ん、あの入つて」

ふと顔を上げて、前方を走る車に視線を向ける。

一瞬、車の助手席に座っていた男と目が合つた。どこかで見覚えがあつたような気がしたけど、思い出せない。

結局、すぐにその男のことは忘れることにした。

「…………ああ～もう、本当にどうしようかな～。あ、そうだ……あなたも何か良い案を考えなさいよ」

綾の頭の中に彼女がいることを思い出した綾は、さつそく意識を集中させた。

途端、頭の中心部に何かが動き回つてゐるような違和感を覚えた。そして、頭の中から声が聞こえてきた。

(ごめんなさい……綾。私にも良い考えが思い浮かばないの)  
残念なことに、声もどうしたらいいか検討も付かなかつた。

『…………とりあえず、一緒に考えましょう。国道を通つて、高速公路

を通つて、適当な都市に着く頃には何か良い考えが浮かぶわ』  
(そうね、二人で考えれば、きっと何か思いつくかもしないわね)

『……ええ、きっと、たぶん、もしかしたら思いつくかもしないわね』

綾と彼女、一人は揃つて後ろ向きだった。

(…………どうしましょう)

『…………どうしようか…』

空高く月は上り、星達がイルミネーションを描き始めても、二人に妙案が浮かぶことはなかった。

## 第九話・決着（後書き）

これにて『綾』の話は終了です。  
テーマは伏せておきますが、少しでもなにか感じることがあるなら、  
幸いです。

しつこいくらいに注意書きを書きましたが、グロテスク描写は精神  
に強い負担をかけてしまつので、そういう意味で行っています。

最後に、もう一度注意書きをしておきます。

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架  
空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責  
任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9840f/>

---

綾

2011年3月6日16時40分発行